

飛落及飛香落戦の研究全

302

128

6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

始





302  
128

飛落及飛香落戰の研究  
全



名人關根金次郎監修



飛落及飛香落戰の研究



東京金星堂版



目次

飛車落定跡……………七段 小泉 兼吉

飛香落定跡解説……………六段 飯塚勸一郎

飛車落定跡 (上手居飛車の戦法)

講師 七段 小泉 兼吉

飛香落の將棋は、上手居が端に疵がある為め其筋の受けに苦心するが、飛車落となつて香車が一枚加はると、端に缺陷がないため、守勢一方に傾かずとも、場合に依つては攻勢を取る事が出来るだけ、下手に取つても紛れが多く、その指方も大々敷くなつて来るのである。それに飛車落は六段の差で、其の力も相當接近して来るから、總て將棋としての範圍も廣くなつて来るのである。飛車落の攻め方には六筋飛車と居飛車の二つの指方があつて、特に六筋飛車の如きは、其變化が極めて複雑で、紛れ易く、六五歩突きの場合の良否一つが、直ちに全局に影響するといつても過言でない。故に我々はよく初心者の口から往々斯ふ云ふ言葉を耳にする事があるのである。「どうも飛車落の定跡は變化が廣くて判り難い。寧ろ角落の方が指易い」と。一應

飛車落定跡 (小泉兼吉)

は尤もであるが、それは即ち定跡の研究が不十分である證據である。居飛車の指方は、力戦となる虞れはあるが、下手としては却つて紛れが薄いと、私は常に思つてゐる。それで私は特に自ら望んで、居飛車の指方を選んだのである。以下號を逐ふて、古來よりの指方に、實戦から得た經驗と、新研究を加へた新定跡を講述して讀者の参考に資するつもりである。

- 七六歩 ●三四歩 ●六六歩 ●八四歩
- 七八金 ●八五歩 ●七七角 (第一變化)
- 六二銀 ●六八銀 ●五四歩 ●五六歩
- 三二銀

【講義】上手七六歩及び下手三四歩は、大切な角の動きを計る意味に於て、最初期に開けるのが常道である。上



手六六歩と角筋を留めたのは、駒落の場合には奇謀に依らざる限り、敵に角を替られては、以下陣容を整へるに角打の缺陷が生じて困難であるから、譜の如く角替を避けるのが穩便である。下手八四歩と突いて居飛車の戦法を選んだ

(面局の迄角七七は圖一第)

下玉群 子々

九	皇	将	龍	馬	王			将	皇
八						龍	馬		
七	飛	飛	飛	飛	飛		飛	飛	
六						飛	飛		
五							歩		
四			歩						
三	歩	歩		歩	歩	歩	歩		歩
二		角				銀		飛	
一	香	桂	銀	金	玉	金	桂	香	
	一	二	三	四	五	六	七	八	九

ナ ナ 駒持手下

のは、普通の定法は六二銀、或ひは六四歩と突いて、其の筋より攻勢を採るのであるが、其れは金子六段が詳しく講述されるから、私は標題の如く居飛車の攻撃法を、順次説明

の準備である。上手五六歩と應じたのは、大切な五筋の占められては一大事であるから、譜の如く位負せぬやうに受けるのが至當である。下手三二銀と立つたのは、引角にして飛車先の歩を切ると同時に、角をも替へる策戦である

- 第二圖面三二銀以下の指手
- ⑥六七銀 ⑥三二角 ⑥四八玉 (第二變化)
  - ⑥八六歩 ⑥同歩 ⑥同角 ⑥同角
  - ⑥同飛 ⑥八七歩 ⑥八二飛 ⑥三八玉
  - ⑥三二銀

【講義】 上手六七銀は、六筋を守る意味である。下手三二角は、豫定の行動である。上手四八玉と移したのは、角替へを避ける意味で六五歩と敵陣を狙つても、その時八六歩と攻められると、矢張り角を替る一手になるから、玉を安全地に圍ふ準備を立てたのである。下手八六歩は、豫定の行動である。上手同歩は、至當である。下手同角は、豫定。上手同角の處で、八八角と交換を嫌へば、六八角と成られて全滅するから、止むを得ないのである。下手同飛及

上手七八金は、左翼の防備である。下手八五歩は、飛先の歩を替へる目的である。上手七七角と上つたのは、飛先の歩を切らせぬ趣向である。この手で六七銀と立つ手は、

(面局の迄銀二三は圖二第)

下玉群 子々

九	皇	将	龍	馬	王			将	皇
八						龍	馬		
七	飛	飛	飛	飛	飛		飛	飛	
六						飛	飛		
五							歩		
四			歩		歩				
三	歩	歩		歩	歩	歩	歩		歩
二		角	銀			銀		飛	
一	香	桂	金	玉	金	桂	香		
	一	二	三	四	五	六	七	八	九

ナ ナ 駒持手下

第一變化にて解説する。下手六二銀は、敵の形勢を窺つて徐々に對抗の準備である。上手八八銀は、五六七の三筋を守備する準備である。下手五四歩は、中央の位取りと引角

び上手八七歩は、必然的指手である。下手八二飛の處で、八四飛と中段に構へる手もあるが、角を替へた關係上後に、飛車に當てられて角打の疵が残るから、低く引くのが

(面局の迄銀三三は圖三第)

下玉群 子々

九	皇	将	龍	馬	王			将	皇
八						龍	馬		
七	飛	飛	飛	飛	飛		飛	飛	
六						飛	飛		
五							歩		
四			歩		歩				
三	歩	歩	銀	歩	歩	歩	歩		歩
二		角				銀		飛	
一	香	桂	金	玉	金	桂	香		
	一	二	三	四	五	六	七	八	九

ナ ナ 駒持手下

至當である。上手三八玉は、安全地に移すと同時に、三九銀を順次繰上る意味である。下手三三銀は、漸次陣容を整備する準備である。



- ▲四八銀 ▲五二金 ▲五八金 ▲四二玉
- ▲五七銀 ▲三二玉 ▲三六歩 ▲九四歩
- ▲七七桂 (第三變化) ▲九五歩 ▲七五歩
- (第四變化) ▲一四歩

【講義】 上手四八銀は、前述の如く漸次右翼に繰上つて攻防に備へる準備である。下手五二金は、徐々に陣形を整へて對抗の方針である。上手五八金と上らず、直ちに五七銀と上れば、七九角打を狙はれて、八八歩と打たれ全滅するから、一旦五八金と上つたのである。下手四二玉と移す前に、一旦七四歩と突いて、桂を捌く順を作つて置いて差支へないが、角を利用して飛車の小鬘を狙はれるやうな味が出来来るから、早く玉を圍つたのである。然し七四歩と突いたからとて、決して悪いのではなく、一利一害であるから後にその方を説明する。上手五七銀は、敵の模様によつては、左右何れかに上つて働く準備である。下手三二玉は、豫定の圍ひである。上手三六歩は、後に機を見て敵玉頭を攻める含みである。下手九四歩は、手駒を用ひて八、九兩筋より攻勢の含みである。上手七七桂は、漸次六、七兩筋に盛り上つて位を張る準備である。此の處で九六歩と受ける手は、別に講述する。下手九五歩は、前述の含みである。上手七五歩は、敵に八九兩筋を攻められた時、七六銀と上

(面局の迄歩四一は圖四第)

▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲
▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲
▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲
▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲
▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲
▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲
▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲
▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲

つて八筋を受ける含みと、二八角と打つて飛車の小鬘を狙ふ含みを兼ねたのである。此の處七五歩と突かず、八八金と寄つて堅く端を受ける手もあるが、それは別に變化とし

て講述する。下手一四歩と玉の機を廣くしたのは、直ちに九六歩と端を攻めても善いが、敵は攻めさせて軽く受け流すと云ふ方針のやうであるから、譜の如く一四歩と突いて模様を見たのである。是に對して上手が八八金と堅く指せば、一五歩と突き進めて端の位を取る含みである。

第四圖面一四歩以下の指手。

- ▲一六歩 ▲九六歩 ▲同歩 ▲九七歩
- ▲同香 ▲九八角 ▲七六銀 ▲八九角
- ▲六八金 ▲九八馬 ▲七九角 ▲六四歩

【講義】 上手一六歩と端を受けたのは、八八金と寄る手もあるが、敵に一筋の位を占められては面白くないから、九筋は敵に攻めさせる方針で、譜の如く應じたのである。下手九六歩は、豫定の攻めである。上手同歩は、當然である。下手九七歩は、敵香を吊り上げて角打を作る意味である。上手同香は、捨て置けば九六歩と走られて大變である。下手九八角は、豫定の攻めで、角金交換して飛車を侵入する含みである。上手七六銀は、八七角と成られては潰

(面局の迄歩四六は圖五第)

▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲
▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲
▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲
▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲
▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲
▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲
▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲
▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲

けに便はせる目的である。上手七九角は、九七香を保護する意味で、已むを得ない受けである。下手六四歩は、以下指手の如く漸次七筋の歩を替へて、攻勢を繼續する準備で



ある。

第五局面六四歩以下の指手。

- ▲九五歩 ▲六三銀 ▲九四歩 ▲七四歩
- ▲九三歩 ▲同 桂 ▲同 香 ▲同 香
- ▲八五桂 ▲八三飛 ▲七四歩 ▲同 銀
- ▲七五桂 ▲同 銀 ▲九三桂 ▲同 飛
- ▲七五銀 ▲七七歩 ▲同 金 ▲七六歩

にて下手必勝である。

【講義】 上手九五歩は、敵の歩切れに乗じて逆襲する含みである。下手六三銀は、前述の如く次に七四歩と突く含みである。上手九四歩及び下手七四歩は、豫定の行動である。上手九三歩成の處で、七四同歩と取る手もあるが、色々面白くない味が出来から、飛車の八二に居る内先手を以て、香を捌いたのである。下手同桂は、至當である。若し同香と取れば同香成同桂の時八六香と打たれて面倒になる。上手同香成の處で九四歩と打ちたい處であるが、其時八六歩と打たれて、勢ひ二枚替への結果になるから、先に

飛車先を留める含みに同香成と交換したのである。

下手同香は、至當である。上手八五桂は、飛車先を留めつゝ、七九兩筋に成込を狙つたのである。下手八三飛は、その受けである。上手七四歩は、反對に取り込まれる手を凌ぎつゝ、七三歩成、或ひは七五桂打を含んだのである。下手同銀は、前述の痛手を消して先手を取つたのである。上手七五桂は、八五銀と桂を只取りされては、全滅するから已むを得ない結果である。下手同銀は、先手を取つて肉迫する意味である。上手九三桂成は、七五同銀と取れば、八五飛と桂を取られて駒損となるから、譜の如く香を取るより致し方ない。下手同飛及び上手七五銀は、至當な順序である。下手七七歩は、先手に八九馬と遣入り、飛を成込んで一氣に寄せる好手段である。上手同金右は、甚だ辛い處であるが、八八金と當てれば同馬、同角、九八飛成と侵入されて矢張り絶望となる。下手七六歩は、前述の意味である。是れにて上手は敵に飛角を充分に活躍される願になるから、絶対に見込がないのである。

### 第一變化

第一變化八五歩以下の指手。

- ▲六八銀 ▲八六歩 ▲同 歩 ▲同 飛
- ▲六七銀 ▲八二飛 ▲八七歩 ▲五四歩
- ▲五六歩 ▲七四歩 ▲五八金 ▲六二銀

【化變一第】 (局面の迄歩五八は圖一第)

九	皇	飛	馬	香	王	香	馬	皇
八		飛	馬	香		飛	馬	
七	香	馬	香	王	香	馬	香	
六								
五				香				
四								
三			歩					
二	歩	歩		歩	歩	歩	飛	香
一	香	桂	銀	金	玉	金	銀	桂
	一	二	三	四	五	六	七	八

シナ 駒持手下

【講義】 上手六八銀と立つたのは、前局では七七角と上飛車落定跡 (小泉兼吉)

つて、飛車先の歩を切らせぬ手段を講じたのであるが、敵に引角の戦法を用ひられた結果、角を替られ以下敗局に終つたから、本局は態と飛車先の歩を切らせ、其の代り角を替らせぬ手段を講じて見る。下手八六歩は、隙さす一步を持つて徐々に攻勢を探る準備である。上手同歩、下手同飛は必然的指手である。上手六七銀は、七六歩を守つたのである。下手八二飛は、當然引くべき處であるから、先に引いたのである。此の處迂濶に八七歩と打たうものなら、それこそ大變である。即ち七七角、八二飛の時、八六歩と留められて、八七歩を只取られて了ふのみならず、充分に位を取られる。上手八七歩は、敵に八六歩と打たれる手を受けただのである。下手五四歩は、中央の位取りである。上手五六歩と應じたのは當然である。敵に五五歩と突かれ、五筋の位をとられては始終駒繰りが思ふ様にならず指し悪くなる。下手七四歩は、桂の捌きをつけた手で、敵に七五歩と突かれると六ヶ敷い將棋になるのである。上手五八金は、中央の堅めである。下手六二銀は、敵の形勢を窺つて徐々



に對抗の準備である。

第一變化六二銀以下の指手。

- ▲四九玉 ▲五一金右 ▲二八玉 ▲四二玉
- ▲四八銀 ▲三二玉 ▲三六歩 ▲四二銀
- ▲七九角 ▲四四歩 ▲四六角 ▲七二銀

【化雙一第】 (面局の迄銀二六は圖二第)

九	香	飛	王	王	飛	皇			
八			馬	馬	馬				
七	飛	飛	飛	飛	飛	飛			
六			飛	飛	飛				
五									
四			歩	歩	歩				
三	歩	歩			銀	歩			
二		角	玉	銀	金	飛			
一	香	桂	銀	金	玉	桂			
	一	二	三	四	五	六	七	八	九

歩 駒持手下

【講義】 上手四九玉は、玉を三八の安全地に移す目的で、下五二金右は、漸次陣容を整備する準備である。上

【化雙一第】 (面局の迄銀三七は圖三第)

九	皇	飛				飛	皇		
八			王	馬	馬	馬			
七	飛	飛	飛	飛	飛	飛	飛		
六			飛	飛	飛	飛			
五									
四			歩	歩	歩	歩			
三	歩	歩				銀	歩		
二		角	玉	銀	金		飛		
一	香	桂	銀	金			歩		
	一	二	三	四	五	六	七	八	九

歩 駒持手下

第一變化七三銀以下の指手。

- ▲二八角 ▲四三銀 ▲七七桂 ▲一四歩
- ▲一六歩 ▲四五歩 ▲五七金 ▲四四銀

飛車落定跡 (小泉兼吉)

手三八玉は、豫定の圍ひである。下手四二玉は、假令大駒落の棋戦たりとも、居玉にて攻勢を採つては、後に接戦となつた場合危険を及ぼすは必定であるから、本譜の如く安全地に納めて後、攻防手段を講ずるのが至當である。上手四八銀は、漸次繰上つて銀の威力を示す準備である。下手三二玉は、豫定の圍ひである。上手三六歩は、漸次角を四六に出して、飛車の小鬣を狙ふには、永く四六に居ては角を攻められる憂ひが生ずるから、深く二八に引いて繼續を圖る含みと、模様によつては四八銀を繰り出して、玉頭を攻める意味とを兼ねたのである。下手四二銀と立つたのは、別に早い攻め手のない限りは、三二に居ても効はないから、斯く上つて玉頭及び玉側を堅くする方が、後に至つて種々の徳が生れるから善い手である。上手七九角は、豫定の行動である。下手四四歩と自ら角道を止めたのは、一見面白くないやうであるが、角筋を通して置いても、直接面白い手段がないから、左翼に盛り上りつゝ、角を三二に引き落し然して右方に上つて攻勢を採る含みである。上手四六角は、

- ▲四六歩 ▲同歩 ▲同金 ▲四五歩

【講義】 上手二八角は、四六に置いたのでは、何時でも先手に四五歩と突き出される味が残るので、豫定通り深く引いて、漸次飛車の小鬣を狙ふ目的である。下手四三銀は陣容を整へると同時に、模様によつては引角にして、活用する含みを兼ねたのである。上手七七桂は、桂の働きを計る意味で、至當な順序である。下手一四歩は、玉の懐を広くしつゝ、角の活動範圍を廣めたのである。上手一六歩は、一四歩と同意味である。下手四五歩は、漸次其の筋に金銀を盛り上つて、壓迫を加へる準備である。上手五七金は、次に四筋の歩を替へて對抗する含みである。下手四四銀及び上手四六歩は、豫定、行動である。下手同歩は、捨て置けば四五歩と取られて、銀の位置が悪くなるから、至當な應手である。上手同金及び下手四五歩は、必然的指手である。

- ▲四七金 ▲三一角 ▲五七銀 ▲四二金



▲六五歩 ▲五二飛 ▲六六銀 ▲二二玉  
▲七五歩 ▲同歩 ▲七四歩 ▲八一銀

【講義】 上手四七金、下手三一角と引いたのは、直ちに五五歩と攻める手もあるが、七七桂と跳ねられて居る關係

【化變一第】  
(面局の迄歩五四は圖四第)



上、混戦になる惧があるから、譜の如く引いて自重したのである。上手五七銀は、四五六の三筋を堅めたのである。下手四三金は、四五銀に連絡を付けつゝ、玉を堅く圍ふ準備

下手居飛車の戦法上手七七角留

(面局の迄銀二八化變一第は圖五第)



第五圖は、前號掲載の第一變化上手七四歩に對して下手が八二銀と引いた局面である。本號に於てそれ以下の手順を述べる事にする。

▲六四歩 ▲同歩 ▲七五銀 ▲五五歩  
▲同歩 ▲同銀 ▲五六歩 ▲四六銀

備である。上手六五歩は、持歩を利用して、漸次七五歩と突いて飛車の小鬘を攻める準備である。下手五二飛と轉じたのは、八二に居ても格別効がないのみならず、二八角を利用して、七筋を攻められる憂ひが出来るから、四筋より肉迫する含みを以て、先に避けたのである。上手六六銀は、敵に五五歩と突かれては、大切な角筋が止つて非常に悪くなるから、それを豫防しつゝ、角の成込を作る含みを兼ねたのである。下手二二玉は、別に早い好手が無いから次に三二金と堅く締める意味を以て、敵の模様を窺つたのである。上手七五歩の攻めは豫定の行動で、角の活躍を計る含みである。下手同歩の處で、三二金と締める手もあるが、歩切れにさせて、敵に攻めさせる意味を以て取つたのである。上手七四歩は、豫定の行動である。下手八一銀は至當である。

▲四八金 ▲六五歩 ▲六四歩 ▲五四金

【講義】 上手六四歩は、六六の銀を七五に捌き、徐ろに敵陣に迫る意味である。此六四歩と突く手は些か無理かも知れないが、他に良い手もないし、その上緩い事をしてゐたのでは、下手に三二飛と迫られて、玉頭より一氣可成に攻められると、金銀が玉に離れてゐる爲受切れないのである。下手同歩は、當然の應手である。若し同角と取つて角の交換を挑めば、同角、同歩、六三角と打たれて面白くない。上手七五銀は、六四歩突きの繼續である。下手五五歩は、自陣を守りつゝ、敵を攻めた手である。といふのは、若し此處で五五歩と突かずに他の手を指せば、上手に六四銀と出られる手が厳しいのである。そこでその六四銀出を防ぐ意味で、譜の如く五五歩と突いたのである。上手同歩は已むを得ない。捨てておいては手もないし、その上敵から五六歩と取込まれると潰れて了ふのである。といふのは、敵の五六歩を金で取つても銀で取つても、下手に七六歩と打たれる手が生じて桂を只取られて了ふのである。といつ



て、敵の五六歩に對して五八歩と受けたのでは、五五銀と進まれて苦戦に陥る事は明かである。下手同銀は、豫定の行動である。上手五六歩は、當然の受けである。捨て、おいて、敵から四六歩と突かれては問題にならない。下手四六銀は、少し無理の様であるが、そうではないのである。四六歩と突いては、五七金と寄られて結局其歩が只になるし、といつて四四銀と引くのは、敵に六四銀と進まれて六ヶ敷くなるのである。上手四八金は、次に四七歩と打つて銀を殺す意味に軽く體をかしたのである。同金と取つては、同歩、同角、七六歩と打たれて忽ち苦境に陥るのである。下手六五歩は、敵に六四歩と打たれて一寸御手傳ひの様な氣がするが、決してそうではない。此處で緩い事をしるたのでは、四七歩と打たれる手があるだけ間に合はない。上手六四歩は當然である。下手五四金と上つたのは、上手に六三歩成を強要した非常に殿しい手で、此手があればこそ、下手も六五歩と突いたのである。

第一變化五四金以下の指手。

處で、三二飛と逃けても悪くはないが、四八角切りの味があるから、強く豫定の行動を採つたのである。上手五二とは至當である。下手三二金は、弱いやうであるが、敵に必死を掛ける事が出来ないから、安全を計つたのである。上手四一飛は、機を見て四二と寄つて迫る準備である。下手七六歩は、後に七七歩と成つて、金を逆にする好手である。上手八五桂は、七六同銀と取ると四八角と切られて自玉が詰むので、已しを得ず跳ねたのである。下手四八角切りは、七七歩成を利用して必死を掛ける目的である。上手同玉、下手五七銀打は、豫定の寄せ順である。上手五九玉、下手七七歩成は、次に五八歩と打つて、詰める目的である。是れにて上手方防禦の手段が盡きたのである。

第二變化三一角以下の指手。

- 飛四八銀 飛八六歩 飛同歩 飛同角
飛同角 飛同飛 飛八七歩 飛八一飛
飛三八金 飛三三銀 飛五八玉 飛五一金

【講義】 上手四八銀は、前局では四八玉と立って、玉を飛車落定跡 (小泉盤吉)

- 飛六二歩 飛七五角 飛五二二
飛四一飛 飛七六歩 飛八五桂 飛四八角
飛同玉 飛五七銀 飛五九玉 飛七七歩

(面局の迄金四五化變一第は圖六第)



歩歩歩歩 駒持手下

【講義】 上手六三歩成は、假令如何なる痛手を蒙らうとも、敵に六四金と大切なる歩を取られては、絶對に見込が無くなくなるから、局面上當然な指手である。下手七五角の

(面局の迄角一三化變二第は圖七第)



シナ 駒持手下

で、八七歩と打てば、七七角成、同桂、二八角と打たれて全滅する。下手同飛は豫定である。上手八七歩は、至當である。下手八二飛は、八四飛と中段に構へる手もあるが、



角を替つた關係上、何か機會ある時に飛車に當てられる憂ひが残るから、深く引いたのである。上手三八金は、二八角打を豫防したのである。下手三三銀は、陣容を整備す

(面局の迄右金二五化變二第は圖八第)



る準備である。上手五八玉は、豫定の圍ひである。此の處先に五七銀と立てば、八八歩と打たれて全滅する。下手五二金は、中央の備へである。斯かる局面で初心の方は、成角を造る意味に八八歩と打つて同金と取らせ、然して七

のである。上手六六銀右は、其筋の位を取りつゝ、敵の仕掛を待つ意味と、場合に依つては五五歩と突いて、手中に一步を持ち、然して徐々に攻防手段を施す含みを兼ねたのである。下手四五歩は、其筋に勢力を集中する意味と、敵の様子を窺つたのである。

(面局の迄歩五四化變二第は圖九第)



第二變化四五歩以下の指手

二八角 八四飛 九六歩 四四銀

飛車落定跡 (小泉兼吉)

九角と打つ事を屢々見受けるが、歩損をして成角を替へても、其角を次第に壓迫される場合が多いから、前後の關係を能く見る事が肝要である。

第二變化五二金右以下の指手。

七七桂 四二玉 五七銀 三二玉

六五歩 四四歩 三六歩 四二金

七五歩 四一金 六六銀 四五歩

【講義】上手七七桂は、桂を捌きつゝ、漸次六七兩筋の位を張る準備である。下手四二玉は、居玉は禁物であるから、三二の安全地に移す目的である。上手五七銀は、銀の働きを計る準備である。下手三二玉は、豫定の圍ひである。上手六五歩は、左翼に位を張る意味である。下手四四歩は、目下の局面では早い攻め手が無いから、堅く半槽に圍ふ準備である。上手三六歩は、其の筋の位取りと、後に二八角と打つて飛車の小鬣を狙ふ準備である。下手四三金は、豫定の圍ひに取り掛つたのである。上手七五歩は、二八角打の含みである。下手四二金上るにて、半槽の圍ひが出来た

九五歩 三五歩 同歩 (第二變化甲)

同銀 七六銀 四六歩 同歩

一四角

【講義】上手二八角は、次に七四歩と突いて、飛車を攻める意味である。下手八四飛は、敵に七四歩と突かれては一大事となるから、それを豫防したのである。上手九六歩と突いたのは緩慢のやうであるが、直ちに七六銀と上つて飛車を攻めに行つては、九四角と打たれて悪くなるので、其の角打を消す意味に突いたのである。下手四四銀は、豫定の行動で、漸次角筋を留める含みである。上手九五歩の處で、先に七六銀と上れば、九四角、六七玉と受けた時に、八六歩と攻められる願となつて、非常に悪くなるから、最初の目的通り角打を消したのである。下手三五歩は、三四兩筋より攻勢を探る意味である。上手同歩は、歩損をせぬ意味に應じたのである。此處で七六銀と指す手は、後に變化として述べる。下手同銀は、豫定の行動である。上手七六銀は、八五銀と上つて次に七四歩と突き、角の活動を計



る準備である。下手四六歩は、角の活動を妨害する意味と、一四角打を狙ふ味を兼ねたのである。上手四六歩を同歩と取つたのは、捨て置けば、矢張り一四角と打たれて、一層悪くなるから、辛い處であるが已むを得ないのである。下手一四角は、豫定の行動であるが、此の場合手筋である。

(面局の迄角四一化變二第は圖十第)



第二變化一四角以下の指手  
飛六八玉 五五歩 同銀 二四飛

【講義】 上手六八玉の處で、四七金と上れば、三六銀と出られて一層悪い。下手五五歩は、敵に八五銀と飛車を攻められては、少し面倒になるから、二筋に轉換して活動する含みである。此の處五五歩と突かないで、一見三七歩と打つて、手順に角銀を活躍したい處であるが、其の時三七同金と取つて呉れば、三六銀、同金、同角にて必勝となるが、三七歩を同角と取られると、三六銀と出ても二六角と覗かれて、六二銀に當るから面白くないのである。上手同銀は、飛車を二筋に廻らせぬ豫防は絶対にないから、此局面としては致し方ない。下手二四飛は、次に三六銀と出て、飛車の成込を計つたのである。上手四五歩は、次に四六銀と引いて、角を活動する意味である。此の處四五歩と突かないで、三六銀出を防ぐ意味に三七歩と打てば、五四歩、六六銀、四六銀と進まれて矢張り絶望となる。下手三四飛は、三八飛成を狙つて、一氣に寄せる含みである。是れにて上手は防禦の手段がないのである。若し此次三七歩

【講義】 上手七六銀は、前局では歩切の爲、敵の三五歩の仕掛を同歩と應じたのであるが、本局は直ちに七六銀と上つて、角の活動を計つて見る。下手八六歩の目的は、敵が同歩と取れば、同飛、八七金、七六飛、同金、七八角、八六金、六七銀と打つて肉迫する含みである。上手八五桂は、敵の八六歩を取つては、同飛と走られて衛中に陥るから、飛車先を留めたのである。又八五桂と留めず、八五銀と出て先手を取れば、強く同飛と切られ、同桂、七六角、六八玉、八七歩成、六七金、八六と引かれ、其時八二飛と打つても、八七角成、六二飛成、七六との順に迫られて甚だ面白くない結果となるのである。下手四六歩の突き出しは、以下指手の如く、敵に同角と取らせ、其間に乗じて駒徳を計りつゝ、陣容を亂す含みである。上手同角と取つたのは、捨て置けば四七歩成、同金なれば三八角と打たれる。又四七同玉なれば、六九角と打たれて全滅してしまふ。下手八九角は、豫定の行動である。上手六八玉の處で、七

(迄歩五三(甲)化變二第は圖一十第)



と受ければ、五四歩、六六銀、四六銀にて、次に四七銀成の含みで指せで必勝である。

第二變化申三五歩以下の指手。

- 飛七六銀 八六歩 八五桂 四六歩
- 飛同角 八九角 六八玉 八七歩
- 飛同金 五六角 七七金 八六歩
- 飛五七銀 八九馬 九六香 三三桂



七金と立つても、八七歩成、同金、五六角成と指されて矢張り悪い。下手八七歩成は、角の活動を付ける意味である。上手同金の處で、同銀と取れば、八五飛、八六歩、八四飛七九玉、七八角成、同玉、五三銀と上つて姿を善くし、次に五五歩と突いて攻める味があるから大いに優勢である。下手五六角成は、豫定の行動である。上手七七金の處で、六七銀と引けば、四六馬、同歩、八五飛と胸徳されて悪い。下手八六歩は、次に八七歩と成つて、胸徳する意味である。上手五七銀は、八七歩成を豫防したのである。此の處、五七歩と打つ手もあるが、四六馬、同歩、八八角と打たれて次に八七歩成の先手が残るから、銀を引いたのである。下手八九馬は、香を取つて徐々に迫る意味である。上手九六香は、攻守共に適手がないから、駒損を避けたのである。下手三三桂は、中央より攻める意味である。上手六六銀は四五桂と跳ねられては、甚だ面白くない順になるので、先に避けたのである。下手五五銀は、手駒を集めて肉迫する含みである。上手同銀は、若し角を逃げれば、六六銀と取

### 四四歩

【講義】 上手九六歩は、前號では敵の九四歩に對し、端を受けずに、七七桂と跳ねたのであるが、本號では端を受けず、桂の道を開いたのである。上手六五歩は、敵の模様を依つては六六銀と立ち、然して角打を利用して、飛車の小鬘を狙ふ意味である。下手四四銀は、次に三五歩と突いて玉頭より攻める意味と、銀の働きを廣くしたのである。上手四六歩は、四四銀を壓迫する意味である。此の處四六歩と突かず、七七桂と跳ねて飛車を攻める手段もあるが、それは變化として別に述る。下手三五歩は、敵に四七金と立たれてから突いたのでは、面白くないから、先に攻めたのである。上手四五歩は、敵銀を逆にする目的である。下手同銀は、至當な指手である。上手三五歩は、豫定の行動である。下手三六銀は、敵に四七金と立たれては、次に四六歩打があつて、大切な銀が犬死になつて了ふから、此の場合當然な順序である。上手三四歩は、機を見て玉頭よ

(迄歩四九化變三第は圖第二十第)

九	星	飛					飛	星
八			王		馬	馬		
七	飛	飛		飛	飛	飛	飛	飛
六			飛		飛			
五								
四			步		步			步
三			步		步			步
二			銀		玉		金	飛
一	香	桂		金				桂
	一	二	三	四	五	六	七	八

歩角 駒持手下

- 九六歩 七四歩 六五歩 四四銀
- 四六歩 (第三變化甲) 三五歩 四四銀
- 同銀 三五歩 二六銀 二四歩

り込まれて、非常に悪くなる。下手同歩は、豫定である。此次下手は五六歩と突いて、飛車及び桂の利用を計り、然して中央より迫れば殆んど必勝の局面となる。

第三變化九四歩以下の指手。

(迄歩四四化變三第は圖三十第)

九	星	飛					飛	星
八			王		馬	馬		
七	飛	飛		飛	飛	飛	飛	飛
六			銀		飛			
五								
四			步		步			步
三			步		步			步
二			玉		金		銀	飛
一	香	桂		金				桂
	一	二	三	四	五	六	七	八

歩歩角 駒持手下

- 四八金 四二金 七七桂 九五歩
- 五八角 四五銀 九五歩 三四銀
- 九四歩 九七歩 同香 九六歩
- 同香 八六歩 九三歩 同桂

り攻める含みである。下手四四歩は、捨て、置いては後に危険を及ぼすから、安全を期する目的である。

第三變化四四歩以下の指手。



九四歩 八七歩 九三歩 八六飛  
にて必勝である。

【講義】 上手四八金は、玉頭の豫防である。下手四三金は、豫定の行動である。上手七七桂は、動もすると八八歩と打たれて、同金と取つた時、七九角打の手が残るからそれを避けつゝ、敵の模様を窺つたのである。下手九五歩は敵が同歩と取れば、九八歩、同香、八九角と打つて駒徳をすると同時に、飛車の成込を計る含みである。上手五八角と打つたのは、九五同歩と取る手は絶対にないから、六七銀に連絡を付けつゝ、先手を取つたのである。下手四五銀と退却したのは、敵に武器を與へずして、最も安全に勝を得る意味に引いたのである。但し此の處四五銀と逃げずに、強く九六歩と取り込んでも必勝となる。其の手順を一寸示せば、九六歩、三六角、九七歩成、六九角、九八歩と打つてと金を作り、徐々に八九兩筋より攻めれば、敵は銀一枚の手駒にて、角の働きが甚だ鈍いから、矢張り必勝となる。上手九五歩は、豫定の行動である。下手三四銀は、

な捌きである。下手同桂は、至當である。上手九四歩の處で、同香成と指しても同香、八五桂と打てば九七香成と指されて絶望である。下手八七歩成は、予定の行動である。上手九三歩成は、止むを得ない順序である。下手八六飛にて、飛車の活動が確實となつたから必勝である。

第三變化甲四四銀以下の指手。

- 七七七桂 四二一金上 六六六銀右 三五五歩
- 同歩 同銀 二八角 七三桂
- 七五歩 八四飛 七六銀 三六銀

【講義】 上手七七桂は、前局では四六歩と突いて、四四銀を壓迫の方針を採つたのであるが、本局は七七桂と跳ねて、飛車を攻める含みに指して見る。下手四二金上は、敵玉を攻撃するに先立つて、自玉の頭が手薄になるから堅く備へたのである。上手六六銀右は、飛車を攻める準備である。下手三五歩は、豫定の行動で、最も薄い玉頭より攻める意味である。上手同歩は、至當である。下手同銀は、豫定である。上手二八角は、七五歩突きを利用して

歩を多く持つて、飛車の活動を計る含みである。上手九四歩は、他に適當な手がないから、此の場合至當な順序である。下手九七歩は、豫定の攻めで、香を吊り上げて飛車の侵入を企てたのである。上手同香は、必然的指手である。下手九六歩は、豫定の行動である。上手同香は、當然な應手である。下手八六歩は、九六飛廻りを狙つたのである。上手九三歩成は、八六歩を取る手は絶対にないから、當然

(送銀四四(甲)化變三第は圖四十第)

九	星	飛						飛	星
八			王		馬	馬			
七	飛	飛		飛	飛	飛		飛	飛
六									
五									
四			步	銀	步	步		步	
三	步	步		玉					
二									
一	香	桂		金				飛	桂
			一	二	三	四	五	六	七

歩角 駒持手下

飛車を攻める意味である。下手七三桂は、七五歩突きがあるにも拘はらず、先を見越した良手である。上手七五歩は豫定の攻め筋である。下手八四飛は、局面上當然な受けである。上手七六銀は、連絡が断つて危険のやうであるが、既に二八角と打つて飛車を攻めた以上は、譜の如く上つて繼續するのが至當である。下手三六銀は、四九角打を狙つて、二七銀と捨てる意味である。

第三變化甲三六銀以下の指手。

- 四四六角 八六歩 四四八金 八九角
- 八八金 五六角 五五七銀 四五馬
- 五五歩 八七歩 同金 七五歩
- 八五歩 七四飛 六六七銀 五五歩
- 同角 三三桂 にて下手優勢である。

【講義】 上手四六角は、前述の二七銀成の手及び三七歩と打たれる手を避けたのである。下手八六歩は、愚圖々々して居ては七四歩と取り込まれて面倒になるから、六九角打を狙つて一気に壓倒する好手である。上手四八金と寄つた



のは、八六歩を取る手は絶対にないから、六九角打を豫防したのである。下手八九角は、飛角協力して肉迫する意味である。上手八八金の處で、六八金と寄せれば、八七歩成、八五歩、

(迄銀六三(甲)化變三第は圖五十第)



七七と指されて駒損になるから、飛車先を豫防したのである。下手五六角成は、豫定の行動である。上手五七銀は至當である。下手四五馬は、左右より迫る意味である。上手五六歩は、後に六七馬と這入られる手を受けたのである

る。此八八金は、九筋より攻勢を探られると面白くないので、其豫防に寄つたのである。下手四四歩は、四筋に位を張つて、金銀を盛上る意味である。上手七五歩は次に二八角と打つて、飛車の小翼を狙ふ意味である。下手四

(迄歩五九化變四第は圖六十第)



五歩は、敵に四六歩と指される手がないから(同歩、同銀、七九角がある)強く位を張つたのである。上手二八角は、豫定の行動で、次に七四歩と突く目的である。下手八

下手八七歩成は、飛車の侵入を計る目的である。上手同金は、已むを得ない應手である。下手七五歩は、豫定の行動である。上手八五歩は、當然な受けである。下手七四飛の處で、強く七六歩、八四歩、七七歩成と指しても善いが、穩かに飛車を渡さぬ方が安全である。上手六七銀は、絶對の逃げ手である。下手五五歩は、飛車を左翼に廻して活動する含みである。上手同角は、局面上至當な應手である。下手三三桂は、一一角成を受けたのである。是れにて下手方は、飛車を左翼に振つて攻撃する好手があるから、大いに優勢である。

第四變化九五歩以下の指手。

- 八八金 ○四四歩 ○七五歩 ○四五歩
- 二八角 ○八四飛 ○七六銀 ○九四角
- 六七銀 ○四四銀 ○四六歩 ○同歩
- 同銀 ○四五歩 ○五七銀

【講義】上手第十六圖面の場合、前號では七五歩と突く手を説いたから、本號では八八金と寄る指方を説く事にす

四飛は、敵の七四歩突きを豫防したのである。上手七六銀は、次に八五銀と進んで、七四歩突きを作る目的である。下手九四角は、八五銀と出られる手を防いだので、良い手である。敵が若し六七金と指せば、八六歩と打つて優勢で

(迄銀七五化變四第は圖七十第)



ある。上手六七銀は、止むを得ない。六七金と上つては、前述の如く八六歩と打たれて全滅である。下手四四銀と盛上つたのは、場合に依つては五五歩と突いて敵の角道を留



める意味で、良い手である。上手四六歩は、歩の交換を挑んだ手である。下手同歩、上手同銀、下手四五歩、上手五七銀は、皆至當の指手である。

第四變化五七銀以下の指手。

- 後五五歩 後同歩 後二五歩 後同歩
- 後同銀 後三七歩 後二六歩 後同歩
- 後同銀 後三七歩 後六七角 後同銀
- 後四七銀 後四九玉 後二四飛にて下手必勝である。

ある。

【講義】 下手五五歩と突捨て、飛車の活動を自由に、以下三五歩と突出したのは良い手である。上手同歩、下手同銀、上手三七歩は、角道を留めて面白くないが、敵に三六銀と進まれて面白くないので、致し方がないのである。下手三六銀と出る意味の下に三六歩と打つたのは、良い手である。上手同歩と取つては敵の思ふ通りになるが、捨て、おいても矢張り疵になつて悪い。下手同銀、上手三七歩は止むを得ない捨て、おいては、二四飛と廻られては全滅

### 下手居飛車 引角半櫓の戦法

第一圖面に至る迄の指手。

- 後七六歩 後三四歩 後六六歩 後八四歩
- 後七八金 後八五歩 後七七角 後六二銀
- 後六八銀 後五四歩 後五六歩 後二二銀

(面局の迄銀二三は圖一第)

下手持駒 子金

九	皇	将	將	王			将	皇
八					將	將		
七	飛	飛	飛			飛	飛	
六				飛	飛			
五							歩	
四			歩	歩				
三	歩	歩		歩	歩			歩
二		角	銀		銀		飛	
一	香	桂		金	玉	金	桂	香
	一	二	三	四	五	六	七	八

シナ 駒持手下

飛車落定跡 (小泉兼吉)

である。下手敵の三七歩に對し、六七角と切つて、同金と取らせ、四七銀以下二四飛と廻つたのは非常に強い手で、最終圖の如き局面となつて、絶對勝である。

(面局の迄飛四二は圖終最)

下手持駒 馬車

九	皇	将		王				皇
八		馬					馬	
七		飛	飛	銀	將	將	飛	飛
六	飛		銀					
五				歩	飛	飛		
四	歩	飛						歩
三						歩	歩	
二			玉	金	銀			
一	香	桂		金			桂	香
	一	二	三	四	五	六	七	八

歩歩 駒持手下

【講義】 上手七六歩下手三四歩は共に棋法にして、最初特別の策戦のない限り必ず突くのが普通である。上手六六歩は大駒の交換を避けたので、大駒落で角を交換されては自然に隙が出来て、下手に角の打込み場所を與へる爲思ふ様に駒組が出来ないのである。下手八四歩は居飛車の戦法である。上手七八金は、八筋の守りである。此處で七八銀と立つて七七銀と受ける手もあるが、それは次號に於て説明する事にする。下手八五歩は、八四歩の繼續、上手七七角は、八筋の歩を交換される手を受けたのである。下手六二銀上手六八銀は双方銀の活用。下手五四歩は中央の位取りと、引角の準備である。上手五六歩は、中央の位を保つたのである。下手三二銀は、以下三三三へ繰上げる目的と、引角の戦法を應用する意味である。

第一圖面三二銀以下の指手。

- 後六七銀 後二一角 後四八玉 後八六歩
- 後同歩 後同角 後同角 後同飛
- 後八七歩 後八二飛 後三八玉 後五二金



飛七七桂 三三銀

(面局の迄銀三三は圖二第)

九	香	桂	飛	銀	金	步	步	步	步	香
八	香	桂	飛	銀	金	步	步	步	步	香
七	香	桂	飛	銀	金	步	步	步	步	香
六	香	桂	飛	銀	金	步	步	步	步	香
五	香	桂	飛	銀	金	步	步	步	步	香
四	香	桂	飛	銀	金	步	步	步	步	香
三	香	桂	飛	銀	金	步	步	步	步	香
二	香	桂	飛	銀	金	步	步	步	步	香
一	香	桂	飛	銀	金	步	步	步	步	香

歩角 駒持手下

【講義】 上手六七銀は、陣容の整備である。下手三一角は、豫定の行動、上手四八玉は、玉を安全地帯に移す準備。下手八六歩と突いて角の交換を迫つたのは、豫定の行動であるが、上手同歩以下下手八二飛迄は、皆當然の指手である。上手三八玉は、玉の圍ひ。下手五二金は、陣容を整へたのである。上手七七桂は、六七兩筋の位を獲

は、以下半槽に組上げる準備と、敵の模様によつては四五歩と突いて位を張る目的である。上手一六歩、下手一四歩は共に玉の懐を廣くしたのである。上手五八金は、次に五七に銀を捌く意味である。といふと讀者は、直ちにでも五七銀と立てるではないかと思はれるかも知れないが、此處で先に五七銀と立つのは、敵に八八歩と打たれて七九角打を狙はれて悪いのである。下手四三金は、半槽に組む準備。上手五七銀は、豫定の行動。下手玉を圍はずにわざと五三銀と先に立つたのは、模様によつては左翼に飛車を振つて攻勢を探る手を含んでゐるのである。上手三六歩は、敵に三五歩と突出されては位負けとなる許りでなく、二九桂を捌く機会を失つて了ふのである。下手四二玉は、玉を安全地帯に移す準備。上手四六歩は、持久戦の戦法であつて、此處で六五歩と突く手もあるが、それは第一變化として後に説明する。下手三二玉は、玉の圍ひである。

飛四七金 四一金 六五歩 九四歩

得する準備。下手三三銀は、豫定の行動である。  
第二圖三三銀以下の指手。

- 四八銀 四四歩 六一六歩 一四歩
- 五八金 四二金 五七銀 五三銀
- 三六歩 四二玉 四六歩 (第一變化)
- 三二玉

【講義】 上手四八銀は、自營の固めである。下手四四歩

(面局の迄玉二三は圖三第)

九	香	桂	飛	銀	金	步	步	步	步	香
八	香	桂	飛	銀	金	步	步	步	步	香
七	香	桂	飛	銀	金	步	步	步	步	香
六	香	桂	飛	銀	金	步	步	步	步	香
五	香	桂	飛	銀	金	步	步	步	步	香
四	香	桂	飛	銀	金	步	步	步	步	香
三	香	桂	飛	銀	金	步	步	步	步	香
二	香	桂	飛	銀	金	步	步	步	步	香
一	香	桂	飛	銀	金	步	步	步	步	香

歩角 駒持手下

- 七五歩 九五歩 八八金 三五歩
- 同歩 二四銀 三四歩 三五銀

【講義】 上手四七金は、持久戦の含みを以て陣容を整へたのである。下手四二金と上つて陣容を整備したのは良い手である。上手六五歩は、六筋の位を取つて、順次銀を左翼に捌く意味である。下手九四歩は、順次其歩を突出す意味で、若し敵が九六歩と受ければ、九五歩、同歩、九八歩、同歩、八九角と打つ目的である。上手敵の九四歩に對して九六歩と受ければ、前述の如く九五歩以下九八歩と打たれて面白くないので、譜の如く七五歩と突いて模様を見たのである。下手九五歩は、豫定の行動。上手八八金は、捨てておいては九六歩以下端より攻撃される手が厳しいので、それを豫防したのである。下手三五歩の開戦は、敵の八八金寄りを含めた良い手である。上手同歩、下手二四銀は豫定の行動。上手三四歩は無意味の様であるが手筋である。下手三五銀と進んだ局面では大いに優勢である。下手が八八



金を替めて三五歩以下攻勢を採つたといふのは、三五銀と出た時に敵が三六歩と打つても、同銀、同金、七九角の手があるからである。

第一變化四二玉以下の指手。

- 六五歩 ○三一玉 ○七五歩 ○二五歩
- 同歩 ○二四銀 ○七四歩 (第二變化)
- 同歩 ○二八角 ○七三角 ○同角
- 同桂

【講義】 上手第四圖の場合、前局では四六歩と突いて持久戦の策を採つて見たが結果は面白くなかつたので、今度は六五歩と突いて見る。下手三一玉は普通三二玉と寄る可き處で變つた指方である。それは敵が四六歩と突いて四七金と上る手段を捨てたので、敵の玉頭の薄いのを利用して後に三二飛と廻つて左翼から一氣に攻勢を採る手が却々嚴いので、わざと低く玉を引いたのである。

上手七五歩は、七筋の位を占めて後に二八角と打ち、敵飛車の小鬘を狙つて攻勢を採る準備行動である。下手三五

ては七二歩と打たれる手があつて悪い。上手同角、下手同桂は共に當然な指手である。  
第一變化七三桂以下の指手。

(面局の迄桂三七化變一第は圖五第)



- 二八角 ○五一角 ○七五歩 ○同歩
- 六六銀 ○三二飛 ○七五銀 ○三五飛
- 四八玉 (第三變化) ○二五飛 ○三八玉
- 三五銀

歩と突捨てて敵に同歩と取らせ、然して二四銀と出たのは豫定の行動で、敵の玉頭に向つて攻勢を採る強い手である。上手七四歩は決戦策で、三筋の戦ひは苦戦を豫想して七筋より攻勢を採つたのである。又此處で四六銀と出る手もあ

(面局の迄玉二四化變一第は圖四第)



るが、夫れは後に第二變化として説明する。下手同歩は、捨て、おいては疵が残るから當然である。上手二八角は、豫定の行動。下手七三角は、止むを得ない。九二飛と逃げ

【講義】 上手二八角は、豫定の行動である。下手五一角と打つたのは、折角の武器を防禦に用ひて了ふので大變惜い。此場合善い手である。上手七五歩は、桂頭を攻める意味。下手同歩は當然。上手六六銀右は豫定の行動である。下手三二飛は、三五歩と突捨てた時からの繼續で、敵玉の頭に向つて攻勢を採る厳しい手である。上手七五銀、下手三五飛は共に豫定。上手四八玉は、角道を飽迄利かせて軽く玉を避けたのである。此處で三七歩と打つ手もあるが、それは後に第三變化として説明する。下手二五飛は、手順に銀を活躍させる善い手である。上手三八玉は、止むを得ない。下手三五銀は、次に三六銀と進む目的である。  
第一變化三五銀以下の指手。

- 四八金 ○三六銀 ○三七金 ○同銀
- 同玉 ○三六歩 ○同玉 ○三五歩
- 三七玉 ○三六金 ○四八玉 ○二七飛
- にて下手必勝である。



(面局の迄銀五三化變一第は圖六第)

九	皇	飛						皇	
八		車	王		馬		馬		
七		車		車		馬	車	車	
六		車		車		馬			
五		飛	銀		車	馬			
四		歩		歩	銀	歩	桂	歩	
三		歩		歩	金				
二									
一	香	桂	玉	金	角			香	
	一	二	三	四	五	六	七	八	九

歩歩歩歩 駒持手下

に寄つたのである。下手三六銀は、豫定の行動。上手三七金と上るより受け手が無い。下手同銀成、上手同玉は、止むを得ない。同角と取つては三六金と打たれる手があるし、同桂では三五飛と寄られてゐて、次に三六歩打が残つて面白くない。下手三六歩と打つて同玉と取らせ、三五歩と打つたのは良い攻撃手段である。上手三七玉は、止むを得ない、二五玉と飛車を取つては、三六金と打たれて絶対凌ぎ

を採つたが面白くなかつたので、本局では四六銀と上つて三筋を防いで見る。下手三二飛は、豫定の行動である。上手三四歩は面白い手である。捨て、おいて四五歩とつかれる順では面白くない。下手同飛は、當然である。上手三七歩。下手三三桂は次に四五歩とついて、順次位を張る目的である。上手七二角は、桂香を利す手でよい手である。下手四五歩は豫定の手段。上手五七銀、下手三五銀と位を張るのは、豫定の行動ではあるがよい手である。上手八一角成は至當である。

第二變化八一角成以下の指手。

- 二六歩 同 歩
- 二七歩 四八玉
- 二六銀 三九歩
- 二四飛 にて下手必勝。

【講義】 下手三六歩と打つて同歩と取らせ、三七歩と打ち込んだのは屢々應用されるよい攻撃手段である。上手四八玉は至當である。同玉と取る手は勿論無いし、といつて同桂と取つても、三六銀と進まれて面白くない。何れにしても苦戦であるが、少しでも戦闘區域を避ける意味で、譜

が無くなつて了ふ。下手三六金と打つて、飛車を成込む順で必勝である。

第二變化二四銀以下の指手。

- 四六銀 三二飛 三四歩 同 飛
- 三七歩 三三桂 七二角 四五歩
- 五七銀 三五銀 八一角

【講義】 上手第七圖面の場合、前局では七四歩以下攻勢

(面局の迄銀四二化變二第は圖七第)

九	皇	飛						皇	
八		車	王		馬		馬		
七		車		車		馬	車	車	
六		車		車		馬			
五		歩	銀		歩	銀			
四		歩		歩	金				
三		歩		歩					
二									
一	香	桂	玉	金				香	
	一	二	三	四	五	六	七	八	九

歩角 駒持手下

の如く四八玉と寄つたのである。下手三六銀は、豫定の攻撃。上手敵の二七銀成を防ぐ意味で三九桂と打つたが、下手に二四飛と廻られては、潰滅である。

(面局の迄成角一八化變二第は圖八第)

九	皇	飛						皇	
八		車	王		馬		馬		
七		車	車	馬		馬	車	車	
六		車		車		馬			
五		歩	銀	歩	車	車			
四		歩	飛		歩				
三		歩	桂	金	銀	歩	歩	歩	
二									
一	香		玉	金				留 香	
	一	二	三	四	五	六	七	八	九

歩歩角 駒持手下

第三變化三五飛以下の指手。

- 三七歩 二五銀 七四銀 二六歩
- 同 歩 三七歩 同 桂 二六銀
- 四八金 三四飛 二六歩 五二金



【講義】 上手第九局面の場合、前局では飽迄角道を通す意味で四八玉と寄つたが結果は面白くなかつたので、本局では堅く三七歩と受けて見る。下手二五銀は、次に三六歩

(局面の迄飛五三化變三第は圖九第)

手番 駒持

九	香	桂	玉	金	角	飛	銀	歩	香
八	歩	桂	玉	金	角	飛	銀	歩	香
七	歩	桂	玉	金	角	飛	銀	歩	香
六	歩	桂	玉	金	角	飛	銀	歩	香
五	歩	桂	玉	金	角	飛	銀	歩	香
四	歩	桂	玉	金	角	飛	銀	歩	香
三	歩	桂	玉	金	角	飛	銀	歩	香
二	歩	桂	玉	金	角	飛	銀	歩	香
一	歩	桂	玉	金	角	飛	銀	歩	香

歩歩歩歩 駒持手下

と打つて攻勢を探る準備である。上手七四銀は、次に六三に成込む意味。下手三六歩は豫定の行動。上手同歩、下手三七歩、上手同桂、下手三六銀は、豫定の行動である。上手四八金は、三七銀、同角、二五桂の手があるので、三筋

下手居飛車に對する上手七七銀留

第一局面に至る迄の指手。

- 先七六歩 後三四歩 先六六歩 後八四歩
- 先七八銀 後八五歩 先七七銀 後六二銀
- 先五八金 後五四歩 先五六歩 後七四歩
- 先四八銀 (第一變化) 後五一金 先六七金
- 先四二玉 先二六歩 後二二玉

【講義】 上手七六歩から下手八四歩迄の講義は前號に於て述べたから、此處には重複を避けて略す事にする。上手七八銀は、七八金と上つて指すのが普通であるが、さう受けたのではど、しても八筋の歩を切られる順となるから、それを絶対受け切る意味で銀を上つたのである。下手八五歩及び上手七七銀は、共に豫定の手である。下手六二銀は模様を見て徐々に戦線に繰出す目的である。上手五八金は次に六七に捌いて、我右翼を極力守る意味である。下手五四歩は五筋の位取りで、上手も位負をせぬ様五六歩と受け

の守りに寄つたのである。下手三四飛は一寸氣の付かぬ手で、次に二四飛と廻る意味である。上手二六歩は、二四飛廻りを豫防した手。下手最後の五二金にて最終圖となり、

(局面の迄金二五は圖終最)

手番 駒持

九	香	桂	玉	金	角	飛	銀	歩	香
八	歩	桂	玉	金	角	飛	銀	歩	香
七	歩	桂	玉	金	角	飛	銀	歩	香
六	歩	桂	玉	金	角	飛	銀	歩	香
五	歩	桂	玉	金	角	飛	銀	歩	香
四	歩	桂	玉	金	角	飛	銀	歩	香
三	歩	桂	玉	金	角	飛	銀	歩	香
二	歩	桂	玉	金	角	飛	銀	歩	香
一	歩	桂	玉	金	角	飛	銀	歩	香

歩歩歩歩 駒持手下

以下二筋の歩を突出して攻勢を探れば、上手は三七に桂がゐる爲、現在では角が全然働かないから攻められる心配なく、下手必勝である。

るのが當然である。下手七四歩は、七筋の位を保つて桂の捌きをつけたのである。上手四八銀は、順次繰出して攻防に備へる意味である。又此手で先に七八金と上る指方は後に第一變化として示す。下手五二金は、陣容の整備である

(局面の迄玉二三は圖一第)

手番 駒持

九	香	桂	玉	金	角	飛	銀	歩	香
八	歩	桂	玉	金	角	飛	銀	歩	香
七	歩	桂	玉	金	角	飛	銀	歩	香
六	歩	桂	玉	金	角	飛	銀	歩	香
五	歩	桂	玉	金	角	飛	銀	歩	香
四	歩	桂	玉	金	角	飛	銀	歩	香
三	歩	桂	玉	金	角	飛	銀	歩	香
二	歩	桂	玉	金	角	飛	銀	歩	香
一	歩	桂	玉	金	角	飛	銀	歩	香

歩歩歩歩 駒持手下

上手六七金は豫定の手段で、以下櫓に圍つて對抗する目的である。下手四二玉は、玉を安全地に移す準備。上手三六歩は桂の捌きをつけたのと、後に三五歩と突いて敵の玉頭



を脅す意味を含んでゐる。下手三二玉で第一圖面となる。第一圖面以下の指手。

- ⑦七九角 ⑧四二銀 ⑨七八金 (第二變化)
- ⑩三二銀 ⑪三七銀 ⑫四四銀 ⑬四六銀
- ⑭五二銀上 ⑮四八玉 ⑯六四銀 ⑰二六歩
- ⑱四二金

【講義】 上手七九角は、敵飛車の小鬘を狙つて四六に捌く目的である。下手四二銀は、一旦王脇を堅めて後、敵の模様依つて三三銀と指す意味である。上手七八金は、八筋を堅く守つたのである。此手で三五歩と挑戦する指方は第二變化として説明する。下手三三銀は玉頭を堅く守り、四四に繰出して對抗する準備である。上手三七銀は敵銀に對抗の目的。下手四四銀、上手四六銀は、共に豫定の手である。下手五三銀上ルは、順次繰出して攻勢を採る準備である。上手四八玉は、居玉は危険故一手安全な處に玉を移したのである。下手六四銀は、豫定の行動。上手二六歩は順次其歩を突出し、機を見て二四歩と攻勢を採る意味である。

⑲六五歩 ⑳同銀 ㉑五五歩 ㉒同銀

【講義】 上下二五歩は、二六歩突きの繼續である。下手五五歩は、戦闘準備も既に整つたので、愈々中央から攻撃を、始したのである。上手同歩は止むを得ないであらう。捨て、置いて敵に五六歩と取込まれては、金の妻が悪くなる丈け乗じられ易い。下手五二飛と廻つたのは、四二金と寄つた時からの繼續であつて、中央より一気に敵陣をつく意味である。其時上手五四歩と突いたのは捨て、置いて五五銀と進まれば受け切れないので、それを嫌つたのと、又一つには飛車を五四に浮かして置けば、色々先手に當る手も出来るといふ意味を含んだ實に妙味ある指手だと思ふ。下手同飛と取る。上手五六歩は、敵の五五銀出を防いだのである。下手五五歩は、一旦五筋に戦闘目標を置いた以上飽迄其筋から攻勢を採るといふ始めの策戦を繼承したのである。上手敵の五五歩に對し、直ちに同歩と應じては同銀と進まれ、それでは敵の思ふ通りになつて了ふので、一旦六五歩と突き呉れて敵銀の姿を悪くしたのは善い手である。

る。下手四二金寄は、一寸四二金直ぐと上り度く、又その方が玉も廣く安全なのであるが、此場合それでは攻撃に十分でないから、次に五二飛廻りを含んで金を寄つたの

(面局の迄寄金二四是圖二第)

九	星	将				馬	将	星
八				王		馬	馬	
七	香			香	香	香	香	香
六			香	香				
五					銀	銀	歩	
四			歩		飛	歩		
三	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩
二		角	玉	金			飛	桂
一	香	桂		金				香

レナ 駒持手下

で、是にて第二圖面となる。第二圖面以下の指手。

- ㉓二五歩 ㉔五五歩 ㉕同歩 ㉖五二飛
- ㉗五四歩 ㉘同飛 ㉙五六歩 ㉚五五歩

る。下手同銀の一手。上手五五歩は、捨て、置けば只歩を取られて了ふから、當然である。下手同銀と取つて、第三圖面となる。

(面局の迄銀五五是圖三第)

九	星	将				馬	将	星
八				王		馬	馬	
七	香			香	香	香	香	香
六			香	香				
五					銀	銀	歩	
四			歩		飛	歩		
三	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩
二		角	玉	金				桂
一	香	桂		金				香

歩歩 駒持手下

- 第三圖面以下の指手。
- ㉛四五銀 ㉜五一飛 ㉝二四歩 ㉞同歩
  - ㉟五六歩 ㊱同銀 ㊲同金 ㊳同銀
  - ㊴三四銀 ㊵三三金 ㊶同銀 ㊷同角



【講義】 上手四五銀は豫定の手で當然である。五五銀と銀を取つて同角と取られては、それ迄の將棋になつてしまふ。先に五四歩を突き捨た時、場合に依つては飛車に先手に當てる事も出来ると云つたのは、此順を豫期してゐたのであつて、此處に来て見て如何に五四歩が良い手であるかといふ事が判ると思ふ。下手五一飛、上手二四歩は餘程前から狙つてゐた攻撃筋で、敵の玉に近いので非常に効果があるのである。下手勿論同歩と取る一手である。其時上手直ちに三四銀と進んだのでは、三三歩と打たれて銀が窮地に陥るので、駒を手に持つて然る後三四銀と進む意味で、譜の如く五六歩と打つたのである。下手恐れず同銀と取る方がよい。但し上手に三四銀と來られた時、受けに自信を持つて懸らねばならない。上手同金、下手同銀は、共に必然的指手である。上手三四銀は、豫定の如く敵玉を威嚇に行つたのである。下手三三金と強く上つたのは、必ず受け切るといふ堅い自信の下に行つたよい凌ぎである。上手同銀と取る一手である。二三歩と打つても、同金、同銀成、同

玉と取られて後の攻めが續かないと思ふ。下手同角と取つて、第四圖面となる。

(圖局の迄角三三は圖四第)



第四圖面以下の指手。

- ▲三四銀 ▲五五角 ▲五七歩 ▲同 銀
- ▲同 角 ▲五九銀 ▲五八玉 ▲七七角
- ▲同 桂 ▲四八金 ▲六九玉 ▲五七飛

【講義】 上手三四銀は、敵玉の薄いのを利用した當然の攻めである。下手五五角と逃げたのは、敵の持駒の少いのを見て強く指したのである。上手五七歩は已むを得ない受けである。下手同銀と切つたのは強い手で、上手としても

(圖局の迄歩四七化變一第は圖五第)



恐らく豫期しなかつた事であらう。上手同角は必然的である。下手五九銀打は、五七銀切からの豫定で、上手五八玉と寄る一手。五九同玉と指して七七角と成られては問題に

ならない。下手七七角成は豫定の攻撃である。上手同桂と取つて下手四八金と打てば、以下は順當の手順で下手必勝である。

第一變化第五圖面以下の指手。

- ▲七八金 ▲五一金 ▲四八玉 ▲四二玉
  - ▲三八玉 ▲三二玉 ▲四八銀 ▲四二銀
  - ▲六七金 ▲三二銀 ▲七九角 ▲二一角
- 【講義】 上手第五圖面の場合、前局では四八銀と上つたので、今度は七八金と上る指方を説く事にする。下手五二金は陣容を整へたのである。上手四八玉、下手四二玉は共に玉を安全地に移す準備。上手三八玉、下手三二玉と共に玉を圍ふ。上手四八銀は、漸次繰出して攻防に備へる準備。下手四二銀は、次に三三に上り引角の戦法を探る準備である。上手六七金右は、豫定の如く槽に圍つたのである。下手三三銀は、玉頭を堅くして次に引角にする含み。上手七九角は、次に四六に上つて、敵飛車の小鬘を狙ふ意味。下手豫定の如く引角にして、第六圖面となる。



(面局の迄角一三化變一第は圖六第)

九	星	將						馬	將	星
八			王	將				馬	將	
七		車	車	車				車	車	
六					車	車				
五										歩
四										
三			歩		歩					歩
二			歩	銀	歩			歩	銀	
一	香	桂	角	金						飛
										桂
										香

シナ 駒持手下

第一變化第六圖面以下の指手

- 飛三六歩 飛四四歩 飛一六歩 飛一四歩
- 飛六五歩 飛四二金 飛四六角 飛七三銀
- 飛二八角 飛四五歩 飛六六金 飛四四銀

【講義】 上手三六歩は、次に四六角と上つた場合二八に引ける様にしたのと、又一つには三五歩と突いて、敵の玉頭を攻める意味である。下手四四歩は、四筋に位を張つて

に依つては八二飛を左翼に轉換する含みで、銀を上つたのである。のみならず桂を上るのは、後に七五歩と桂頭を攻められる手も出来て紛れ易い。上手二八角は、現在の處に於ては四五歩と突かれて手順に其筋に位を占められるので、それを先手に避けたのである。下手四五歩は、強く左翼に位を張る目的、上手六六金は、機を見て七五歩と突く目的、下手四四銀と盛上つて、第七圖面となる。

第一變化第七圖面以下の指手

- 飛四六歩 飛同歩 飛同角 飛二二玉
- 飛七五歩 飛三二飛 飛七四歩 飛八二銀
- 飛六四歩 飛同歩 飛四七玉 飛二五歩

【講義】 上手四六歩は却つて其筋の位を損ずる虞れはあるが、一步手中に得て次に七五歩と突く意味である。下手同歩は當然、上手同角、下手二二玉と寄つたのは、一見如何にも鏡手の様に見えるが、決してさうではない。此處で他の手を指して上手に七五歩と突かれては、その受けが面倒になるのである。で七五歩と突いて来たならその方面の

(面局の迄銀四四化變一第は圖七第)

九	星	將						馬	將	星
八			王	將				馬	將	
七		車	車	車				車	車	
六					車	車				
五										歩
四										
三			歩		歩					歩
二			歩	銀	歩			歩	銀	
一	香	桂	角	金						飛
										桂
										香

シナ 駒持手下

出して敵角の出を牽制したのである。下手四三金は、豫定の如く其の筋に位を張らうとする準備、上手四六角は、最早敵には角出もないから、飛車を脅しに出たのである。下手七三銀は、七三桂と受けるのが普通の形であるが、場合

戦は不利を覚悟し、以て左翼に戦を求めると同時に、三二飛と廻らうといふのである。つまり先に七三銀と立つた時、既に此事を豫期してゐたのである。上手七五歩と突き下手三二飛と轉換するのは、共に豫定である。上手七四歩と取

(面局の迄歩五三化變一第は圖八第)

九	星	將						馬	將	星
八				將				馬	將	
七		車		王				車	車	
六		車	車	車				車	車	
五					歩					歩
四										
三			歩		銀	歩				歩
二			歩		金					歩
一	香	桂	角	金						銀
										桂
										香

歩歩 駒持手下

込めば、下手は八二銀と引く一手である。飛車を三二に振つたのも、此場合八二銀引の手をつくつた意味なのである。上手六四歩は一旦敵角の見通しを留め、七五金上りの手を



作つたのである。下手同歩は當然。上手四七玉の早越は、現在の處に置いては敵の攻撃目標となつて到底受け切れないので、三筋の戦は苦戦を豫想して早逃げしたので、こゝいふ手は實に味ふ可き手だと思ふ。下手豫定の如く三筋から攻勢を採つて第八圖面となる。

第一變化第八圖面以下の指手。

- ▲五八玉 ▲二六歩 ▲二八歩 ▲三四飛
- ▲六八角 ▲二五銀 ▲四七銀 ▲五二角
- ▲六七玉 ▲八三銀 ▲七五金 ▲四四飛
- ▲四六歩 ▲二四飛 ▲下手必勝である。

【講義】 上手五八玉は、玉を戦線より遠ざけたよい手である。下手三六歩と取込めば、上手は三八歩と堅く受ける。下手三四飛と中段に浮いたのは、後に二四飛と廻る順を狙つたよい手である。上手六八角は、三五銀の當りを先手に避けたのである。下手三五銀は豫定の行動で、次に四六歩と打つて二四飛と廻る手を含んでゐるのである。そこで上手も四六歩打を防ぐ意味で、四七銀と立つたのである。下

第二變化第八圖面以下の指手。

- ▲三五歩 ▲同歩 ▲同角 ▲六四歩
- ▲四六角 ▲五三銀 ▲七八金 ▲六二銀
- ▲五八玉 ▲四四銀 ▲二八角 ▲七三桂

(面局の迄桂三七化變二第は圖十第)

九	香	桂						桂	香
八	飛	桂						飛	桂
七	歩							歩	
六	歩							歩	
五	銀							銀	
四	歩							歩	
三	歩							歩	
二	角							角	
一	桂							桂	香
	一	二	三	四	五	六	七	八	九

【講義】 上手第九圖面の場合、本文では七八金と上つたのであるが、此三五歩突も面白いので研究して見る。下手同歩と取る一手で、上手同角と取る。其時下手六四歩と突

手五三角は何時でも二四飛と廻れる様に、三五銀にひもを付けたのである。上手六七玉と入玉を心懸けて早逃げする。下手八三銀と遊び銀の活用を計る。上手七五金は當然で、

(面局の迄銀二四化變二第は圖九第)

九	香	桂						桂	香
八	飛	桂						飛	桂
七	歩							歩	
六	歩							歩	
五	銀							銀	
四	歩							歩	
三	歩							歩	
二	角							角	
一	桂							桂	香
	一	二	三	四	五	六	七	八	九

既に三四兩筋に壓迫されてる折柄、せめて六、七、八の三筋に勢力を集めて置かなくては問題にならない。下手四四飛と廻つて四六歩と受けさせ、然して二四飛と廻る順では必勝である。次に第二變化の順を調べて見やう。

いたのは、四六角と引かれても先手に飛車に當らぬ様豫防したのである。上手四六角と引いて六筋を狙へば、下手は五三銀と上つてそれを防ぐ。上手七八金は、櫛に圍つて堅く守る目的。下手六三銀は、六筋の防備。上手五八玉は、居玉の危険を避けたのである。下手四四銀は、五五歩と突いて攻勢を採る意味である。上手二九角は、現在の處に於ては五五歩と突かれて、何かと角に當つて悪いので、それを避けたのである。下手七三桂は、機を見て五六兩筋の歩を突出して攻勢を採る準備で、是れで第十圖面となる。

- ▲四六歩 ▲五五歩 ▲同歩 ▲同銀
- ▲五六歩 ▲四四銀 ▲四七銀 ▲四二金
- ▲二七桂 ▲五四銀 ▲七五歩 ▲八四飛

【講義】 上手四六歩は、自ら角道を留めて面白くない様であるが、四七銀、三七桂と擲いて敵の四四銀に順次壓迫を加へんとする意。下手五五歩は、一步手に持つて六三銀の活路をひらいたよい手である。上手同歩、下手同銀は、







(面局の迄王二三は圖二第)



【講義】 上手四八銀は以下銀を廣く攻防に用ふる準備である。下手の四二銀も同様の使命を持つてゐる。尙此の銀は上手の銀と何時も釣合を探つて行動して行くので、上手の銀が四六に出て来た様な場合四四に出て對抗する手段である。上手一六歩突きは玉の懐を廣くしたので、下手が一四歩と突いたのは、上手と同じく玉の懐を廣くしたので、端の位取である。總べて持久戦の場合は位負けは大きい。

(面局の迄銀三五は圖三第)



用ひると上手に三六金と引かれ、上手に金に自由に活躍せられて上手の策に陥るのである。上手が三六金と退いた時更に二四金と上り二枚金を活用するのは好い手である。此の戦法は敵の金一枚に對して味方は金二枚であるから、必ず中壓迫を加へる事が出来る。一に對して二は倍の力があるといふ簡單の原理より出發して居るのである。要するに上手の二六金以下の策が無理であつたのを、下手が答めたの

く影響するから、注意しなくてはならない。下手六四歩と突く處で三三銀以下引角の手段もあるが、本局の如く双方手順が進んでからは、上手方は角の交換を避けて指し、仲々紛れの多い局面となる故、下平方余り面白くない。下平方の六四歩以下の手段は、持久戦の意味に位負けを極堅實に指したのである。

第三圖面以下の指手。

- ①三七金 (第一變化) ④四三金 ⑧二六金
- ②四二金 ⑤三三金 ⑥同歩 ⑦同金
- ③三三金 ⑨二六金 ⑩二四金 ⑪二六歩
- ⑫三四金

【講義】 上手三七金は以下金を繰り出し、三筋の歩を替つて右翼に有利の陣勢を布かんとする策である。下手は其れに對して四三金四二金の順に玉を堅固にし、上手が三五歩と突き歩を替つて三五金と出た時、三三金上りの強襲手段を用ひたのは、上手の前述の策を根低より覆がへし逆に乗せんとする戦法である。若し三四歩の如き常套手段を

である。

第四圖面以下の指手。

- ①三七金 ④四三金 ⑧三六歩 ⑫三二飛
- ②四七玉 (第二變化) ⑤四五歩 ⑦同歩
- ③三五歩 ⑥同歩 ⑨四五金 ⑩四六歩
- ⑪三六歩

【講義】 上手三七金の時下手四三玉と上つたは、以下飛

(面局の迄ルナ金四三は圖四第)





を三筋に轉廻して敵王頭を猛烈に攻撃して壊滅させんとす。自信ある手段で、斯ういふ玉の形の亂れる手は普通の場合には余り用ひては宜しくないが、本局では敵の左翼の駒が右翼の戦ひに間に合はぬ形勢である故、時期に適した手段である。上手三六歩と疵を消し、三二飛の時四七玉と上つたのは防備である。此の場合五八銀と引いて防戦する手段もある。下手四五歩と飽迄強襲を繼續するのが宜しい。以下の手段は歩を利用して敵を攻め一層有利の位置に金を捌かんとする手段である。上手同歩の時下手三五歩と打つたのは豫定の手段である。上手同歩と取るの他はない。下手金を四五に捌いたのは巧みなる捌きである。四六歩の時三六歩と打つたのは手筋である。此の邊り味ひを意味すれば、歩の利用法の如何に大切であるかが判る事と思ふ。

- ▲二七金 ▲二五金 ▲六八角 ▲三三三桂
- ▲三八歩 ▲四五歩 ▲七七桂 ▲二四金
- ▲四五歩 ▲同桂 ▲四八銀 ▲四六歩

差支へないのである。上手格別の手も無いので、豫かじめ三八歩と打つて敵の鋭鋒を防ぐ。下手四五歩と打つたのは豫定の手段である。上手同歩と取ると桂を捌かれて悪いので、七七桂と跳ねて後に六五歩と突かれる味を消して置く。下手飽迄桂を跳躍する意味で三四金と寄る。之は一三角出も含んだ好手である。上手今度は捨て置くくと四六歩と取り込まれて悪いので(四六歩、同銀の時一三角と出られて上手方は應手に困る。五七銀と引けば下手方四二飛廻りの意味で五二玉と指して如何にしても優勢である)四五歩と取る。下手同桂の時、上手銀桂を替つては悪いので、四八銀と引く。下手四六歩と打つて絶對位勝である。下手五五歩を上手取る手は無いとすれば(若し取れば同角で、四七歩成で角の成込みの手段があつて悪い)下手は以下五四銀と上り、益々敵を壓迫する事が出来る故、殆んど必勝とも言ふ可き將棋である。

- ▲四七金 ▲四三金 ▲二六歩 ▲九四歩

▲五八玉 ▲五五歩にて下手優勢である。

(面局の迄歩六三は圖五第)

九	星	飛						飛	星
八									
七			歩	王	歩	歩	歩	歩	
六	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	
五			歩	歩	歩	歩	歩	歩	
四	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	
三			歩	玉	銀	銀	歩	歩	
二			角	飛					
一	香	桂							桂
	二	三	四	五	六	七	八	九	

シナ 駒持手下

【講義】 上手二七金は止むを得ない。若し四五歩と金を取れば三七歩成で、同玉でも同桂でも三五金と進まれて絶對悪い。下手三五金と寄つて目的を達する。上手四筋を固く防ぐ意味で六八角と引く。下手は飽迄此處より撃破せんとの意味で三三桂と跳ぶ。此手は一時飛角の道を阻止するが、直ぐ次に四五歩と打つて桂馬の活躍する手があるので

(面局の迄銀三五化變一第は圖六第)

九	星	飛						飛	星
八			王	歩					
七			歩		歩	歩	歩	歩	
六	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	
五			歩	歩	歩	歩	歩	歩	
四	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	
三			歩	玉	銀	銀	歩	歩	
二			角	飛					
一	香	桂							桂
	二	三	四	五	六	七	八	九	

シナ 駒持手下

【講義】 上手四七金は、前局の三七金以下の手段は却つて下手に逆に乗せられる結果となつて面白くない故、今度は持久戦策を採つたのである。下手も其れに對して穩かに玉壘を堅固にし、以下七二飛と廻つて攻撃開始の準備をしたのは宜しい。此處で間違ひ易いのは七三桂と跳ねる手で



ある。若し此の手を指すと、七二飛廻りの手が消えて手詰りの局面となつて指悪いのである。上手二五歩は三七桂と跳ぶ方が手順であるが、紛れを作る意味で二五歩を先にしたのである。下手七五歩以下は豫定の手段である。

- 第一變化七五飛以下の指手。
- 飛七六歩 飛七二飛 飛三七桂 飛七四銀
- 飛七七金 (第一變化甲) 飛八六歩 飛七八金
- 飛八七歩 飛同 金 飛八二飛 飛八六歩
- 飛八五歩

【講義】 上手七六歩と打つた時下手若し二五飛と廻ると三七金と寄られて飛を攻められて面白くない。無論七二飛と引いて指すのが當然である。上手三七桂は桂の運用を計つたのである。下手七四銀は囊中の銀自ら尖端を現したとも形容す可き手で、深く藏したる鋭鋒此處に初めて光を放つて全局に波瀾を及ぼす手である。一寸見ると此の陣形では、下手の角の運用が全然無様であるが、戦ひの進むに連れて四五歩と突いて何時でも角の捌きをつけると共に、敵

八六歩の時八五歩と櫛歩の手段を用ひても悪くはないが、本譜の方が一層厳しくよい。下手八五歩は以下金銀を交換して敵の防禦力を薄弱ならしめんとしふ目的である。

(面局の迄歩五八化變一第は圖八第)

手番 白 44

九	香	桂					桂	香
八								
七			王					
六	香		香	香	香	香	香	香
五								
四	歩		歩	歩	歩	銀		歩
三			歩	金	銀			
二		角	玉	金			飛	
一	香	桂					桂	香
	一	二	三	四	五	六	七	八

歩 駒持手下

- 第一變化八五歩以下の指手。
- 飛八五歩 飛八六歩 飛同 金 飛八五銀
- 飛同 金 飛同 飛 飛八六歩 飛八二飛
- 飛七七銀 飛八七金 迄にて下手優勢である。

の四筋にも味を作る手があるので、角の捌きは何時でも就くのである。上手七七金は七筋が手薄なので、其れを補つた手即ち七筋の位負を凌いだ手であるが、此の處六八銀と引いて指す手もある。下手八六歩は八八歩打を狙つた攻撃

(面局の迄飛五七化變一第は圖七第)

手番 白 45

九	香	桂					桂	香
八								
七			王					
六	香		香	香	香	香	香	香
五								
四	歩		歩	歩	歩	銀		歩
三			歩	金	銀			
二		角	玉	金			飛	
一	香	桂					桂	香
	一	二	三	四	五	六	七	八

歩 駒持手下

で手筋である。上手同歩と取れば八八歩と打れて無條件にと金を作られて陣中を荒されるので、七八金と凌いだのである。下手八七歩成の處で、直ちに八二飛と廻つて上手

【講義】 上手八五歩と取つた時、下手八六歩と打つて金を釣上げたのは、應用範圍の廣い攻撃手筋である。上手同金と取るの一手で、下手八五銀、同金、同飛で金銀交換の目的を達したのである。上手八六歩と打つて下手八二飛と引いた形を観れば、一見して有利の形勢である事が分明する

(面局の迄金七八は圖九第)

手番 白 46

九	香	桂					桂	香
八								
七			王					
六	香		香	香	香	香	香	香
五								
四	歩		歩	歩	歩	銀		歩
三			歩	金	銀			
二		角	玉	金			飛	
一	香	桂					桂	香
	一	二	三	四	五	六	七	八

歩 駒持手下

である。上手は八八歩と打れては堪らぬ故七七銀と凌いだ。が、防禦の力に至つては金銀の相違は大きいのである。下手



は飽迄八八歩打を狙つて八七金と打つ手が好いのである。上手如何にするも八八歩打の疵を凌ぐ事が出来ぬ故、下手は以下八八歩と打つて駒得を圖れば宜しい。是れにて第九圖の局面となつたが、飛落の手合としては必勝とも言ふ可き形勢である。

尙参考の爲九圖面以下二三の指手に就いて説明して見やう。何れにしても下手の八八歩打は防げないのであるか

(面局の迄成歩九八は圖十第)

丁玉将權 子△

九	皇			馬			皇		
八			王						
七			将	飛	飛	将			
六	飛		飛	飛	飛	飛	飛		
五		飛					歩		
四	歩		歩	歩	歩	歩	歩		
三		歩		金					
二	角	玉	金			銀	飛		
一	香	桂					桂		
	一	二	三	四	五	六	七	八	九

歩歩銀 駒持手下

(面局の迄銀四七甲化變一第は圖一第)

丁玉将權 子△

九	皇			馬			皇		
八			王						
七			将	飛	飛	将			
六	飛		飛	飛	飛	飛	飛		
五		飛					歩		
四	歩		歩	歩	歩	歩	歩		
三		歩		金					
二	角	玉	金			銀	飛		
一	香	桂					桂		
	一	二	三	四	五	六	七	八	九

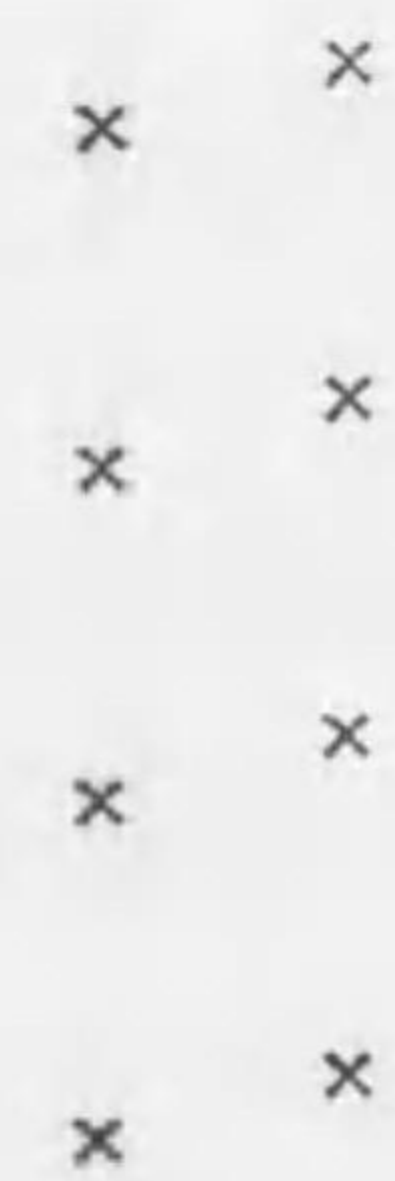
歩 駒持手下

第一變化甲七四銀以下の指手。

- 六八銀 六五歩 七七銀 (第二變化甲の一)
- 六六歩 同 銀 六五歩 七七銀
- 四五歩 同 歩 七五歩 四八角
- 七六歩

【講義】 上手前號の如く七筋の位負を凌ぐ意味で七七金と上った結果は好くなかつたので、今度は六八銀と引いて

ら、上手としては七五歩とでも突く位であらう。で七五歩なら、八八歩、七四歩、六二銀、七六銀、八六金、八四歩、七六金、同銀、八四飛、八五金、八二飛、七七桂、八九歩成で第十圖の局面となり、次に九三桂跳びの手もあるし、それに上手から攻められる心配がないから、矢張必勝といへやう。但し右手順中一寸注意しておきたいのは、上手の七四歩に對して八九歩と成る手である。桂が早く取れるのであるから一寸誰でも指したい處であるが、其時七三歩と成られると却々面倒になるのである。



次に七七銀と銀矢倉の形に組替る意味に指した時の攻撃法を説く。下手敵に七七銀と上られては固くなるので、六八銀と引いて六筋の薄弱になつた間髪を狙つて、角を捌く含みで六五歩と突いたのである。上手若し同歩と取ると同銀七七銀(註六六歩では七六銀、同銀、同飛で歩切故上手悪い)六六歩、同銀、同銀、同銀となつた時四五歩突きを味を狙つて攻撃するのが宜しい。下手が五八銀と打つのは、上手にとつては嫌な味である。上手四八角と上つて六六の銀に連絡を付ける。下手は其れでもかまはず、四五歩と突くのが手筋である。此の局面では敵玉の姿が悪い故、飛角を犠牲にして肉迫する意味で強く戦ふのが好いのである。

- 七六銀 七五歩 六六銀 六四銀
- 五七角 五五歩 四六角 六二銀
- 三五歩 同 歩 同 角 五六歩

【講義】 上手七六銀右は當然である。下手七五歩と打つたのは、七筋に位を取る意味である。次に六四銀と進出し



たのは、最早右翼に充分位を張つて敵を壓迫して居るので、急がず姿を直して後戦はんとの方針で、以下五筋の歩を切つて七四の銀を六三、五四の順に運ぶ意味である。上手五

(面局の迄歩六七甲化變一第は圖二十第)

王 王 王 王 王 王 王 王

九	皇						王	皇
八			王	馬			馬	
七			王	馬		駒	駒	王
六	王		王		歩		歩	王
五		王		王	歩		銀	
四	歩		歩		歩	銀		歩
三		歩		金	銀			
二		角	玉	金			飛	
一	香	桂					桂	香

歩 駒持手下

七角は愚圖くして居ると益々悪くなるので、角を捌いて局面の進展を圖つた此の局面として至當である。下手五歩は豫定の順である。上手四六角は下手に五筋の歩を切らせぬ浮である。下手六三銀は五筋の歩の取込みを狙ひつゝ

第一變化甲五六歩以下の指手。

- 七三歩 同 桂 六六二歩 二六歩
- 同 金 三四歩 七九角 六六二飛
- 二四歩 同 歩 二二三歩 二二三角

【講義】 上手七三歩打は輕手である。敵の飛の捌きを重くして其の間に乘せんとする手段である。下手若し同銀と取れば、五五歩と打つて左翼の金銀を捌く意味がある。故に下手同桂と取つたのである。上手六二歩打は七三歩打の繼續である。下手三六歩打は手筋である。直ちに三四歩と打つては、二六角と引かれる。此の手で七一飛と引くと、七二歩と打たれて下手悪い。即ち同銀なれば七四歩で桂損となり、五一飛を避ければ六一歩ナル、同飛、七一歩ナルの手がある。上手七九角と深く引いて二筋の攻めを狙ふ。下手六二飛と福根を斷つて置く。上手今度敵に五筋に飛を廻らされては堪らぬ故、攻めるは守るなりの意味合で敵玉頭に迫つたのである。總べて自分の方が受け切れなれないと思つた場合は、少し無理筋でも攻める事に依つて變化を生じ面

姿を直したのである。上手三五歩は決戦の意味である。下手穩かに同歩と應じ、五六歩と取込んだのは至當であらう。此の局面では上手は左翼の金銀三枚が捌けない故攻勢を控

(面局の迄歩六五甲化變一第は圖三十第)

王 王 王 王 王 王 王 王

九	皇						王	皇
八			王	馬			馬	
七			王	馬		駒	駒	王
六	王		王		歩		歩	王
五		王		王	歩		銀	
四	歩		歩		歩	銀		歩
三		歩		金	銀			
二		角	玉	金			飛	
一	香	桂					桂	香

歩 駒持手下

つても無理であるが、逡巡してゐるとジリ／＼負となるので、止むを得ぬ攻勢であるから、下手は上手の攻撃の挫折するを待つて逆襲に轉するのが最も策を得たるものである。

白い味ひが出来て来るものである。下手二二三歩打の時三三角と避けたのは至當である。同玉と取れば、二五歩と打れて響が強い。

(面局の迄角三三甲化變 第は圖四十第)

王 王 王 王 王 王 王 王

九	皇						王	皇
八			王	馬			馬	
七			王	馬		駒	駒	王
六	王		王		歩		歩	王
五		王		王	歩		銀	
四	歩		歩		歩	銀		歩
三		歩		金	銀			
二		角	玉	金			飛	
一	香	桂					桂	香

歩 駒持手下

第一變化甲三三三角以下の指手。

- 三五歩 五二飛 五八歩 七六歩
- 同 銀 五七歩 同 角 三五歩
- 同 金 三四歩 三六金 五五銀



にて下手優勢である。

【講義】 上手三五歩と攻めたのは、前よりの繼續手段である。下手敵の攻撃の多少緩みたるに乗じ、五二飛と攻勢

(面局の迄歩五六一〇甲化變一第圖五十第)



に轉じたのは宜い。上手五八歩は是非ない(註三四歩と指せば、七七角、同桂、五七歩成) 下手七六歩と突いて敵銀を逆にして、五七歩成の順は宜しい。上手同角、下手三五歩、上手同金と取るの一手である。七六歩、五七歩成の手

のは手筋である。上手の此の場合の應手は色々あつて六ヶ敷い處である。

が敵角の働きを制したのである。下手三四歩と打つて自陣を安全にし、五五銀と出る順に成つては大いに下手優勢である。

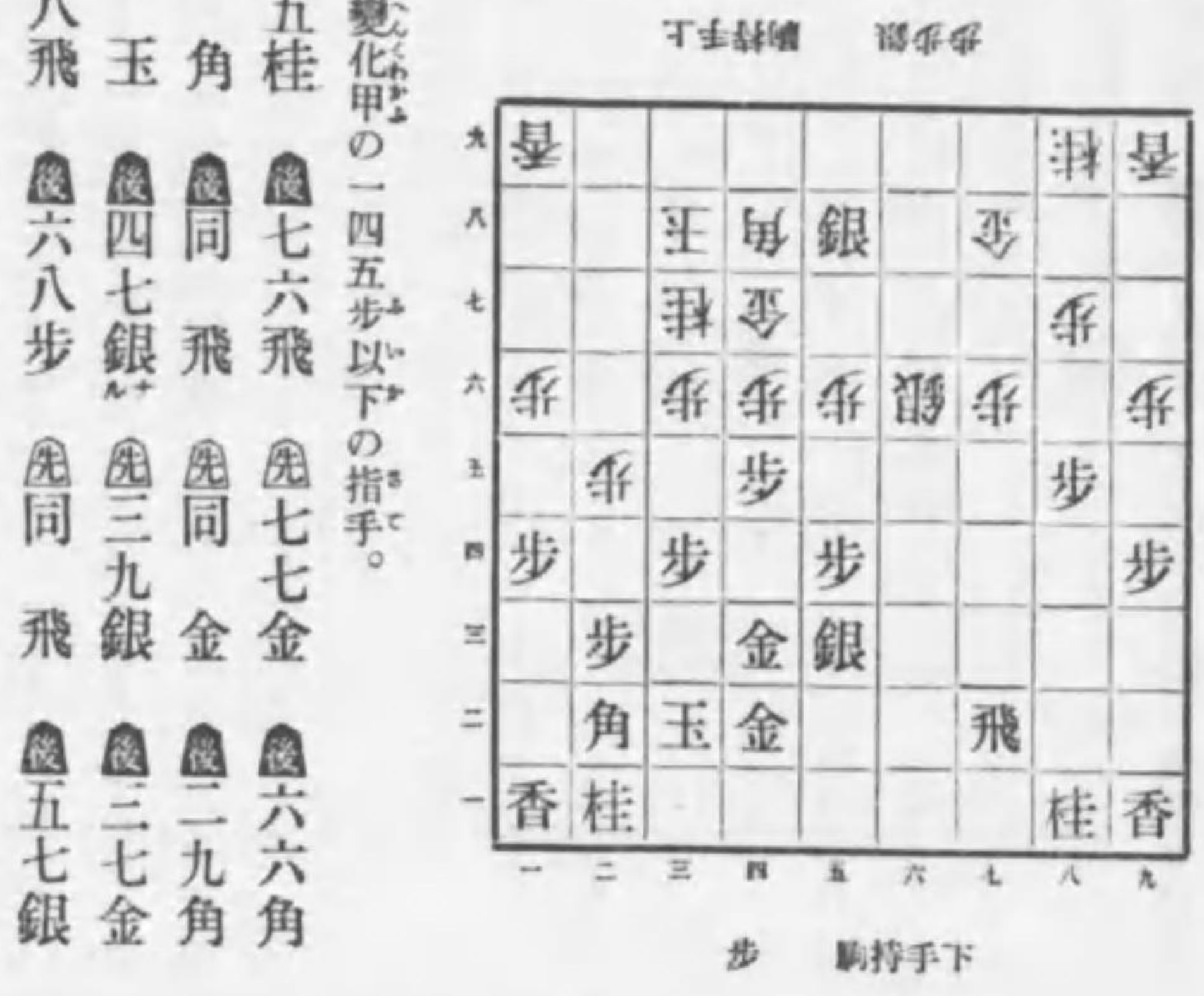
第一變化甲の一六五歩以下の指手。

- 六五歩 ○同 銀 ○七七銀 ○六六歩
- 同 銀 ○同 銀 ○同 銀 ○五八銀
- 四八角 ○四五歩

【講義】 上手六五歩と取つたのは、強く防戦して敵を指し切らんとする含みである。下手同銀は豫定の行動である。上手七七銀の所六六歩と打つたのでは、七六銀と出られて歩損になるから當然である。下手六六歩は此處で他の手を指して、敵に六六歩と打たれては一寸攻撃困難の局面となるので、五八銀打や四五歩突きの手があるので、強く攻撃の手段に出たのである。上手五八銀と引く手は無論なく同銀と應じて互に銀の交換を了し、後下手五八銀と打つたのは此の局面として當然である。上手四八角は角を逃がす六六の銀に連絡を採つたのである。下手四五歩と突いた

で下手必勝である。

(面局の迄歩五四一〇甲化變一第圖六十第)



飛車落定跡 (小泉兼吉)

第一變化甲の一四五歩以下の指手。

- 四五桂 ○七六飛 ○七七金 ○六六角
- 同 角 ○同 飛 ○同 金 ○一九角
- 同 玉 ○四七銀 ○三九銀 ○二七金
- 七八飛 ○六八歩 ○同 飛 ○五七銀

【講義】 上手四五桂は敵銀に當て、玉の懐を廣くしたので、此の局面として最も好い手である。若し此の場合同歩と應ずると、七六飛と出られた場合玉の懐が狭いので、本譜よりも悪い。七七金と七六飛の進出を防げば、四七銀ナル、同玉、四六歩、同玉、一三角出で下手必勝である。又上手五五歩と突けば、六五歩、同銀(註五七銀と引けば、四七銀、同玉、四六歩、同銀、七六飛、六七銀、五六金、同銀、七八飛成で下手優勢) 四七銀、同玉、四六歩五六玉、五五角、七七桂、六四歩で下手優勢である。下手七六飛と進出したのは、自玉が比較的的安全であるので、飛角を犠牲にして敵玉に迫らんとする強硬手段である。上手七七金は當然。下手六六角は豫定の行動であるが、此處で飛を先に切ると同金と取られて、切れて仕舞ふ。上手六六角では、同金と取る手は飛の成り込みがあるので絶対に無く、同角と取つたのである。又七六金と飛を取れば、四九銀打、三七玉、四七銀成、同玉、四八角、同玉、三九角、



四七玉、五七金、三七玉、四八角成、二七玉、三八銀不成、一八玉、一五歩突きで敵玉は一手必死になるが、自玉に必死がかゝらず尚桂を渡せば敵玉は詰みである故必勝である。故に六六同角は至當である。下手同飛上手同金は必然の應手である。下手二九角は敵玉を窮地に陥れる手段で、手筋である。上手同玉と取るの一手。下手四七銀成で、手に金銀二枚あるので如何にしても宜い。上手三九銀は凌ぎである。下手三七金打は敵に角があるので若し二七金(銀)と打つては四九角と打たれて切れて仕舞ふ。三七金打では、四九角と打つと四八銀と打たれて、上手方凌ぎが無い。上手七八飛は止むを得、凌ぎである。下手一旦歩を打つて飛を呼び、五七銀と打つ手は應用の廣い手である。此の順では下手必勝である。

第二變化三二飛以下の指手。

- 五八銀 三五歩 四七銀 二六歩
- 同銀 三五歩 四七銀 四五歩
- 同歩 同金 四六歩 二六金

取られては絶対に悪いので、同歩と應ずるのが至當である。下手同金、上手四六歩と固めた時、下手三六歩と突いて上手二七金の時、三五金と寄つて置いても位勝で優勢ではあるが、三六金と出る方が一層よいのである。其れは三六金

(面局の迄金六三化變二第は圖八十第)

王 王 王 王 王 王 王 王 王

星	王					王	星
	王	飛	飛			飛	
	飛	金	金	金	金	飛	
	金	歩				歩	
	歩	金		玉	銀	銀	歩
	角	飛					桂
香	桂						香

歩 駒持手下

と出て敵の金銀の中一枚交換して手に持つて三六歩と突き出せば、二四の金が自然と捌けて来るからである。第二變化三六金以下の指手。

【講義】 上手第十七圖面の場合、前戦では四七玉と上つて受けたが結果は面白くなかったので、今回は五八銀と凌いでみる。下手三五歩は三筋に位を取つて、敵玉頭を壓迫

(面局の迄飛二三化變二第は圖七十第)

王 王 王 王 王 王 王 王 王

星	王					王	星
	王	飛	飛			飛	
	飛	金	金	金	金	飛	
	金	歩				歩	
	歩	金		玉	銀	銀	歩
	角	飛					桂
香	桂						香

歩 駒持手下

する意味。上手四七銀は五八銀と引いた時からの豫定の行動である。下手三六歩以下上手四七銀迄は當然の應酬である。下手四五歩は總べての駒を捌く味を持つて居る。上手同歩と取らず他の手を指すと、四六歩、同銀、四五歩と位を

- 二六銀 同歩 四七金 三五金
- 四五金 同金 同歩 一三金
- 四六金 五八銀

【講義】 上手三六銀の所若し三六金では、後に残るのが銀である故金と比較して玉壘の守備の上に非常の相違があるので、金を残したのである。下手が三五金と出たのは次に二六金と出る意味である。若し上手が其れを嫌つて二七金と凌げば二四歩と突いて充分である。上手四五金は積極的防禦で、此の場合弱い受けは絶対にいけない。下手二六金と進めば、三五歩と打たれて飛角の運用がつかず面白くない。飛角を利用して強襲する意味で四五金と交換し、一三金と出たのは手筋である。次に五七角を切つて、三七銀打で詰である。上手四六金打は凌ぎである。此の處四八金打、六八金寄の凌ぎは三五金に打たれて、四六歩打で二六金出の手があるので悪い。下手五八銀は敵玉の退路を断つて四六角切や三七歩の打ち込みを狙つた手で急所である。第二變化五八銀以下の指手。



(面局の迄銀八五化變二第は圖九十第)

八	星	飛					飛	星
七			王		銀	馬	馬	
六				馬	馬	馬	馬	
五	馬	馬	步	馬	馬		步	
四	步				步	步		步
三	角	步		玉	銀	銀		
二				飛				
一	香	桂					桂	香

歩金 駒持手下

【講義】 上手六八金は、遊び駒を利用して防がんとの意味である。此の處四八金と引いても譜と同手順となるが、金が七八に居る丈け悪い。下手三七金は五八銀打の時から

飛六八金 後三七金 後同 桂 後同 歩  
 後同 金 後四六角 後同 銀 後四七金  
 後二八玉 後三七飛 後同 銀 後二八金打  
 後一七玉 後三七金 にて下手必勝である。

御神酒指しの戦法

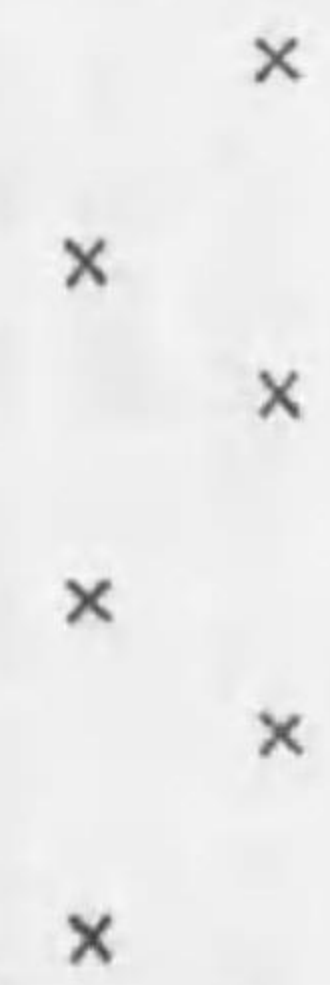
上手が早く角の交換を行ひ、以下双方へ金を配り玉を中住居にする戦法は、俗におみきに稱して下手にとつては却々苦しむ指方なので、その受け方を簡単に説明して見る。

第一圖及び第二圖面に至る迄の指手、

- 後七六歩 後三四歩 後七八金 後八四歩
- 後二二角 後同 銀 後八八銀 後八五歩
- 後七七銀 後三三銀 後三八金 後六二銀
- 後四八銀 後五二金 後三六歩 後四四歩
- 後三七銀 後四二金 後五八玉 後五四歩

【講義】 七六歩、三四歩の次に上手が七八金と上つたのが即ちおみき指しの策戦である。下手八四歩と突いて飛車先から攻勢をとつたのは定法で敵がおみき指しに來た場合六筋に飛車を振るのは面白くない指方である。上手二二角は以下八八銀、七七銀と上つて飛車先の歩を交換させぬ準備である。下手同銀以下八八銀、八五歩、七七銀、三三銀

の豫定の順である。上手同桂、下手同歩ナル、上手同金は絶対の手。下手四六角の時、上手三六歩と打つて凌げば前に四八金と引いたのでは五七角と銀を取られる故此の手は無い。三七角成、同玉、四七金、一七玉、三七金、一七玉一五歩で必死になり、自玉に詰なき故必勝である。故に上手同銀と角を取つたのである。下手四七金、上手二八玉、若し二七玉と逃げれば、三七飛成、同銀、三五桂、三六玉、三七金、同玉、四七銀成、以下簡單の詰である。三七飛成、同銀、三八金打、一七玉、三七金で上手の玉は必死になり、自玉に詰みなき故必勝である。



(面局の迄銀三三は圖一第)

八	星	飛	馬	王			飛	星
七							馬	
六	馬	馬	馬	馬	馬	馬	馬	
五							步	
四			步					步
三	步	步	銀	步	步	步		飛
二							銀	桂
一	香	桂		金	玉	金		香

角 駒持手下

迄は皆至當な指手である。上手三八金は玉を中住居にする準備である。下手六二銀は、模様を見て徐々に戦線に繰出す意味である。上手四八銀は、順次繰出して一、二、三の

三筋から攻勢をとる目的である。下手五二金は、以下指手の如く早く四三金と上つて、敵が二筋から攻勢をとつて來た場合、それに備へる準備である。上手三六歩は、以下其筋より銀を繰出して攻勢をとる準備である。下手四四歩は



次に四三金と組上げる準備である。上手三七銀は、豫定の進出である。下手四三金は、半槽に組上げる準備である。上手五八玉は、中住居の圍ひである。下手五四歩は、五筋の位取りと次に五三銀と捌く意味である。

第二圖面五四歩以下の指手。

- ④四六銀 (第一變化) ⑤五三銀 ⑥三五歩
- (第二變化) ④四五歩 ⑥同銀 ⑥三五歩
- ④五六銀 ④四四銀左 ④四六歩 ④五五歩
- ④四七銀 ④五四銀

【講義】 上手四六銀は、次に三五歩とついで攻勢をとる意味である。此處で二六銀と出る手は變化にて説明する。下手五三銀は敵の四六銀に對抗して銀を捌いたのである。上手三五歩は豫定の行動である。この手で穩かに一六歩と突く手もあるが、別に變化にて説明する。下手敵の三五歩に對し四五歩と突返した手は實戰中よく出来る手筋である。上手同銀の處で三四歩と取込む手もあるが、同金と取られると位を取られるので穩かに同銀と應じたのである。下手

- ④七五歩 ④九二角 ④四八玉 ④四五歩

【講義】 上手一六歩は以下其歩を突出して端から攻勢をとる目的である。下手四二玉、三二玉は玉の圍ひで安全地

(面局の迄銀四五は圖三第)

下士 持手 局

九	星	羽					羽	星
八			馬		王		馬	
七	香	香		馬	香	香		香
六				歩			歩	
五					銀	銀		
四				歩	金		歩	
三	歩	歩						飛
二	香	桂		金	玉		桂	香
一								

歩角 駒持手下

に移したのである。上手二六歩は、目下の局面では三、四五の三筋の位を占められてゐるので、格別良い手もないから敵の仕掛けを待つたのである。下手四二金は、玉の固めである。上手三七桂は、次に四五歩と突く意味である。下

三五歩は豫定の行動である。上手五六銀と早逃げしたのは敵に五五歩と突かれると銀が死ぬのでそれを避けたよい手である。下手四四銀と上つて敵銀を手順に壓迫し、然して五四銀と盛上つたのはよい手である。

(面局の迄歩四五は圖二第)

下士 持手 局

九	星	羽					羽	星
八			馬		王		馬	
七	香	香		馬	香	香		香
六				歩			歩	
五					歩	金		歩
四				歩	銀		歩	
三	歩	歩						飛
二	香	桂		金	玉		桂	香
一								

角 駒持手下

第三圖面五四銀以下の指手。

- ④一六歩 ④四二玉 ④一五歩 ④三二玉
- ④二六歩 ④四一金 ④二七桂 ④三二桂

手敵に四五歩と突かれては面白くないので、三三桂と跳ねたのである。上手七五歩は、敵桂の捌きを牽制しつゝ敵の仕掛けを待つたのである。下手九二角と打つ手は、遠く三筋を狙ふ意味で實戰中屢々あらはれる手筋である。斯様な手筋は何れの將棋に於ても應用出来る事故よく記憶して戴き度い。上手四八玉は、危険の様だが三八金に連絡をつけた手で致し方がない。捨て、おいて敵に三六歩と突出されては問題にならない。下手四五歩は、豫定の行動で角、銀桂を利用して一氣に攻勢をとつた手である。

第四圖面四五歩以下の指手。

- ④四五歩 ④同桂 ④同桂 ④同銀
- ④四六歩 ④二六銀 ④五九桂 ④四七銀
- ④同金 ④二六銀 ④三八銀 ④四七銀
- ④同桂 ④三六桂 ④三七玉 ④五二飛
- ④六八銀 ④四五歩 ④同歩 ④同銀
- ④四六歩 ④五六歩 ④四五歩 ④五七歩

【講義】 上手四五歩は、當然の指手である。同桂と取つ



でも同桂と取られると矢張り同じ様な結果になる。下手同桂、上手同桂、下手同銀、上手四六歩は皆必然的な指手である。下手三六銀と交換を挑んだのは強い手である。上手敵の三六銀に對し同銀と取つては同歩と取られて角の見通し

(面局の迄歩五四は圖四第)

九	香							桂	香
八									
七									
六									
五									
四									
三									
二									
一	香								香

シナ 駒持手下

があつて到底受け切れない故五九桂と凌いだのは至當である。下手四七銀上手同金は至當である。同桂ととつては四五歩と打たれて面白くない。下手三六銀と飽迄強く迫る手

【講義】 圖面の場合前局では上手四六銀と出て結果が面白くなかつたので、今度は敵の模様を見る意味で一六歩と突いて見る。下手五三銀は端の一手を省いて早く六四に繰

(面局の迄歩四五化變一第)

九	香							桂	香
八									
七									
六									
五									
四									
三									
二									
一	香								香

角 駒持手下

出し、七筋から攻勢せんとする準備である。此處で四歩と端を受ける手は却つて一五歩と攻められる手が残つて紛れを生じ易い。勿論一四歩と突くのが必らず悪いと云ふ譯ではないが、此處の手を他に應用する方が優つてゐるので

はよい手である。上手三八銀と受けたのはやむを得ない。下手四七銀は、一手も緩めず迫つたのである。上手同桂は至當である。同銀と取つては四五歩、同歩、同銀、四六歩(此處で四四歩と打つても同金、七一角、八四飛と浮いてゐてよい)三六銀と進んで来られて悪い。下手三六桂と打つたのは最も早い寄せである。上手三七玉の處で五八玉と寄つては四八金と打たれて問題にならない。下手五二飛は中央から攻勢をとる目的でよい手である。上手六六銀は、五筋の防ぎである。下手四五歩と打つて、同歩、同銀と進み敵が四六歩と打つた時銀を犠牲にして五六歩と突いたのは非常に強い手である。上手敵の五六歩に對し同歩と取つては、四六銀、同玉、五六飛と指されて潰滅である。下手五七歩成の局面となつては下手方絶対勝である。第一變化五四歩以下の指手。

- ①一六歩 ②五三銀 ③一五歩 ④四二玉
- ⑤二六銀 ⑥二四銀 ⑦二七桂 ⑧三二玉
- ⑨二五銀 ⑩四二金 ⑪六六歩 ⑫五五歩

ある。特に此おみき指しの戦法は、上手の陣容が比較的堅固故、下手は少々駒徳しても上手に手懸りを與へては面白くない。成可く戦を避け玉を堅める事を主眼として戦き度い。上手一五歩と突いて端の位を占めたのは、機を見て、一四歩とついで攻勢をとる目的である。下手四二玉は、安全地に移す目的である。上手二六銀は、三五歩と突、含みと、少し過激であるが二五銀と進み一筋に於て銀を犠牲にして攻勢をとらんとする目的である。下手敵の二六銀に對し二四銀と防戦は穩かな良い手である。敵に成可く手懸りを與へず手詰り模様にしたし、或は指切らせる策戦が最も大切である。上手三七桂は、次に二五銀と進んで攻勢をとる意味である。下手三二玉は、玉の圍ひである。上手二五銀は豫定の行動である。下手敵の二五銀に對し、急いで同銀と取つても勿論悪くはないが、上手の桂を手順に捌かせるだけ面白くない。敵が二四銀と交換すれば同歩にて敵桂の活動が不能故自然と指易い、故に本譜の如く四二金と堅く自營を堅めるのが良い手である。上手六六歩は、次に六



七角と指して攻勢をとる目的で突いたのである。下手五五歩は敵玉の頭を攻める含みで位を取つたのである。

第一変化五五歩以下の指手。

- ▲六七角 ▲二五銀 ▲同 桂 ▲二四銀
- ▲二六歩 ▲五四銀 ▲七五歩 ▲六四歩
- ▲七六銀 ▲六五歩 ▲同 歩 ▲二五銀
- ▲同 歩 ▲六六桂 ▲にてて下手の勝である。

(局面の迄歩五五化變一第)

▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲
▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲
▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲
▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲
▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲
▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲
▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲
▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲
▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲
▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲

【講義】上手六七角は豫定の行動で敵が捨て、おけば三

四銀と進む目的である。下手捨て、おいては敵に三四銀と進まれるので二五銀と交換したのは當然である。上手同桂、下手二四銀は飽迄敵に手懸りを與へぬ様に堅く守つたのである。上手二六歩は、桂の守備である。下手五四銀は、以下指手の如く六四歩と指して攻勢をとる目的である。上手格別良い手もないので、七五歩と指して模様を見たのである。下手六四歩は、豫定の行動である。上手七六銀は、目下の局面では手詰り故上つたのである。下手六五歩と突捨て、敵に同歩と取らせ、以下二五銀と銀桂の交換を行ひ六六桂と打つ模様では必勝である。

第二変化五三銀以下の指手。

- ▲一六歩 ▲四二玉 ▲一五歩 ▲三二玉
- ▲二六歩 ▲四二金 ▲二五歩 ▲七四歩
- ▲六六歩 ▲六四銀 ▲二五歩 ▲同 歩
- ▲同 銀

【講義】圖面の場合、本文では三五歩と突出した為め敵に四五歩と突返されて次第に壓迫されたので本局では確か

(局面の迄銀三五化變二第)

▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲
▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲
▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲
▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲
▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲
▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲
▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲
▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲
▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲
▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲

に一六歩と指して見る。下手四二玉と早く玉を圍つたのは良い手である。上手一五歩は、端の位を占めて機を見て一

四歩と突いて攻勢をとる意味である。下手三三玉は、玉の圍ひである。上手二六歩は模様を見たのである。下手四二金は玉の圍ひである。上手二五歩、下手七四歩は次に六四銀と捌き七筋から攻撃する準備である。上手六六歩は、六七角と攻守兩様に供へる準備である。下手六四銀は豫定の行動で、次に七五歩と突出して攻撃する含みである。上手

三五歩は敵が六四銀と上つた機に歩の交換を行つたのである。敵が五三銀の場合三五歩と突く手は、四五歩と突返され、同銀なら三五歩と取られて銀の姿が悪くなるし、又三四歩と取込めば同金と取られて完全に位を占められ以下攻勢をとる事が出来ない。但し六四銀の場合三五歩と突けば、敵が若し四五歩と突返して来ても、同銀と取つて三五歩の時七一角と打つ手がある故差支へないのである。下手敵の三五歩に對し、四五歩と突返す手は前述の如く七一角打がある故悪い、穩かに同歩と應ず可きである。上手同銀は豫定の行動である。

第二変化三五銀以下の指手。

- ▲三四歩 ▲四六銀 ▲七五歩 ▲同 歩
- ▲同 銀 ▲七六歩 ▲六四銀 ▲三七桂
- ▲五五歩 ▲六七角 ▲七五歩

【講義】下手三四歩は、穩かに受けたので至當の手である。上手四六銀は、至當の手である。此場合二六銀と引く手もあるが、銀が孤立して面白くない。下手七五歩は、豫







る事は既に諸君の御承知の處である。上手六六歩と角路を止めた處を七八金と指す場合もあるが、是は角の交換となり、通稱おみきといふ形になるが、それは又飛香落おみきの部で解く事にするから大體角の交換をしては、上手方最初から駒の少い關係上打込場所が多くて、絶えず自營の守りに氣を配らなくてはならぬ故、本當は拙策である。故に本號は正しく止めたのを解いた次第である。下手九四歩と突いたのは飛香落に於ける急所ともいふべき大切な手であつて、此の筋の歩の交換をして置かないと、將來歩を打込んでと金を作る事が出来ない。上手七八金は駒の整備。下手九五歩は前の手の繼續。上手六八銀も同じ意味。下手九二飛と振つたのは穩健な手である。上手六七銀は金銀の連絡を計り且六七兩筋の歩を守つた意味である。下手九六歩以下九二飛迄は双方當然の應酬である。上手五六歩は以下右銀を活動する爲の準備である。下手六二銀は徐ろに其の筋に繰り上つて攻める爲の準備。上手四八玉は安全な場所へ移す手。下手六四歩、上手三八玉、下手六三銀は何れ

五四銀は所謂腰掛銀と稱する形であつて、敵の六筋破壊の準備。上手五七銀及下手六二飛共に豫定行動。上手五八金は極力敵の攻撃に備へたる手。下手四二金と自陣の整備に取り掛つたのは、今茲で戦端を開いては、居玉ではあり思ひ切つた戦は危険故、一先づ玉を圍ふ意味であつて、穩かな手段である。上手七五歩は敵桂の活動を防ぎ、尙將來角の交換の場合、此の歩を突き捨て、色々手段を考へる用意で緊切な手段である。下手四一玉は前の手を繼續の意味。上手七七角は六筋に戦の初まつた折、元の位置のまま交換されては以下駒の姿が悪くなるから上つたのである。下手三二玉は前に同じ意味。上手四六銀は場合によつては五五歩と突いて混戦に導く爲及び、三筋の歩を突き出して、徐ろに敵の玉頭を威嚇する準備である。下手九八歩は敵角の働きを牽制すると同時に、九筋を破る爲打つのであつて、飛香落の將棋中最も大切な手筋である。上手一六歩は玉の懷を廣くした手であつて、下手一四歩はその受けではあるが、末に至り敵玉が逃げて來た場合突き出して攻める意味。

も豫定の手順。

(面局の迄銀三六は圖一第)

Diagram 1: A 9x9 Go board showing a specific position. The board is labeled with numbers 1-9 on both sides. Pieces are placed at various intersections, including King, Silver, Gold, Knight, and Pawn.

第一圖面以下の指手。

- ▲四八銀 ▲五四銀 ▲五七銀 ▲六二飛
▲五八金 ▲四二金 ▲七五歩 ▲四一玉
▲七七角 ▲三二玉 ▲四六銀 ▲九八歩
▲一六歩 ▲一四歩 ▲五七金 ▲五二金上

上手五七金は六筋の防衛であつて、斯く指さなくては、四六にゐる銀の活動が出来ない。下手五二金は自營を更に一層堅くした手。

(面局の迄ル上金二五は圖二第)

Diagram 2: A 9x9 Go board showing a specific position. The board is labeled with numbers 1-9 on both sides. Pieces are placed at various intersections, including King, Silver, Gold, Knight, and Pawn.

第二圖面以下の指手。

- ▲三六歩 ▲六五歩 ▲同歩 ▲七七角上
▲同桂 ▲四四歩 ▲同歩 ▲五五歩 ▲四三銀
▲七四歩 ▲同歩 ▲六四歩 ▲九九歩上



図六五柱 八九こ

【講義】 上手三六歩は自玉の範圍を廣くすると同時に、前に説いた如く、敵玉頭に疵を與へん爲である。下手六五歩の開戦は最早自陣の整備も出来た故、愈々攻めに掛つたのである。上手同歩と應じたのは、前に七七角と上つた時に敵が六筋を突けば取る豫定であつたのであるから、斯く指すのは至當である。敵から取込ませて戦ふとすれば、八八にゐても差支ない譯であるから、上つた一手は無意味に終るのである。下手七七角ナルは豫定の策ではあるが、此の處九九歩ナル、五五歩、八九と、五四歩、七七角ナル、同金、九二飛、五三歩ナル、同金スダ、五四歩、五二金、八六銀、八四歩と突く手もあるが、力指しとなる故紛れが多くて譜の方がよいと思ふ。上手同桂は當然。下手四四歩は攻守兩様を兼ねた好手である。斯ういふ様な處を大切に心掛けねば、將棋は容易に勝てるものでない。何でも斯でも飛車の侵入を急いだり、角の打込を捨て、は、忽ち不利な局面となる。上手五五歩及び下手四三銀共に至當の應酬。

活動する攻撃手筋である。

第三圖面以下の指手。

- 図七二歩 九二飛 六三角 六二歩
- 図八一角 九七飛 七二歩 九八龍
- 図六二こ 同 金 六三歩 七九こ
- 図九九歩 同 龍 六八金 六九こ

【講義】 上手七三歩は次に七二角と打つて敵飛を牽制せんと計つたのである。下手九二飛はそれを避けて早く化り込む手段。上手六三角は普通は七二角と打つ處であるが、一寸下手の氣を引いて見たのである。故で下手が徳だと思つて同金と取つては、上手同歩ナルと指されて、自玉に肉薄される恐れがあつて悪い。故に下手方六二歩は穩當。上手八一角ナル、下手九七飛ナルは豫定の手筋。上手七二歩ナルは今の所これより指す手がない。下手九八龍は敵玉の筋を狙ひ、と金を活動する準備。上手六二とと捨てたは惜しいやうだが、敵に七九とと寄せられた時に、一步手中になくては凌ぎがないから巴むを得ぬ。下手同金、上手六三歩

(面局の迄と九八は圖三第)

九	星	王					龍
八							
七		王					
六							
五							
四							
三							
二							
一	香	桂	銀				香

歩角 駒持手下

上手七四歩は次に六筋の歩を突き出して、敵を壓迫する準備である。下手同歩上手六四歩は當然。下手九九歩ナルは變てその筋から飛車を侵入する仕度であつて、一寸のろい様な手だが、大層必要な手である。此の所六四飛と出ても

格別以下早い手がないのみならず、上手より八二角と打たれて俄に悪い局面となる。上手六五柱は極力敵陣を破らんとする手段。下手八九とは飛車の化つた場合、極力して

(面局の迄と九六は圖四第)

九	星	王					龍
八							
七		王					
六							
五							
四							
三							
二							
一	香	桂	銀				香

歩歩歩角 駒持手下

から決して取られても、攻めておれば損はない。上手九九歩と打ち捨て、敵龍の位置を變へて置かなくては、自分の金が逃げられないから仕方がない。下手同龍、上手六八金共に豫定の手順。下手六九とと迫つたのは當然ではある







せば下手二四歩、上手六二と、下手二五歩、上手同玉、下手三三桂、上手二六玉、下手二五歩、上手一七玉、下手二八銀にて詰みとなる。故に一旦相駒をしたのは當然なのである。下手二八銀と打つて敵玉を、範圍の狭い處へ追ひ出

【二の其化變】  
(面局の迄歩四二は圖)

九	香								
八		銀	龍	馬					
七		馬		馬			馬		
六	馬	王	馬	馬					
五					馬	馬			
四	歩	歩	歩	歩	銀	歩		歩	
三							金		
二			玉			金			
一	香	桂	銀					留	
	一	二	三	四	五	六	七	八	九

歩歩歩桂 駒持手下

すのは宜しい。上手二六玉の外ない。下手三八龍、上手五七金共に至當の應酬。次に下手二四歩で變化第二圖となり如何にしても、上手に術策の施し様なく絶對の負けである。

は前に説いた意味、上手同金及び下手五八とは双方手順。上手同金と五八を取つたが(若し三八金なれば、下手六六歩、上手同金、下手四九龍、上手三七銀、下手四八銀、上手四六銀、下手五九銀ナラズにてよし。又、四六銀と上らずに二六角なれば、三七銀、同角、四八銀、二六角、二四歩にてよし、又二六角の所二六銀なれば、三七銀、同銀五七角にてよし)で本文に戻り、次に下手四九龍と迫つたのは良い手である。(此の形で銀一枚の持駒では他の手段を求めて居ては負けとなる)上手六八金引は五七金と寄つて居ては、玉の逃げ道をふさぐから、かく指すのである。下手三八銀は最も厳しい手である。上手三七玉と早逃げしたのは好手筋。こゝで下手直ちに龍を二九に廻つては、上手の玉に脱出される恐れがある故、一旦六七歩と打つたのである。上手四八金ヨルは、五七金左と逃げて居ては、玉の逃げ道が無くなつて、下手から二九龍と乗せられる手があつて悪い。下手二九龍と一旦逃げる。上手三八金、下手二五桂、上手四八玉、下手六八歩ナルにて第三圖面となり、

- ①二八玉 ②六七角 ③同 ④金 ⑤五八と
  - ⑥同 ⑦金 ⑧四九龍 ⑨六八金 ⑩二八銀
  - ⑪二七玉 ⑫六七歩 ⑬四八金 ⑭二九龍
  - ⑮二八金 ⑯二五桂 ⑰四八玉 ⑱六八歩
- 【講義】上手三七玉と立つてもその結果が思はしくなかつたから今度は二八玉と寄つて見る。下手六七角と切心の

【三の其化變】  
(面局の迄ルナ歩八六は圖)

九	香								
八		龍							
七		馬	王	と					
六	馬	馬	馬				馬		
五					馬	馬			
四	歩	歩	歩	歩	銀	歩		歩	
三							金		
二			玉			金			
一	香	桂	銀					留	
	一	二	三	四	五	六	七	八	九

歩歩金 駒持手下

以下上手に凌ぎがない。即ち五七玉と逃げて、下手五九龍にて詰となる。

以上記述した所に依つて大體お判りの事とは思ふが、まだ上手としては他に何等かの手段を施す餘地がないでもない。それは次に續いて詳述するが、尙ほ上手の奇謀について参考の爲一つ掲げて置く。

- ①七六歩 ②三四歩 ③六六歩 ④九四歩
  - ⑤七八銀 ⑥九五歩 ⑦六七銀 ⑧九二飛
  - ⑨五六歩 ⑩九六歩 ⑪同 ⑫同 ⑬飛
  - ⑭九七歩 ⑮九二飛 ⑯四八玉 ⑰六四歩
  - ⑱三八玉 ⑲六二銀 ⑳四八銀 ㉑六三銀
  - ㉒一六歩 ㉓一四歩 ㉔五七銀 ㉕五四銀
  - ㉖四八金 ㉗六二飛 ㉘七五歩 ㉙四二金
  - ㉚七七角 ㉛四一玉 ㉜六八金 ㉝三二玉
  - ㉞四六銀 ㉟五二金 ㊱五七金 ㊲八四歩
  - ㊳二六歩 ㊴九七香 ㊵同 ㊶桂 ㊷九六歩
- 右の手順中上手方早く七八金と上つて自營の左翼を衝るのが、飛香落の普通定法ともいふべき手であるが、特に他







であるけれども、幾分なりとも變つて指すのが上手の慣用手段である。下手九六歩以下九二飛迄は双方當然の指手。上手七八金は銀と連絡を計つて堅實に守る意味。下手六二銀は徐ろに五筋へ上つて攻めんとする含み。上手四八玉は早く安全地へ玉を移さんとする手段。下手六四歩は銀の進出を計り六筋から敵を攻撃せんとする準備である。

- 第六圖面以下の指手。
- 三三八玉 ○六六二銀
  - 四四八銀 ○五五四銀 ○五五八金 ○六六一飛
  - 五五七銀 ○四四二金 ○六一六歩 ○六一四歩
  - 四四六銀 ○四四一玉 ○五五七金 ○三三二玉

【講義】 上手三八玉及び下手六三銀は共に豫定の手である。上手四八銀は順次五筋より四六に繰上つて敵の攻撃に備へる手段。下手五四銀は前の手の繼續。上手五八金は益堅實に守備を計る手である。下手六二飛、上手五七銀は双方共當然の應手。次に下手四二金と上つたのは今此の處で急に攻めては、敵玉は安全な場所にあるに反して自玉は居玉の状態であるから多少の効果を収めて後、上手に逆襲

(面局の迄桂三三は圖八第)

下手持駒 四手

九	星	羽								
八			王				馬	馬	步	步
七			馬	馬	馬	馬				
六	馬	馬		馬	馬					
五						銀				
四	步	步	步	桂	步	金	飛			
三				玉	金					
二									桂	香
一	香	銀								
	一	二	三	四	五	六	七	八	九	

角 駒持手下

- 第七圖面以下の指手。
- 七七七角 ○五二金上 ○二六六歩 ○六五五歩
  - 同 歩 ○七七七角 ○同 桂 ○三三三桂
- 【講義】 上手七五歩は下手方の桂の働きを妨げると同時に後に至り七四歩と突いて手段を施し角の打ち場所を作る

せられれば随分危険な立場に陥る故、自玉も一旦安全な場所へ移し然る後攻勢に出ても決して遅くはないのである。

(面局の迄玉二三は圖七第)

下手持駒 四手

九	星	羽								
八			王				馬	馬	步	步
七			馬	馬	馬	馬				
六	馬	馬		馬	馬					
五						銀				
四	步	步	步	玉	金	飛				
三										
二										
一	香	桂	銀			金		桂	香	
	一	二	三	四	五	六	七	八	九	

步 駒持手下

上手一六歩は玉の懐を廣くする手。下手一四歩と受けるのは、上手に突き越されては敵玉の範圍を廣くするので斯く指して置くは至當である。又一つには接戦の場合角を一三へ覗く含みもある。上手四六銀は六筋は五七金と上れば防備の補ひがつくから、模様によつて早く敵の玉頭を傷け

含み。下手九八歩は敵角の運用を牽制する意味と、傍ら角の交換となつた場合九九へ成つて活動せんとする、此の場合最上の着目點である。上手七七角は下手が六筋から挑戦して來て角の交換となる折、手順に同桂と跳ねて駒を捌かんとする含みであつて、原型のまま交換されては、駒の形が亂れて大いに悪い。下手五二金上ルは戦開始の場合、離れてゐては先手にあてられる虞れがあるので、その前に斯く指して玉側を堅くして置くのである。上手二六歩は此の定跡の眼目であつて、前號では茲で三六歩と突いたのである。従つて以下の下手の攻防法も前號とは大いに異つて來る次第であるから、此の以後の點は特に注意をしてお調べを乞ふ。下手六五歩の開戦は、最早味方の陣容が整備したから、挑戦の好時機なのである。上手二六歩と突いたのは、初心の方は其筋から攻めて來るのではないかと思はれるかも知れないが、上手が此歩を突いたのは、角が手に入つた場合遠く二七に打ち、下手の陣營を脱んで飛車の活動阻止せんとする深算なのである。故に下手方はそれに應



する用意がありさへすれば、譜の如く躊躇せず開戦をして  
毫も差支へない。上手同歩、下手七七角ナル、上手同桂迄  
は共に豫定の順序、そこで前號に説いたのは、四四歩と突  
いて銀の退路を作つたのであるが、此の形の場合は、譜の  
如く三三桂と跳ねて、反對に銀の進出を計るのである。若  
し此處で前號に説いた如く、三三桂と跳ねず、四四歩と突  
けば上手の乗する處となつて、忽ち苦境に陥る。参考まで  
に其の手順を示せば。

(變化其四)

- ▲五五歩 ▲四三銀 ▲二七角 ▲八二飛
- ▲六四歩 ▲五四歩 ▲同歩 ▲三三桂
- ▲六五桂 ▲四五歩 ▲同銀 ▲同桂
- ▲同角 ▲四四銀 ▲二七角 ▲六二銀
- ▲四六金 ▲にて上手優勢となる。

【講義】 上手五五歩は、下手の四四歩突きの際に手に乗  
じた手であつて、手順に銀を退却させ、然して二七角打を  
作らんとする深算である。下手四三銀と引かず、四五銀な

撃することが遅れるから、強く銀桂の交換をしたのは善い  
手である。下手同桂、上手同角は共に手順、下手四四銀は  
五六兩筋の防備であつて至當な手段である。若し此處で手  
駒の銀を四四に打つて了つては、攻防共に面白くないから  
手順に銀を働かすのが順序である。上手二七角と引いたの  
は、敵が歩切れであるから、従つて角の見通しを止められ  
る恐れがないので、一旦逃げて置くのは穩健なる手である。  
若し此處で早く攻めやうと思つて、四四桂打を自論んで五  
三歩成と指せば、下手四五銀、上手五二と、下手同金、上  
手四四桂と打つても二二玉と寄られ、五二桂と成つた時、  
同飛と取られると、先手に五七金に當りが付いた上、敵に  
多く手駒を持たれ、自玉に危険が生じる恐れがあるから、  
譜の如く二七角と避けて置くのが安全である。下手六二銀  
は防備。上手四六金は下手から格別攻められる憂ひがない  
から、四四銀に對抗して徐ろに攻勢を採れば上手優勢とな  
るのである。依つて前に三三桂と跳ねないで、四四歩と突  
けば斯くの如くとなるから、注意をして頂き度い。

れば同銀、同歩にて自營が亂れて面白くない。又六三銀な  
れば六六金の次に六四歩の手があるから、矢張り面白くな  
い。上手二七角、下手八二飛、上手六四歩、下手五四歩、

(面局の迄金六四(化變))

九	香	桂							
八			王			馬		歩	
七		馬	馬		馬			歩	
六	馬	馬		馬					
五				桂	馬	馬			
四	歩	歩	銀	馬	馬			歩	
三		歩					玉	金	銀
二			玉	金	金	銀			
一	香	銀							香

角 駒持手下

上手同歩迄は双方至當の順。下手三三桂は次に四五歩と突  
いて、角の見通しを止める意。上手六五桂は五六兩筋に於て  
胸徳を計る手。下手四五歩は豫定。上手同銀は飽迄角を活  
躍せんとする策であつて、此處で五五銀と避けて居ては攻

(面局の迄香成七八は圖九第)

九	香	桂							
八			王			馬		歩	
七		馬	馬		馬			歩	
六	馬	馬		馬					
五				桂	馬	馬			
四	歩	歩	銀	馬	馬			歩	
三		歩					玉	金	銀
二			玉	金	金	銀			
一	香	銀							香

角 駒持手下

第八圖面以下の指手。  
▲五五歩 ▲四四銀  
▲同銀 ▲同桂 ▲五六金 ▲九七香  
▲六六角 ▲八九角 ▲六八金 ▲八七盛

【講義】 上手五五歩は愚圖々々してゐて、下手に四四歩  
と突かれては、今度五五歩と指しても四三銀と退却され、  
二七角と打つても四五歩と凌がれるゆゑ當然の着手。下手  
四五銀は強い手であつて、三三桂跳ねに續く豫定の策。上







いても差支へはないが、自分には六六歩の好手が残つてゐるから斯く堅固に指す方が、下手として至當である。上手一二馬、下手六六歩、上手同金は當然の順である。そこで下手九二飛と廻つたのはよい手である。敵玉に迫るには大駒の活用を計るのが一番近道である事は論を俟たないが、よく下手はその考へが一方に偏して居つて、少し離れた駒をウツカリ忘れてゐる様な事も屢々あるものだから局面全體を眺めて見ると、案外この手に限らず好い手を發見する事がある。

第十圖面以下の指手、**九七八銀打** **同** **盛**

**同** **銀** **九九歩** **八九銀** **同** **盛**

【講義】 上手七八銀打は下手に九カ歩ナルと指されては次に九八へ飛車を成り込される手があるし、尙又直ちに七七成香と取られて、同金の時九七飛ナリと指される手も酷しいので、譜の如く指して敵角を捕虜にするのは已むを得ぬ。下手同成香、上手同銀は手順、次に下手九九歩と成つたのは手筋である。七八角と切り同金の時九九歩ナルと指

前號に於て、下手端飛廻りの後一旦六二へ飛車を振り、然して後六九兩筋より撃破する戦法を述べた故、その指方は大體御判りになつた事と思ふから、本號は極めて紛れの多い、簡單の八筋破壊法、即ち棒銀の指方を説く事にす

第十二圖面に至る迄の指手。

**七六歩** **二四歩** **六六歩** **八四歩**  
**七八金** **八五歩** **七七角** **九四歩**  
**六八銀** **七二銀** **六七銀** **八三銀**

【講義】 上手七六歩、下手三四歩と双方角道を通すのは棋法、上手六六歩は、角を交換されては駒が釣合上打込場所が多いから、絶えず自陣の守りに氣を配らなくてはならぬので、思ふ様に駒を運用する事が出来ぬ故、先づ防備を充分にする迄は、角の替りを避ける意味、下手八四歩は、飛車先から攻撃する準備である。上手七八金は、左翼の備へ、下手八五歩は、八四歩の繼續、上手七七角は、飛車先の歩を切らせぬ意味である。下手九四歩は、香のない九

しても、大勢に關する恐れはないが、譜の方が飛車の侵入を圓滑に運ばしめる。上手八九銀と指し下手同と指した第十一圖面迄にて、下手方以下九八飛ナルと指し、四五に

(面局の迄と同九八は圖一十第)

Handwritten table diagram showing a Go board position with pieces like King, Silver, Gold, Knight, and Pawn.

る桂と協力すれば、敵玉に迫るのは容易であるから必勝である。それに反し自玉は二二銀打にて、安全の状態であるから、如何に上手力術策を施しても勝算はないのである。

筋の弱點を利用して、八九兩筋から破壊せんとする含み。上手六八銀は、次第に六七銀と繰上り攻防兩用に用ひんとする意。下手七二銀は、本文指手の通り、次に八三より八

(面局の迄銀三八は圖二十第)

Handwritten table diagram showing a Go board position with pieces like King, Silver, Gold, Knight, and Pawn.

四銀と進出し、棒銀の戦法、上手六七銀は、六八銀と上つた時からの豫定で、敵銀に對抗の意味、下手八三銀は、七二銀の繼續(此處で七四歩と突き敵の七五歩突を消し、次に八三銀或は七三銀と指す手もあるが、其の時敵に強く六



五歩と角の交換を挑まれ、五五角又は四六角と打たれる手があつて非常に紛れがあるから、本指手の通り八三銀と上るのが穩かである。

第十二圖面以下の指手。

- 先七五歩 後八四銀 先七六銀 後四二玉
- 先四八玉 後三二玉 先三八玉 後四二金
- 先四八銀 後九五銀 先一六歩 後一四歩
- 先五八金 後八六歩 先五六歩 後八七歩

【講義】 上手七五歩は、次に七六銀と上り八筋を極力防戦する意味で、非常に手廣い手段である。(此處で若し他の手を指せば、敵に八四銀、九五銀と進出され、八六歩と突かれては潰滅になる) 下手八四銀は、豫定、上手七六銀は、七五歩の繼續、下手四二玉、及び三二玉の圍ひは飛香落と云ふ非常に實力の相違した差があるだけに、居玉の儘で開戦しては多少、効果を収める事となつても、上手に逆襲されると随分危険な立場に陥る故、一旦安全の場所へ圍つて置いて、然る後攻勢に轉じても決して遅くはないのである。

である。上手一六歩は、玉の懷を廣くする意味、下手一四歩は、端の受けで此處で八六歩と先に攻める手もあるが、敵に一五歩と突越されると、敵玉の範圍を廣くするばかりでなく、上手に一四歩と突捨られ下手同歩、上手一三歩と攻撃の機會を與へる事となつて、混戦模様になる慮れがあるから、斯く一四歩と受けるのは當然である。又一つには接戦になつた場合、角を先手に一三へ覗く味もある。上手五八金は、六七金と上り其の筋を堅實に守備する意味と、敵の模様によつては次に六七金、六八角、七七金と寄つて下手の着眼點として居る八筋を凌ぎ、機を見て四六角と進出する意味も含んで居る。下手八六歩は、自營の構へが完備したので、いよく攻勢に移つたのである。上手五六歩は前に述べた通り五七銀、四六銀と繰出して、敵の玉頭から攻める含みである。(此處で八六同歩と取れば、同銀と進まれて直ちに不利の棋勢になるから、譜の如く指すのである。下手八七歩成は、豫定。

第十三圖面以下の指手。

ある。上手四八玉は、安全地へ移す意。下手三二玉、上手三八玉は共に手順、下手四二金は、玉側の堅めで穩健な指方。(此處で五二金と上る方が形がよいが、後に敵に三六歩と突かれて玉頭から攻められた場合、譜の如く四二金の方

(面局の迄成歩七八は圖三十第)



が堅いから安全である) 上手四八銀は備へと共に、次に五六歩と突いて戦線へ出動する準備、下手九五銀は、本章講義の要點で、所謂棒銀の豫定策で、次に八六歩突きの含み

(面局の迄飛二八は圖四十第)



【講義】 上手八七銀は、當然の應手である。(此處で八七同金と取る手もあるが、其の時八六歩、八八金、八四銀の次に矢張り八五銀と出られると、八六歩が響いて居るから一層面白くない。又敵の八四銀の場合八六角と指せば、九



五銀、七七角、八六銀と出られ角を何れに逃げてても、七五銀、八七銀、八六歩の次に七六銀の順となつて悪い。下手八六歩は、至當の攻撃策で、譜の如く打つて攻める素地を作つて置かないと、敵に八六歩と豫防されて了ふからである。上手七六銀は、次に八八歩と打つてその筋を守り、銀を廣く活用せんとする含みである(此處で九八銀と引いては、敵に八四銀の次に、九五歩と突かれて攻められるから面白くない)下手八四銀の立て直しは、次に八五銀と行き交換を迫る意味、上手八八歩の受けは豫定であつて、その儘にして居ては、敵に八七歩と成呉れられ金銀何れで取つても下手から七五銀と進まれて悪いからである(此處で原型の儘角交換の意味に六五歩と突き出せば、下手から七五銀と進まれて、上手同銀、下手八七歩成、上手二二角成、下手同銀、上手八三歩、下手同飛、上手八四銀打の時、下手に同飛と強く切られ、上手同銀と飛車を捕つても、次に下手から七八と、と指される事になつて、非常な駒損を招い得上、そのと金に活用されるから悪いのである)下手八五

銀の進行は、八四銀の繼續で銀を交換した場合九八銀と打つ意志である。上手同銀の替りは餘儀ない應手(此處で交換を嫌つて六七銀と避けられ、敵に九五歩と進められ、後徐ろに九筋から攻められて悪いのである)下手八五同飛は手順、上手七六銀は當然の防ぎ。下手八二飛は、八九兩筋より攻勢を採らんとする目的であつて、譜の様に低く構へて置くと、敵に先手に當てられる心配がないのである。

第十四圖面以下の指手。

- 六五歩 ●七七角 ●同 桂 ●九八角

【講義】上手六五歩は、八九兩筋を氣にして防禦にのみ偏して居つては、面白くない棋勢に導く懸念があるから、それよりは、下手にとつて紛れの多い、五五角打の手段を狙つて、七四歩突きを利かせ、角を交換して有利に導かんとする機宜に適した良策である。(此處で六五歩と突かずに五七銀と繰つて、次に戦線へ進出する含みに着手する指方もあるが、敵に九八銀と打たれると桂損となるのである)下手七七角成は敵陣に壓迫を試みんとする含み。上手同

(面局の迄角八九は圖五十第)

Table of a Go board position with pieces like King, Silver, Knight, and Pawn.

桂は幸便に捌く目的。(此處で七七同金と立つと、下手に急がず自玉を安全にする意味に、二二銀と指されるのである。その時上手には別段良い攻め手が無い故、敵飛車の小鬘を

狙ふ七四歩突きを含んで、四六角と打つても、下手に八四飛と軽くその危険を未然に避けられて、上手は格別効果が無いのみならず、手駒の角を使つた上、次に下手から自營の左翼へ九八角と桂取りに打たれる願が残つて居るから悪

いのである) 下手九八角は、穩かに二二銀、三三銀と漸次運んで玉頭を完全に整備してから攻勢に轉じて、上手には格別これと謂ふ、正しい攻め手順がある譯ではないから差支へはないのである。然し敵の七六銀が放れ駒になつて居るから、その隙を捉へて敵を攻める素地を手順に作る含みであつて非常に良い手である。下手、一見すると上手の陣營を薄弱にする事が出来ると思つて、六九銀と兩當りに打つと、上手に六八金左と寄られて駒を渡した上、先手の角打を失ふから、却つて攻撃に支障を來たす事となつて面白くないのである。

第十五圖面以下の指手。

- 六七金 ●八九角 ●六八金 ●七九銀 ●七四歩 ●八八銀 ●同 金 ●同 馬 ●七三歩 ●同 桂

【講義】上手六七金右の受けは至當である。六七銀と逃げては、下手八七歩成、上手同歩の時、下手に同角成の強



手段があるから、飛車を侵入される結果となつて、角を二枚持つ事になつても、下手には八九龍の策があるから、四九銀打を凌いだ時、下手に八六歩と穩かに打たれると、次にその筋へと金を作られるから、それを活用されて悪い

(面局の逆桂同三七は圖六十第)



のである。下手八九角成は九八角からの豫定。上手六八金引の防禦は當然。六八金と寄つては、下手に八八馬の次にその筋にと金を作られ駒損を招くのである。下手七九銀は

馬の偉力を早く發揮させん爲で、この場合攻撃を講ずるに最も近道である。上手七四歩は、六五歩からの繼承で愚圖々々相手になつて居ると、追々不利な局面になる虞れが生じるから、五五角打を利用して、敵を威嚇すると共に、決戦を遂行せんとする目的なのである。下手八八銀成は豫定。上手八八同金は、餘儀ない應手。下手同馬、上手七三歩成、下手同桂は双方共豫定の順序である。  
第十六圖面以下の指手。

- 五五角
- 八七歩
- 七三角
- 七七こ
- 八二馬
- 六八こ
- 八一飛
- 六六馬

【講義】 上手五五角は、豫定の着手。下手八七歩成は、兩當りになつて居るから、と金を作つて一氣呵成に敵玉に順次迫る方法を講じたのは、此の場合強くして面白い攻め手である。上手七三角成は、敵玉に接近する意味に一角成と指せば、二二銀と馬を封鎖され、次に七七との順にならるから、譜の如く指したのは至當である。下手七七とは、飛車を犠牲にして早く迫る目的である(此の處七七と指さ

(面局の逆馬六六は圖七十第)



す、一旦八六飛と避けて居ても差支へはないのであるが、飛車を渡してもと金の活用が戦しいから、此の方が早くして良いのである。上手八二馬は止むを得ない。下手六八とは

豫定の順序。上手八一飛は、最早此の局面になつては防禦の適手がないから、最後の決戦に出るより致し方ないのである。下手六六馬は、此處で金を惜んで五二金と逃げれば四六馬と引かれ、馬及びと金に當るから、金を渡しても直

接危険の虞れがないので、敵の七六銀に當つてつゝ、六八に居ると金の活用を計つたのは早い寄せ手である。又六六馬と引かず、七一歩と受けても差支へないのである。若し敵が四六馬と引けば、七七馬の先手がある。又四六馬と引かず、七一馬なれば、六六馬と指せば敵の飛角が重くなるから、何れにしても善い。  
第十七圖面以下の指手。

- 六一飛
- 五八こ
- 三九金
- 四八こ
- 同金
- 五九銀
- 五七銀
- 四八銀
- 同玉
- 七六馬
- にて下手勝である。

【講義】 上手六一飛成は、敵の六八との活用を恐れて、五七銀打と豫防すれば、七六馬と銀を取られ、六八銀とと金を取つても、敵から四九銀、二八玉、三八金、一八玉、二五桂と必死を掛けられるので、凌ぎの手段は絶對にない。依つて譜の如く六一飛と金を取るより方法がないのである。下手五八とは、六六馬引よりの繼承である。鬼角初心の内は此の局面のやうになると、取れる銀であるから、











(面局の迄右金二五は圖一十二第)

九	皇	将					将		
八			王			馬	馬		
七		香		香	香	香	香	香	香
六	香			香	香			歩	銀
五									
四			歩	歩	歩				
三	歩	歩		銀		歩	歩		飛
二		角	玉		金			桂	香
一	香	桂		金					

歩 駒持手下

に返るのも仕方のない手、下手五四歩は中央の位を維持すると同時に、角の運用を計つたのである。上手一六歩は玉の筋を広くし、末に至つて敵の模様によつては、その筋より攻勢をとらうといふ手段である。下手それには構はず五二金右と指したのは、普通一四歩と受ける處であるが、目下のやうな局面では、さしたる影響もないので手抜きをしたのである。然し此の際穩かに一四歩と受けてゐても勿

【講義】 上手一五歩は豫定の位取り。下手三一角も亦豫定の策。上手三七桂と跳ねたのは、下手が端を手抜きをしたので、此の桂を利用して一筋より攻勢を探らうといふ準備である。下手三三桂は強くそれに對抗したのであつて、次に上手七五歩と突いたのは、現状のまゝで下手に八六歩と仕掛けられては、以下攻防共に支障を來す結果となるので、下手に七五同角と取らせ、模様によつては、七六金と出て紛れを作らんとする策略である。故に下手もその策略に陥らぬやう、穩かに八四銀と引いたのであつて、至極含蓄の深い手である。上手七六銀と出たのは、平凡に下手に七五銀と出られては、策を施す術がなくなつて了ふから至當の應手である。下手七五銀と交換を挑み、角の進展策を計つたのも局面上至當である。上手同銀、下手同角は共に順序。上手七七金ヨルは八筋の防衛。その時下手二二玉と寄つた手は、一寸忙中の閑といつたやうな手であつて、如何にも悠々とした態度であるが、格別上手からも攻めて來る所はないのだから、自分の方も焦らずに指し進んでゐる

論議の事はない。

第二十一圖面以下の指手。

- 一五歩 ○一角 ○三七桂 ○三三桂
- 七五歩 ○八四銀 ○七六銀 ○七五銀
- 同銀 ○同角 ○七七金 ○二二玉
- 二六歩 ○三二金 ○二五桂 ○同桂
- 同歩 ○三三桂 ○二六銀 ○四五歩

(面局の迄歩五四は圖二十二第)

九	皇						将		
八			王			馬	馬	香	
七			香	香	香	香			
六	香	香		歩		角	歩		
五				歩	歩				
四			歩	銀		歩		飛	
三	歩	歩	桂	金	金			桂	香
二			玉						
一	香								

歩歩銀 駒持手下

氣分は、どの將棋にも肝要である。上手二六歩は玉の懐を広くして、後に至り敵の玉頭を攻める準備。下手三二金は自陣の整備。上手二五桂と交換を挑んだのは、手順に二五歩と進め、何等が手段を求めやうとするのである。下手同桂と應じ、上手同歩も當然。その時下手三三桂と打つたのは、非常に手堅くて宜しい。上手三六銀は下手方に打たれると、如何にも自玉が薄くて危険に陥るので、譜の如く指して防禦策を講じたのである。茲でもし上手五七桂打ちでは角路が止つて面白くないし、尙又三七桂打ちでは、下手に三六銀と打たれて大いに指し悪いのである。それから尙今一つ敵の三三桂打ちに對し、全然捨て置いては、下手に四五歩と銀を攻められ、已むなく退却した時に、六四角と引かれて矢張り指し悪い局面となる。下手四五歩と銀取りに突いた所で第二十二圖面となる。

- 三二銀 ○五五歩 ○同歩 ○五六歩
- 四八銀 ○六四角 ○六七桂 ○五八銀







第二十四圖面以下の指手。

- 図二六銀
  - 図六七飛
  - 図同金
  - 図二八角
  - 図二七銀
  - 図六七銀
- にて下手必勝である。

(面局の逆成銀七六は圖五十二第)

下手持駒 飛香香香香

九	星						将	
八		馬	駒			香		
七		駒	香	盛		香	香	
六		王		歩				
五	香	香	歩	香				
四			歩					
三	歩	歩	桂	銀	歩	歩		
二		歩	玉	金	金			
一	香						桂	香
		一	二	三	四	五	六	七

歩桂金 駒持手下

【講義】 上手二六銀と避けたのは是非ない。此の所で六金と飛車を取つても、三五歩と王手で取られ、次に下手に二七角ナルと指されては見込がない。下手六七飛ナルと切つたのは、以下上手の玉に寄り筋があるから、此の局面と

下手引角破壊法

飛香落は下手が、飛車を端へ廻つて一旦その筋の歩を交換して後、六筋へ廻轉して攻める手段が専ら用ひられて居り、現今では、殆んど飛香落の定跡はそれに限られてゐるやの感があり、従つて下手としてその手段は諸君の間に於ても可成り研究が積まれ、却々過ちの少なくなつたことは、棋道のため慶賀に堪えない。

然し今回説述する下手引角の戦法も亦、飛香落の定跡として相當威力のあるもので、指し慣れたならば、或はより以上指し易いかも知れぬと思ふ。

その理由は、大體此の戦法は力指しの如く見える胸組であるから、平手の場合の形にも一寸似て居り、即ち諸君が平常一番多く見慣れて居り、指し慣れて居る形であるからである。

此の將棋は往々にして、上手から自玉の頭へ肉薄されて、一敗地に塗れて了ふことがあるから、その點は此の驛頭に

しては至當の指し手である、上手同ヨルと取る一手であつて、その時下手三八角と成つて必死をかける。即ち上手が捨てて置けば、下手方四四桂打にて直ちに詰みである。故に上手三七銀と引いたのも、已むを得ない受け手である。次に下手が六七銀ナルと指した第二十五圖面までにて最早上手は如何に努力しても勝算は更にないのである。

此の將棋は下手が、八筋から巧みに棒銀を利用して攻撃手段を講じたものであつて、上手としても、極力その方面に金銀を集注して防いだのであるが、如何せん胸落のひびきが大きくて、終に軍門に下らざるを得ぬ結果となつたものであつて、下手の攻撃法としては讀者諸君がよく玩味研究されれば、實戦上必ずや得るところが多からうと信じてるのである。

X X X X X X X X

述べて特に御注意申し上げて置く次第である。  
第二十六圖面に至る迄の指手。

- 図七六歩
- 図七八金
- 図六八銀
- 図五六歩
- 図三四歩
- 図八五歩
- 図六二銀
- 図五四歩
- 図六六歩
- 図七七角
- 図六七銀
- 図九四歩
- 図八四歩
- 図七四歩
- 図九四歩

【講義】 上手七六歩及び下手三四歩と角路を開け、次に上手が六六歩と止めたところで、止めずに指すのは俗におみきと稱する手段である事は諸君の既に御承知の通りである。下手八四歩は飛車の捌き。上手七八金は胸組である。

下手八五歩は豫定の手段。上手七七角と出るのは、すんなり敵飛車先の歩を交換されては、末に至り大いに指し悪くなるので、それを避けたのである。次に下手七四歩はその筋の位を敵に張られては、以下引角にした場合攻撃上非常に支障を及ぼすので、當然の捌きである。上手六八銀は漸次六七へ繰り上げて、味方の陣營に備へんが爲、下手九四歩は敵の端の痛みをつく手段。上手五六歩は、金銀の活動



(面局の迄歩五' は圖六十二第)

下手持陣 子ナ

九	皇	將	將	王	王	將	將	香
八						馬	馬	
七		香	香	香	香	香	香	
六								步
五								步
四			步	步	步	步		
三	步	步					銀	飛
二		角	玉		金	玉	金	桂
一	香	桂	金					香
	一	二	三	四	五	六	七	八

シナ 駒持手下

範圍を廣くする準備であり、下手の五四歩はその受けであつて、大切な處である。

第二十六圖面以下の指手。

- 四八玉 ○四二玉 ○三八玉 ○三二玉
- 四八銀 ○四二銀 ○一六歩 ○一四歩
- 五八金 ○五二金 ○五七銀 ○三三銀
- 四六銀 ○四四銀

下手四四銀は上手から五五歩と仕掛けられる手を凌いだのであつて、非常に手堅い指し方である。玉の頭にかゝる方が堅く見えるが、事實は此處に出でゐる方が、却つて玉頭

(面局の迄銀四四は圖七十二第)

下手持陣 子ナ

九	皇	將					將	
八			王	王	王	王		
七		香	香	香	香	香	香	
六								步
五								步
四			步	銀	步	步		
三	步	步					金	飛
二		角	玉		金			桂
一	香	桂	金					香
	一	二	三	四	五	六	七	八

シナ 駒持手下

が安全なのである。その邊の呼吸はよく玩味して戴きたいと思ふ。

第二十七圖面以下の指手。

- 六五歩 ○九五歩 ○三六歩 ○七三桂

【講義】 上手四八玉は玉を安全地へ移す手段。下手四二玉も同じ。上手三八玉及び下手三二玉も共に同意味。上手四八銀は中央に勢力を保たんとする手段である。下手四二銀は以下次第に自玉の頭を守り、次に角を三一に引く準備。上手一六歩は玉の逃げ道を作つて置き、且つ末に至りその筋より攻めんとする手段である。その時下手が一四歩と受けたのは、上手に一五歩と突越されると、單に敵玉の懐を廣くするのみならず、自己の玉が端に近く往つてゐる關係上、その筋からの敵の攻撃が早くて、將來非常に危険に陥る。上手五八金は安全に駒組を整へて置くのである。下手五二金はそれに同じ。次に上手の五七銀と出たのは、機を見て七筋及び三筋の方面より攻撃に移らんとする準備である。下手の三三銀は豫定の手段。上手四六銀の處で、四六歩と突いて以下四七金と上り、下手の仕掛けを待つ指し方もあるが、その手段は餘りに退嬰手段であつて、下手からの攻撃がゆつくりで間に合ふ様な結果を生じ、上手としては紛れが少い爲、策を得たものとは申されない。

- 二六歩 ○三二角 ○八八角 ○九六歩
- 同歩 ○八六歩 ○同歩 ○同飛
- 八七歩 ○九六飛

【講義】 上手六五歩は自己の角筋の見通しをつけ、何らか攻撃の手がかりを蓄へて置く手段であつて手筋である。下手九五歩は、駒組を整つたので、その筋の敵の隙を咎めるのである。上手三六歩は機を見て、下手の玉頭より攻撃に移らんとする準備であると同時に、自玉の働きを自由ならしめる手段である。下手七三桂と跳ねたのは、動もするとその頭を攻められるおそれがあるが、それは大した危険もないから斯く擲いて置く方が徳策である。上手二六歩は、目下の處格別の手もないので、餘りに玉を安全な形にして置くのである。然しそればかりではなく、模様によつては更に二五歩と突き進めて、下手の玉の小鬚を窺ふ意味も含まれてゐる。下手三一角と引いて、愈々最初の目的を現はす。言ふ迄もなく、上手の陣は駒が手薄で従つて角の打込み場所が多いのであるから、上手の角と交換をしや







飛同歩 飛九七歩 飛同歩 飛同歩 飛一五歩 飛同歩 飛一三歩 飛八六歩

【講義】 上手八六歩は、此の際忍び難い手であるが、捨て置けば桂を一枚只取りされるし、攻撃上また適當な手段がないので已むを得ない。下手九六歩と請求する。上手八五桂の脱出は豫定の手段。下手同桂と一旦取つてから九七歩と成つたのは手順である。捨て置いて直ちに下手九七歩と成り込んだのでは、上手に七三桂ナルと指されて下手同銀の外なく、形が亂れるだけつまらない。以下上手八五同歩の次に、下手九七歩ナルと指した時、上手同歩と應じたのは、幸便に敵飛を侵入させて損のやうだが、此のと金を捨て置いては、下手に八七とと寄られて、却つて下手の飛車に成り込ませる調子を與へるものである。下手同飛ナルと指した時、上手一五歩と突いたのは、持ち駒の桂を利用して下手の左翼を破壊せんとする手段であつて、局面上唯一の着眼點である。さうかと言つて下手の飛車に成り込まれて了つた今日、受け手にのみ没頭してゐるや

あらうと思ふ。

(面局の迄歩六八は圖十三第)



飛一五香 飛八七歩 飛六八金 飛七七こ  
飛八九桂 飛六八こ

【講義】 下手の八六歩打ちに對し、上手としてはそれを成らせぬ適當な手段がないので、一五香と走つて攻撃に出たのである。若しその場合、下手の歩に八七へ成られぬや

うな始末では、より以上悲境に陥つて了ふ。下手敵の一五歩を、なるべくなら捨て置いて早く攻撃したいが、手的一步よりないので、上手に一四歩と取り込まれた場合、一二歩と受けるのが辛い處であるから、一先づ同歩と應じたのは適當な措置である。次に上手一三歩は豫定の手段であつて、下手若し同香と應じれば、上手二五桂、若しくは一二歩等の手が生じる。然し上手としては、一三歩とゆるめず、一二歩と直接打ちたい處であつたが、下手同香、上手二五桂、下手一四香となつて以下上手歩切れ故策の施しやうがないのである。下手もかゝる處に拘泥してゐては、局面を混戦に傾ける虞れがあるので、此の方面はもう顧みないで、譜の如く八六歩と打つてと金を作らんとしたのはよい手である。一見九九龍と突つ込む方が手筋のやうにも思はれるが、手駒が貧弱であるから、攻撃を持続する事は六ヶ敷いのである。如何なる場合でも、最も早いといふ方は、最も遅いと思はれる手の中に、潜んでゐるものであるといふことは、充分その意味を會得して置かれる必要が

う上手七九桂と一旦受けては、下手に一三香と走られ、以下攻め駒の桂を失つてゐるから手段がない。尙う上手が桂を使つて了へば、下手は安全であるから一時四二角打と自重して、敵の一五香の進出を妨げ、後徐ろに九八龍と指し九七香ナル及び、六六桂打の兩手段を貼つて指すやうな方法もある。故に上手としては、七九桂と受ける手は絶対に悪いのであつて、決戰的に一五香と走るのは局面上最も至當である。下手八七歩ナルは豫定の襲撃。上手六八金左と一旦避けたのは已むを得ない。そのまゝにして置いて一二歩と成りたい處であるが、下手に七八とと金を奪はれると、以下どうにも仕方がない局面となる。即ちそのと金を次に七七へ引かれて銀取りに使はれては大變であるし、又そのと金を同銀と拂へば、下手六六桂の好手があるから、譜の六八金左は當然といへやう。下手飽迄七七と指して胸徳を計る。上手同金と應じては、下手に同龍と指されて平凡に駒損になつて了ふので、八九桂と飛車取りに打つて下手の應答を問ふのは、上手として策を講じたものであ



る。下手次に六八と取つたのは、飛車を敵手に委ねても金銀二枚を得れば、以下敵玉に必死をかける事を見越しての決行手段であつて、六八とと金を取らずに、六七とと銀を取つても、矢張り二枚替へにはなるけれども、あとの敵の金の姿がよいので、下手の力としては以下非常に危険であり、或は不利と断定する事も出来るかも知れない。即ち手順を一つ誤れば、勝つべき將棋も敗けになるといふ理由であるから、充分氣を付けなければならぬ所である。尙又此の下手六八と、決戦に指さず、隠かに九九龍と逃げてゐる手段もあつて、是は不利な局面といふわけではない。只本譜の六八とよりは、幾分緩手であるといふそしりは免れない。即ち上手八九桂に對して下手九九龍なれば、上手七七桂、下手一六角、上手四八玉、下手二九龍、上手一二歩ナル、下手四五桂、上手同銀、下手同銀と取つてゐて、矢張り優勢なのである。その以下は下手方五六桂打ち及び四九角ナル等の攻撃手段があるのでよいのである。であるから、斯うした安全第一の方法をとつて指しても、別段差

第三十一圖面以下の指手。

●九七桂

●六七〇

●同 金

●五八銀

【講義】 上手九七桂と敵龍をとつたのは豫定であり、下手が一氣に決戦に出た以上、我又決戦的覺悟を定めるのは如何なる場合でも當然である。下手こゝが六ヶ敷い處で、五八とと敵金をとつて指したいやうな處であるが、次に上手に同銀と指されてゐると、一寸必死がかけ悪くなる。故に六七とと銀を取つて、敵の金を敵玉より遠い方へ追ひやつて、必死をかけんとするのである。上手同金と敵のと金を取らず、一二歩ナルと指しても、下手に五八とと更に自分の金を取りつゝ迫られると、その時上手二二飛と打つて王手を持けても、下手三三玉と上られて上手指し切りである。故に譜の如く一旦上手六七同全と應じて置くのは、局面上已むを得ない處である。その時下手が五八銀と打つのは非常に好手であつて、斯ういふ局面は、飛車落や飛香落にはしばしば現はれる形であつて、上手の玉は防備が薄いから、下手が大胸を切つて、敵陣に金銀類を打ち込み、敵

支へはないのであつて、只手数が伸びる方法は、下手方としてはどうしてもその中に間違へることがあつて、とる可き道とは申されないものである。

(面局の迄と八六は圖一十三第)



要はいつれであつても、勝つとすれば結局は同じことなのだから、諸君が充分お調べになつた上、どちらの方法でも自分の指し易いと思はれる方をお選びになるのが、實戦の場合には一番よい事だと思ふ。

玉に肉薄するのは、此の局面に限らず、よく覚えておいて實戦上にも用ひられたい。

下手が飛車や角をどしどし切つて、随分亂暴だと思ふやうな將棋でも、上手は玉に金銀で迫られ、上手がその防衛

(面局の迄銀八五は圖二十三第)



に折角手に入れたそれ等の大胸を自營に使用するやうな結果となつては、大變苦しいものであるから、下手がその上手の氣持ちを呑み込んで置いて、さういふ手筋の現れた場



合、大いに利用して戴きたい事を、此の機会にくれぐれも推言しておく次第である。

下手が五八銀と打つた第三十二圖面迄にて、上手の敗けである。と單に述べただけでは餘りに漠然としてゐるから以下その後の双方の指し手順について、少しく述べて置かう。第三十二圖面以下。

(イ)上手一二歩ナルなら、下手四九角(その時上手玉を四八へ寄れば直ぐ詰である)上手二八玉、下手二七金、上手一九玉、下手六七銀ナル、上手二二飛、下手三三玉迄にて以下上手方絶対に凌ぐ手がない。

(ロ)上手二八玉早逃げなら、下手四九角と打つて置く手が好手である。即ち上手捨て置けば(イ)と同じ事になるから何とか凌がねばならないが、持ち駒が飛角のみであるから、凌ぐ手がないのである。假りにその時上手二七角打なら、下手同角ナル、上手同玉、下手更に四九角打てよい。又上手二七角と打たず四八飛又は三七飛いづれでも、下手の玉が絶対安全になつてしまふから、到底此の手段は上手

### 下手引角破壊法

前號には次に掲げる圖面の場合、上手方が角の交換を嫌つて八八角と引いたものに就いて述べたが、本號には上手方が角の交換をおそれず、八八金と寄つて自己の左翼の防衛をはかつた時の下手攻撃法を説述して行かう。

第一號以來述べ来たところによつて、讀者は最初から駒組手順は、充分御承知のことと思ふから省略する。従つて諸君はもう駒組についての利害關係は、卒業したのであるから、中盤以後の寄せ手順について、特に力を入れて御研究下されたい。

私もその心算で、その點に充分注意と努力を拂つて、一生懸命に説述の筆を運ぶ次第である。諸君の實力がそれによつて、充分養はれたならば、自然駒組の上にも缺陷がなくなるものであつて(敵の缺陷を見出す力がつくから、自分の方の疵も發見できる理由である)飛香落のみに限らずどの棋戦にもその點が最大の益をもたらす結果となる。

としてはいれられない。

(ハ)上手三七玉なら、下手矢張り四九角と打つ。上手五七銀下手二七金、上手四六玉、下手六七銀ナル迄にて問題にならない。

(ニ)上手六八金引なら、下手四九角、上手四八玉、下手五六桂、上手五七玉、下手六八桂ナル迄にて矢張り上手絶望である。

以上述べ来た處によつて、第三十二圖面以下の手順についてはお判りになつた事と思ふ。

實戰中本局の最も注意を要するのは、上手から三五歩と突かれて、下手の玉頭から打ち破られること。それから本譜の中にも現れてゐるが如く、下手の左翼の端から改められる事。又みだりに下手香車を走らぬ事。上手から九四歩など、打たれて、飛車の小鬚を脅かされる懸念があるから……以上の事に注意しつゝ、なるべく早く角の交換をして、敵陣に打ち込む工夫を講ずれば、自然指しよい結果を招くこととなる。

いふまでもなく寄せば、軽く鋭く、凌ぎは軽く、強にそのことを充分念頭に於いて對局して頂きたい。

(番手の手上は圖三十三第)

八	香	桂	角	金	銀	飛	香
七	玉	桂	角	金	銀	飛	香
六	玉	桂	角	金	銀	飛	香
五	玉	桂	角	金	銀	飛	香
四	玉	桂	角	金	銀	飛	香
三	玉	桂	角	金	銀	飛	香
二	玉	桂	角	金	銀	飛	香
一	玉	桂	角	金	銀	飛	香

第三十三圖面以下の指手。

- 八八金 ○八六歩 ○同 歩 ○同 角
- 同 角 ○同 飛 ○八七歩 ○八四飛
- 六六角 ○八一飛 ○五五歩 ○六四歩



左翼の香のない缺陷を補ふのである。下手八六歩と突いて角の交換を挑むのは豫定の手段であるが、總じて大駒落の將棋は、自己の陣營に比較して、敵の陣中が駒の配置が薄いのであつて、打ち込みの隙が多いのであるから、なるべく早く交換を企てる事が大切である。

それだのに初心の方は兎角、大駒の交換を何となく不安に感じて、却つて自分からそれを避けるやうな策を採る方もあるが、それは以上述べたやうな理由から見ても、心得違ひであると言はねばならぬ。

上手方八六同歩及下手同角は當然の應酬である。そこで上手方更に同角と應じてゐるのであるが、若し彼我の形勢上大駒の交換は不利であると、軽く六六角と體をかはず場合もあるから、それに對する下手方の攻防法を變化として一寸左に述べて置く事にする。

【講義】 右圖面の場合、下手方は三一角と引くのが一番粉れが少なくてよい。そこで上手方としては穩かに八七歩と打つ手段及び、更に積極的に八四歩と受る手段とがある。

別不利の將棋ではないが、その時は五三銀と上つて、後徐ろに六四歩突きの味を窺へば指し易いのである。

その時には何故直ちに六四歩と突いてはいけなかつたかといふと、上手方は八四に打つた歩を頼りにして、四四角と切つて来るかも知れない。即ち下手方同歩の時、上手方八三銀と打ち、下手が餘儀なく八一飛と退却した時に、上手七四銀ナルと指し置いて、次に八三歩ナルの手段によつて、攻め来るは必餘であり、下手としては幾ら粉れが多い理由である。尤も右手順とならば、上手方は稍指し切り筋であつて、七四銀ナルと指した時、下手方が直ちに九二角と先手に打つて、飛車の活用を計ればよいのではあるが——何にしても、下手方としては危い橋を渡る必要はないから上手が八四歩なら、一旦五三銀と上つて、上手方の角切りを凌いで後、徐ろに六四歩と突き出せば、充分間に合ふのである。

そこで又解説は本文に戻り、上手八六同角と應じる。下手方同飛と進み、上手八七歩と仰へるのは双方當然。そこ

以下その兩者に對する下手方の指手順を示す。

下手方の三一角引きに對し上手方八七歩なら、下手方六四歩と突き、上手同歩の時、下手一旦六五歩と先手に打ち置き、上手が七七角にても又は三九角にても、六四角と進

(面局の迄角六六は圖化變)

九	香	桂						香
八			王	零				
七				飛	馬	飛	角	步
六	飛	飛	飛	飛	飛	飛	飛	步
五					飛			
四	步		步	銀	步	步	桂	
三			步	步	金	銀	飛	
二			玉		金			
一	香	桂		金				香

下 駒 持 手

出して、後徐ろに對戦すれば、位勢の局面であるから、充分指し易い。尚又上手方穩かに八七歩と打たず、八四歩と打つたなら、下手方その時矢張り前述の手順を選んで、格

で下手方八四飛と引いたのは、八二又は八一へ引いても格別不安はないのだが、譜の如く指しても差支へないのだから、その方が幾分でも飛車の活躍範圍が廣く利益である。その時上手六六角と打つのは、折角手中にある駒を放すので、非常に惜いのであるが、棋勢進展をはかる上に於いて、是亦已むを得ないのである。

何となれば、目下の形勢より見て、上手方格別指す手がないのであるから、下手方の應手を待つ意味に二五歩とでも指して居るとすれば、下手方は直ちに六四歩と突き、上手に同歩と取らせ、六六歩と敵銀の頭へ叩いて、上手同銀の時下手方九九角と打つて、上手方がそれを凌いで七七角打ちでも、七七銀引きでも、下手方は八五桂の跳躍によつて、大いに優勢である。

故に一見平安に見える局面ではあるが、下手方としては右のやうな好手段が伏在してゐる理由であるから、上手が六六角と打つたのは、局面上至當なのである。

尚講義の中に屢々、變化の解説が交つて居り、一寸煩



しいかも知れぬと思ふが、讀者は一行一行丁寧に読んで下さつて、私の意のある點を充分會得し、戴きたいと希望する次第である。

何にしても御承知の如く拙文である上に、非常に多忙な身體であり、遂急いで書くのであるから、或は一才御判讀し兼ねる節があるかも知れず、それに雜誌の頁數にも制限があつて、さう直接お逢ひして申し上げるやうな譯にもいれない。どうぞ不明の點があれば、私に直接御遠慮なく御質問して下さい、以て私の文意の足らぬ點を補つて戴き度い。その方が寧ろ、私の立場からしては、充分自分の意思を諸君にお傳へする機會を得るものであるから、欣幸の次第と存じる。

そこで又本文の講義に移る。上手六六角打に對し下手方八一飛と避ける(註八二飛と引いては、將來若し敵角に端へ侵入された場合及び、七筋から敵の攻撃に遇つた場合など、直接飛車にあてられるから、不利である)上手そこで五五歩と突いたのは、前述べた如く棋勢の進展を劃した手

- ▲五五四歩 ▲六五歩 ▲七七角 ▲九九角
- ▲七八金 ▲七七角 ▲同 ▲九六歩
- ▲同 ▲八六歩 ▲同 ▲同 ▲飛

【講義】 上手方六四同歩と取れば、下手方に六五歩と打たれるので、五四歩と取り込んだのである。下手六五歩、上手七七角は双方當然の應接(上手七七角のところ、四八又は三九へ引いては、以下その角を使用する手順がない)そこで下手方九角と打つのは味ふべき手筋であつて、一番早くてきびしい攻め手なのである。次に上手七八金も餘儀ない。(捨て置けば下手方に八五桂と跳ねられ潰滅に陥る)即ち下手は角を逃げれば金を只取られるから四四角と切り、下手同歩、上手九八金、下手七七桂ナル、上手九九金、下手六七成桂、上手同金、下手八七飛ナルの順序となる)下手七七角ナルと交換をした折、上手方同桂と應ぜず同金と取つては、第一金の姿勢が悪くて非常に指しにくいのみならず、下手方にぼんやり八八歩と打たれても大いに

段であつて、下手若し同歩と應じれば、更に同銀と交換を挑んで、廣く變化を求めつてもよいのである。故に下手方それに構はず、六四歩と突くのは、此の定跡の眼目であつて、此の將棋はどうしても、此の筋の歩を進めなくては、後に攻撃をする場合、いろ／＼と不便を感じるのである。

(面局の迄歩四六は圖四十三第)



第三十四圖面以下の指手。

困るし、尙又きびしく六六歩と突かれ、上手同銀の時、下手方に六九角と打たれても、矢張悲境に陥る。故に本譜のごとく、上手七七同桂と應じるのが正しいのである。

かういふ棋勢になつて来て、よくお判りになるであらうが、下手方が初めの中に、六筋の歩を進めて置かないと、軽く敵の駒の姿を亂すやうな手段がなくて、一寸指し悪いものである。面倒なやうでも、指して置くべき手はどうしても指して置かないと、後に支障を及ぼして来るので、それから又改めて準備に取りかゝらなければならぬ事となるから、却つて早く勝たうと思ふのは、遅い意味なのである。中々大駒ばかりの、派手な活躍によつてのみ勝つといふことは望まれないものであつて、それは指し切りに陥るおそれがあり、尙又過激に走らぬものとしても、右に述べた如く、それから漸次應援の兵を繰り出すのでは、俗に言ふ將棋が又新規になるのだから、却つて面倒でありませう。上手方が七七同桂の次に、下手方九六歩と突くのは、何でもない手筋のやうですが、實戦中は氣が付かない——言は



忘れてしまふ手であるが、一番きびしは手段なのであつて、上手方同歩と應じの外はない(註)下手方に九七歩ナルと指され、次に八七と活用されては見込みがないのである。下手さうしてから八六歩と打つのであつて、僅此の二手ではあるが、矢張り前後しては面白くないのであつてあとから九筋の方を突くと、上手方に捨て置かれて他の手を指されるかも知れない。

目下の形勢では、下手方に大した缺陷もなく、間に合ふ將棋ではあらうが、然し上手方としては七五歩と突いて、下手方の桂頭を攻め来る手段があるから、油断をしてゐて緩い手を指せば矢張り危険である。

大體實力の上に大きな相違があるのだから、上手方から強襲される順序となつては、下手方は凌ぎ切れないものである。尤も上手方が無理をして、攻撃に出た場合は別問題であるが、さうでなくて、さうした順序を與へては絶対に危険である。要は攻めるべきが下手の位置だから、受けに廻つてはならないといふ意味である。

下手九六飛と廻る(前に九筋の歩を突き置かなければ、勿論此の手段はなく下へ退却しなくてはならない)上手今度は敵飛車を止める術がないから、六八金と指して、金銀の連絡をはかる。此のやうな手は實戦中非常に肝要であつて凌ぎ切れないと見たら、なるべき味方の駒は玉の近くへ少しづつでも運んで、戦線から立ち退く策をとるべきである。下手九八飛ナルの所で、もう一間奥へ這入つて九九飛ナルでは、上手に六九歩と打たれて活用の範圍が狭い。

次に上手方七五歩と突き出して来たのは、言ふまでもなく下手方の桂を脅かしつゝ、陣營を亂さうとする目的であるが、此の所飽くまで自衛の防備に重きを置いて、六九歩と打ち置けば、下手方に九七香ナルと指され、それから七五歩と、下手方の桂頭を攻めても、下手に八七成香と寄られ、上手七四歩と取り込んだ時、下手に七七成香ノ桂を取られて、上手方同金の時幸便に下手八五桂と逃げ出す順序となる。それから又右の手順中、下手七七成香に對し、上手方駒損を免れる意味で、七三歩ナルと指せば、下手方六

上手方八六同歩の時、下手方同飛と進出するのは、前に八六歩と突き捨てた時からの豫定策である。

(面局の迄飛六八は圖五十三第)

九	香	桂							
八			王		馬	馬			
七				車	馬	車	飛	車	
六	車	車	車	馬		歩			
五					歩	車	歩	桂	
四					歩	銀			
三					歩	玉	金	銀	
二							金		
一	香	桂							香

歩歩角 駒持手下

第三十五圖面以下の指手

- 八七歩 ○九六飛 ○六八金 ○九八飛
- 七五歩 ○八六歩

【講義】 上手方八七歩は此のまま、下手方の飛車を進入させては大層不利であるから、兎も角一旦仰へたのである。

八成香(七三同銀と應じるのは弱い)上手六二との時、下手五八成香にて、勝敗の数は問題にならない。尙又右の手順の中、下手方六八成香に對し、上手方一旦同歩と應じれば、下手方も亦七三同銀と取つてゐて、駒徳となり矢張り指し易い。

故に下手方の九八飛ナルの侵入に對して、上手六九歩と受けてはゐられないのであつて、本譜の如く七五歩と指すのは當然の着手である。

それから尙もう一つの注意は、上手方が六九歩と打ちもせず、或ひは七五歩と攻めもせず、他の手を指してゐたら下手方は九七香ナルと指して、活用をはかるのである。上手方は七五歩に對し、下手方同歩の手段は勿論ない。と言つて九七香ナルと指しては、上手方に七四歩と進まれ八七成香の時、上手七三歩ナルの順であるから、例令その時下手七七成香と肉薄しても、上手に同金と應じられ、次に下手方は七三銀と金を取つてゐなければならぬので香損の上後手を引く勘定である。



故に下手方九七香ナルの手段は殺いといふわけであつて譜の如く八六歩と打つのが良いのである。此の下手八六歩は相當に意味の深い手であるが、以下順次譜につれて説述して行く方が判り易いことと思ふ。

(面局の迄歩六八は圖六十三第)

九	皇	飛							龍
八			王		馬	馬			
七				飛	飛	飛	飛	飛	歩
六	飛	飛	飛	飛					
五						歩	飛	歩	
四	歩		歩	銀	飛			桂	
三			歩						
二			玉		金	銀			
一	香	桂		金					香
	一	二	三	四	五	六	七	八	九

歩歩角 駒持手下

第三十六圖面以下の指手。

【講義】 上手方七四歩と取り込んでも、下手方に八七歩

飛六九金 飛八七角 飛五九金 飛七六角

(面局の迄歩七六圖七十三第)

九	皇	飛							龍
八			王		馬	馬			
七				飛	飛	飛	飛	飛	歩
六	飛	飛	飛	飛					
五						歩	飛	歩	
四	歩		歩	銀	飛			桂	
三			歩						
二			玉		金	銀			
一	香	桂		金					香
	一	二	三	四	五	六	七	八	九

歩角 駒持手下

の連絡を断つ意味であつて、その儘に乘じて一氣呵成に攻め倒さうの深算である。上手六六同銀は已むを得ないのであるが、此のところ若し五六銀と上れば、下手方に五五歩と、交換を挑まれて大いに悪く、尙又五六銀と上らず七八銀と引けば、下手方に九七香ナルと指され、七四歩と取り込んでも、下手八八成香と指され上手七三歩ナルら下手方七八成香と更に迫り、騎虎の勢ひ、上手六二とと銀を取らば、下手方更に六八成香、上手五二との時、下手五八成香と指し置いても自玉に詰みがないから、一手儘かな勝ちであるが、五八成香と指さず、四九角と捨てれば上手の玉は詰みである。

右に述べた如くであるから、上手方が六六同銀と應じたのは、至當の手段なのである。そこで下手方六七歩と打つのが又々軽い手である。前の八六歩打ちと言ひ、此の六七歩打ちの手段と言ひ、總て棋腕は歩兵を巧みに使ふ様心掛けなければいけない。第三十七圖面以下の指手。

と化られては大變であるから、兎も角八六同歩と取つて置く。此の下手八六歩打ちの意味は、此の機會に八七角打ちの手段を作つて置くのであつて、こゝへ角を打つ穴を作つて置くのと、さうでないのとは、後に攻撃上非常に大きな差異を生じるのである。

六ヶ敷い點であるから、讀者諸君は以下私の説述するところによつて、充分その味ひを覺つて戴きたい。尙一寸前に戻るが、下手方が八六歩と打つところで、九四角と單に打つてゐる手段もあつて、それも相當面白い戦ひを生じるから、最後に變化其の二として説く事にする。念のためお断りして置く次第である。

然しながらそれよりは、此の下手八六歩打ちの手段の方が、數等優れて居るのである事は論をまたない。唯諸君の實力の養成に資するためと、さうした手段より外に適當な手段がない局面を生じた場合のために述べて置かうといふのである。

又本文の解説に戻る——下手六六歩と突くのは、敵金と

【講義】 上手方六七歩を同金スグと取るわけにはいかない(五八の金を下手の龍に取られる)といつて五七金と上れば、下手方に六八歩ナルと指される。

尙又六七同金右と指せば、下手方に八九角と打たれて、以下上手方凌ぐ手段に窮する。即ち上手方は六七の金を何とか保護せねばならない順序であるから、七六角と打つて



衛る外はない——下手そこで六七角ナルと強く指すのが好手である。上手九八角と取る一手(六七同角なら、下手方に六八龍と指される)の時下手方六六馬と引き、手の中に金銀二枚持つてゐる事になるから、次に四九銀と打つて、敵玉に迫れば必勝である。尚其の上手方は龍を取つた自分の角が、下手の香車にあたつてゐるから、矢張り見込みがない。

右に述べた様な次第であるから、第三十七圖面の場合、上手方としては六七同角右の手段もないのであつて、譜如く六九金(避けるのが至當なのである。そこで下手方八七角と打つのだが、前に八六歩と打ち捨てた意中は實に此のところにあつたので、此の角打ちの場所がないと、一寸攻撃上間誤付かなければならない。上手方五九金と寄つたのも亦、已むを得ない手段である。そこで下手方七六角と化した次圖第三十八圖面までに及んでは、上手方絶望である。

今念のため、右圖面以下上手の防手について二三穿鑿し

ル、下手七七歩ナル、上手六二と、下手六八と、上手五二と、下手五八との結果となり、上手更に四一と指せば、下手四八と、上手同金の時、下手方二八金と打ち、上手方同玉なら、下手方四八龍にて、次に三九角と打つ手段があり詰みである。尚又上手方二八同玉と指さず、三七玉と上れば、下手方四八龍と切り、上手方同玉の時、下手方三九角と打つて、是亦詰みである。

故に右の手順の中上手方が一旦、下手方のと金を五八同金と取れば、下手方も一旦五二金と敵のと金を取つてゐて次に上手方は下手の五八龍の手段を凌がねばならないこととなるから、矢張り下手方必勝である。

即ち上手方が五九金と打つて、凌ぐものとすれば、下手方は五六桂と打つて、次に六八歩ナルの好手がある上、八六にゐる馬が見通しであるから、上手方如何に防戦しても漸次駒損の形勢となり、矢張り絶対の敗局である。

つまり上手方が自陣を凌ぐ順序となつては、下手方の六七歩は一手で金になり得るのであるから、取りも直さず、

で見ると、先づ五七銀右と引いたならどうか——それは下手方に五六歩と打たれて問題にならない。それでは五七銀左と逃げればどうか——それは七七馬と指されて、五九の金取りである上に、次に下手方六五桂の活躍があつて

(面局の逆ルナ角六七は圖八十三第)

Table showing a Go board position with pieces like King, Silver, Horse, Knight, Pawn, and Dragon. Includes labels like '王', '銀', '馬', '歩', '桂', '香', '龍' and coordinates '九', '八', '七', '六', '五', '四', '三', '二', '一'.

是以上上手方絶望である。と言つて只銀一枚取られては尙更だ變。今度は上手四八角と受けてはどうか——その時は下手八六馬と指し、上手七四歩、下手七六歩、上手七三歩ナ

金一枚そこにあるのと同じ計算なのである。況してや上手方は自己の防衛に生ま角を使用してゐるのであるから、下手方は充分な棋勢である。尙又第三十八圖面の場合、上手が四八角と凌いだなら、下手方は一旦六三金と上つて、七筋の缺陷を捕ひ、後途ろに對戦すれば尙更充分安全に勝ち得るのである。

變化其二

(番手の手は圖二第化變)

Table showing a Go board position with pieces like King, Silver, Horse, Knight, Pawn, and Dragon. Includes labels like '王', '銀', '馬', '歩', '桂', '香', '龍' and coordinates '九', '八', '七', '六', '五', '四', '三', '二', '一'.



右掲出の圖は、本文において下手方が八六歩と打捨て、以下強く迫る所を、さう指さずに單に九四角と打つて、六六突きを含みを覗つた所である。

上手方は捨て、置いて七四歩と指しては、下手方に六六歩と突かれ、同銀の時、下手五八角ナルと切られ、忽ち潰滅に陥るから、何等かそれに對して防衛の策をとらねばならない。

上手七七桂留の卷

前號には下手居飛車引角の戦法を説いたが、それによつて大體その攻撃法は諸君が既に會得せられたことと思ふから、今回は上手方七七桂と跳ねる奇謀について述べる事に

する。是は上手方が一種の「はめ手」に類似した手段であるから、下手方にその研究がなければ、なか／＼指しにくいものなのである。

尙此の手段は實戰中上手方が相當多く用ひるのであつて私たちが觀戰の場合、下手方がそれに對する手段を知らな

手同角、下手五七銀にて大いに優勢である。尙右の手順中初めの下手五七銀打ちに對し、上手同角なら、下手同歩ナル、上手同銀の時、下手五六歩と打ち、上手同金なら、下手六七歩と打つてよく、上手五六同銀なら、下手六六歩にて是又大いに優勢である。

故に變化第二圖の場合、上手四八角と打つて凌ぐのは、下手方に五六歩の輕手を指され不利であるから、上手は四九角と打つて凌ぐのが一番よい事になる。

- 図七六歩 二四歩 図七七桂 八四歩
図八六歩 七二銀

(面局の迄銀二七は圖九十三第)

Table with 9 columns and 9 rows representing a Go board position. Columns are labeled with numbers 1-9 and characters like 香, 桂, 銀, 金, 玉, 歩, 飛, 馬. Rows are labeled with numbers 1-9 and characters like 香, 桂, 銀, 金, 玉, 歩, 飛, 馬.

【講義】上手方七七桂及び、下手方三四歩は、双方角路を開けたのであつて、格別申し上げる要のない手である。



下手八四歩と突くのは大切な手であつて、上手方が次の手の如く八六歩と應じなければ、下手更に八五歩と突いて以下大いに指し易い事は論をまたない。

そこで上手方が八六歩と受けた時、下手方七二銀と上るのが、私の最近における研究の結果、一番安全であると認められた手段であつて、他にもいろいろの策がない理由ではないが、些か紛れを生じる癖ひがあるので、私は特に此の下手方七二銀を撰んだ次第である。

尤も大體大駒落、而も一枚半の差があるのだから、どの手段を用ひても、下手方有利の岐れとなるのは當然過ぎる程、當然のことなのだが、それは五角の力ある者の見た話であつて、既に對局に際し、彼我の力量の上に格段の差違があるのだから、その點を充分考慮に入れて、記述して行かないと、折角私も骨を折つて書き、諸君も御多忙の中を割いて御愛讀下さる割合に、實戰に際しての効果が薄いと云ふ、つまらない結果となつてはいけなから、なるべく紛れ少く、而も早く勝ちに達する様調べた心算である。大

上手同金、下手六五桂、上手七八金、下手八六歩、上手九八銀、下手八七角打ちにて大いに指し易い。尙又右手順中下手八六歩打のところ、五七桂ナル、上手八六歩(次に下手方に八七飛ナルと切られるから)下手五六角、上手四六角、下手四七角ナル、六七成桂と寄つてはいけない。上手方に七三角ナルと指され、次に四六馬と引き戻される)上手七三角ナル、下手四二玉、上手五八歩、下手二九馬、上手三八銀、下手一九馬、上手五七歩、下手四四香打ちといふ順に運んでも、下手方以下大いに指し易いのである。故に上手方直ちに八七銀と上るのは無謀であつて、下手方九三桂跳びに對して、一旦七九金と寄つて置くのが當然なのである。そこで下手方八五歩と突けば、上手同歩、下手同桂、上手同桂、下手八八角ナル、上手同金、下手八五飛の時、上手八七歩と打つて置けば彼我の駒の損徳はないけれども、双方角桂の持駒となつて、下手方後が幾分指しにくいのである。

體上手方此の七七桂留の目的は、下手方に端即ち九筋の缺陷を指させない策戰であつて、又一つには敵の模様によつては早く六五桂と活躍する意味を含んでゐるのである。從來一番多く用ひられつゝあつたものは、此の上手方が八六歩と受けた時に下手九四歩と突く手段である。

今諸君の御参考のため、その手段に對する彼我の應接に就いて、次に一寸述べて置かう。

——下手七二銀と上らず九四歩と突けば——  
上手七八銀の時、下手九三桂と跳ねる。そこで上手方七九金と一旦寄るのが普通であるが、大體にも八七銀と指して来たらどうか先づそれについての下手の攻撃手順から述べやう。

下手八五歩と突くのである。上手同歩の時、下手同桂と交換を挑む。上手方七八金と上る一手である(註上手八五歩と同桂では下手方に八角ナルと角一枚只取られる又八六歩と抑へれば、下手方に七七桂ナルと指されて問題にならぬ)そこで下手七七桂ナル、上手同角、下手同角ナル

と上つて自重すれば、上手方に六五桂と跳ねられて、第四十局面となり、是亦下手方としては紛れが多い。

(面局の迄桂四六は圖十四第)

Table showing a Go board position with pieces like King, Silver, Gold, Horse, Knight, Pawn, and Bishop. The board is labeled with numbers 1-9 and letters A-I.

右のやうな局面となつては、下手方としては混戰となるおそれがある。即ち次に上手方に五三桂ナルの手段があるから、何等かそれに對する防衛を施さなくてはならないが下手八八角ナル、上手同金の時、下手六二金と上つて凌げば、上手矢張五三桂ナル、下手同金の時、上手七一角打ち



にて、下手方負けである。尙六二金と上つて渡がす一旦三  
三角と打つても、上手方に七七角と合はされ、その時下手  
同角なら、上手に同銀と指されてゐて悪いから、四二銀と  
上つて渡れば、上手三三三ナル、下手同桂の時、上手に二  
二角と打たれて是亦下手不利である。故に右の手順中、下  
手四二銀と上る所四二金と上る外はないが矢張り、上手方  
に七五歩突きなどの手段がある故、いづれにせよ、多少の  
紛擾は免れないのであつて、下手方としては兎も角指しに  
くい將棋である。尤も第四十圖面の場合、下手方強く六二  
玉と上つて渡ぐ手段などもあるから、必ずしも局面不利で  
あるといふ意味ではない事は、最前申し述べた通りであ  
る。唯下手方としては、最も安全な方針によつて對戦する  
方が得策であるから、斯様な煩しい局面を、早くから考  
へない方がよいといふ意味である。

是は下手方が、從來一番多く用ひられつゝあつた、九四  
歩早突きの岐れに對する説明であつて、上手方が一旦、七  
九金と寄らずに八七銀と上れば、前述べた如く、忽ち不利  
配はなく、寧ろ自營が安全で、紛れ少く、早く勝ち得るわ  
けともなる。

(面局の迄歩四九は圖一十四第)

Handwritten Go board diagram showing pieces and moves. Labels include '下手持駒' (Handwritten pieces), 'シナ 駒持手下' (Shina, pieces held by hand), and numbered columns 1-9 and rows 1-9.

第四十一圖面以下の指手。

【講義】 上手四八玉と上つたのは、安全なる場所へ移す  
手段であり、下手の四二玉も亦それに同じ。上手三八玉及

に陥るのであるが、一旦上手が七九金と自軍すれば、些か  
紛れが生じるといふ理由である。  
是れ即ち私が此の定跡として、下手方七二銀を穩當と認  
めた次第である。

第三十九圖面以下の指手。

【七七八銀】 八三銀 八七銀 七四銀  
【七七八金】 九四歩

【講義】 上手七八銀と上るのは、豫定の駒組である。次  
に下手の八三銀と上つたのも、是亦豫定の手段であつて漸  
次戦線に繰出すのである。上手八七銀と上つて、自分の角  
頭を守る。下手七四銀は豫定の行動。上手七八金と上つた  
のは、益々左翼の堅實をはかつたわけ。

次に下手方九四歩と突いたのは、飛香落の場合、どうし  
ても、此の筋から攻めるのが最も正しい攻撃であるから。  
又一つには九三桂と活躍する準備でもある。  
下手方としては、斯様に一旦銀を戦線に繰り上げてか  
ら、徐ろに桂の活用をはかつて、決して手遅れとなる心

び、下手三二玉、是又その意味に外ならない。

次に上手方四八銀と上つたのは、漸次五七に進み、その  
方面の警衛の任に就く豫定である。下手方四二銀と上つた  
のは、五筋の備へを兼ねて、玉頭の凌ぎである。

上手一六歩と突いたのは、所謂模様を見たのであつて、  
接戦となつた場合、此の一手がよく、自玉の生命を助ける  
事など、屢々諸君においても御経験あるでせう。

下手方周章てるに及ばずと一四歩と受ける。上手方に突  
き越されぬ方が勿論將來の爲、大いに有利である。

第四十二圖面以下の指手。

【五五六歩】 九三桂 五八金 七二金  
【五五七銀】 八五歩

【講義】 上手方五六歩と突くのは、その筋の位取りを兼  
ねて、銀の活用に資する手である。又一つには後に七九角  
と引き四六へ活躍の意味も含んでゐる。

下手五四歩と受けてゐる方が、勿論位の上から見ても至當  
ではあるが、自玉は稍整備してゐるので、目下それはさの



みの急務でもないから、九三桂と跳ねて、攻撃の準備ははかつたのであつて、前に述べた通り、上手の角を、四六まで出る手順を興へては面白くないのである。  
上手五八金と上つたのは、陣營の配備である。

(面局の迄歩四一は圖二十四第)

下士将備 香

九	星	将	馬	馬	馬	馬	馬	馬	香
八			王	馬	馬	馬	馬	馬	
七			香	香	香	香	香	香	
六			香						
五									
四	歩		歩				銀	歩	歩
三		歩		歩	歩	歩	歩		飛
二		角	玉	銀	金				桂
一	香	桂		金		金			香
	一	二	三	四	五	六	七	八	九

シナ 駒持手下

下手方七二金と一旦上つて置くのは、安全第一の好手段であつて、此の一手によつて、下手方の陣中には、鶴の毛で突いた程の隙も無くなつた次第である。接戦中兎角、飛車

(面局の迄歩五八は圖三十四第)

下士将備 香

九	星	将							香
八			王	馬	馬	馬	馬	馬	
七			香	香	香	香	香	香	
六			香						
五									
四	歩		歩				銀	歩	歩
三		歩		歩	歩	歩	歩		飛
二		角	玉	銀	金				桂
一	香	桂		金		金			香
	一	二	三	四	五	六	七	八	九

シナ 駒持手下

そこで若し、上手六六銀と出て、次に七五歩突きを親へば、下手方直ちに九九角と打ち、上手九八金の時(註)上手七八金と逃げれば、下手方に九七桂ナルの手がある)下手六六角ナルと切り、上手方同歩の時、下手七七桂ナルに

飛香將定跡解説 (飯塚勘一郎)

の小鬘が薄いと、上手方にいろ／＼と策を施こされ易いものであつて、斯くの如くそれを未然に防いで置くのは、心得て載きたい、陣營整備の手筋である。  
上手方五七銀と上つたのは、以下四六へ繰り出し、中央に於て、敵角路阻止の計畫である。

下手方その時八五歩と挑戦したのは、機宜に適してゐるのであつて、餘り早く攻める事は、下手として有利な策ではないが、餘り遅れることも亦、賢明な策とも言へないのであつて、よくその緩急の點を味つて載きたいと思ふ。

第四十三圖面以下の指手。

- 八五歩 ○同 桂 ○同 桂 ○八八角
- 同 金 ○八五銀

【講義】 上手八五同歩と應じるのは當然であるが、斯かる所を同桂と軽く應じる場合もあるから、一寸そのことに就いて述べて置かう。

上手方八五同歩のところ、八五同桂なら、下手方八八角ナル、上手同金、下手八五桂と指し、上手方八五同歩の手で充分優勢である。次に九五桂打ちのきびしい手段があるから、九五桂の時、上手九六銀と上れば、下手八六飛と進出して、以下絶対にその飛車を成り込む事が出来るから優勢である。

尙又右の説述中、下手八五同桂の時、上手方手を抜いて六六銀と指さず六八金と寄つてゐるなら(註)上手方若し先手に六六角と打てば、下手方は必ず三三角と合せるのである)下手方六五桂と打つか、乃至は九五歩と突き出してゐて、充分の棋勢である。

さう指されれば、勢ひ上手方八五歩と取らねばならないから、結局初めに取つたのと、相違がないのである。  
右述べたやうな次第であるから、本文には上手方八五同歩と應じたのである。

下手方八五同桂は豫定の交換である。次に上手同桂の時下手方八八角ナルと指すのは大切な一手であつて、此のやうな場合の手筋である。敵から交換されては自玉の位置が悪くなり、敵金の姿が亂れないが、譜の如くこちらから取



り換えれば、自玉の姿が亂れず、敵金の位置が悪くなるから、それによつて生ずる所の、利害關係は莫大なものである。上手八八同金と應じ、下手八五銀と進出した次の第十四圖迄となつては、下手方大いに指し易い。

(面局の迄銀五八は圖四十四第)

九	星	將																		
八				王		雫			雫											
七			糸	糸	糸	雫	糸		雫	糸										
六			糸							銀										
五			歩																	歩
四			歩																	
三			歩																	
二				玉	銀					金	飛									香
一	香	桂		金																

右圖面までとなり、上手方八六歩と打てば、下手同銀と取り、上手同銀、下手同飛、上手七七角の時、下手八一飛、上手一一角ナル、上手二二銀と打つて大いに優勢である。

上手七七桂留め下手七二飛廻り

飛香落定跡として、前號に説述したのは、上手方七七桂留に對し、下手方八四歩と突いて、對戦したのであるが、本號には下手方がそこで六二銀と上り、以下七二飛と廻つて、敵を攻撃する手順に就いて述べることにする。

大體此の上手方七七桂留は、一種の奇謀であることは、前號に述べた次第であるが、下手方がその應酬法を知らなければ、なか／＼指しにくいものである。

それだけ、下手方が順序正しく、對戦の策を講ずれば、案外もろく、上手方は破られてしまふのである。

此の將棋は何しろ上手方、早く桂を跳ねて了つたので、下手方がそれに對して、壓迫の方針をとると、勢ひ上手方は六五桂と更に跳ね上つて、強く決戦の策に出るから、下手方としてはその時、狼狽の色を見せず、冷靜に、誤らざるやう應戦することが大切である。

それをよく注意さへすれば、自然と上手方は指しにくく、

尙又上手八六歩の時、直ちに下手同銀と取らず、一旦三角と先手に打ち、上手六六角の時(註)上手七七角と合せれば、下手同角ナル、上手同金、下手六五桂にて、以下駒徳となる故、それでもよいのである。

鬼に角上手八六歩と打つては、以下歩切れとなるので指しにくい事は論をまたない。と言つて放任して置けば、下手方に八六歩と打たれて、大いに不利な局面であるし、或ひは七六銀と指されても、矢張り大層不利な局面である。故に第十四圖までとなつては、上手方絶対に不利な棋勢であつて、此の後に於いて、下手方大なる過誤のない限り、勝局は疑ひない次第である。

本局は寄せ手順を省略してあるが、下手方が上手の七七桂留の奇謀に周章せず、徐ろに對戦すれば、必ず此のやうな將棋となるのであつて、その間上手方として、乗すべき餘地のないものである。

大號には矢張り此の上手七七桂留に對して、下手方がその早計を咎めて、七二飛と廻轉し、上手の桂頭を攻めるものを書く豫定であるが、その節は念のため、寄せ手順まで詳しく述べることを、今から御約束申して置く。

第四十五圖に至る迄の指手。

- 七六歩 ○二四歩 ○七七桂 ○六二銀
- 八六歩 ○七四歩 ○七八銀 ○七二飛

(面局の迄飛二七は圖五十四第)

九	星	將	雫	王	雫															
八						雫	糸													糸
七			糸	糸	糸	糸	糸													
六			糸																	
五																				
四																				
三			歩																	
二			歩																	
一	香	香	銀	金	玉	銀	金	飛		桂	香									

【講義】 上手七七桂の奇謀に對し、下手方六二銀と上つ



たのは、次に七二飛と振つて、敵の桂頭を攻撃の準備である。その時上手八六歩と突いたのは、漸次そこへ銀を繰り上つて、自己の桂頭を保護する計畫である。

その時下手七四歩と突くのは豫定の攻め手順であつて、漸次そこから銀を戦線へ繰り出さんとするのである。

上手七八銀と上るところで、七八金と指す手もあるが、それに對する一切の變化は次號に譲ることにする。

然しながら上手方としては、なるべくは八七銀と上つて七八金の姿勢に構へたいのであつて、八七金の手段を撰んでは、自然七八銀と上つて守る事となるから、形の上から見て、大いに好ましくないのである。

下手方七二飛と振るのは、漸次敵の桂頭から攻撃せんがためである。

第四十五圖面以下の指手。

●八七銀 ●七三銀 ●七八金 ●六四銀

【講義】 上手方八七銀と方るのは當然の防手であつて、此の銀を早く上つて置かなければ、次に四九の金を捌く方

方を撰んで、對局にあたられる事が一番よいのであつて、兎に角上手方の七七桂を、都合よく捌かせさへしなければ自然と有利な棋勢になるのである。

(面局の迄銀四六は圖六十四第)

九	星	羽	龍	零	王														
八																			
七	香	香	香	香	香	香	香	香	香	香	香	香	香	香	香	香	香	香	香
六																			
五																			
四				歩															
三	歩	歩		歩	歩														
二		角																	
一	香	桂	銀	金	玉	金													
	一	二	三	四	五	六	七	八	九										

シナ 駒持手下

第四十六圖面以下の指手。

●五六歩 ●四二金

【講義】 上手方五六歩と突くのは、七筋の防衛策として適当な手段がないから、次に敵の模様によつては七九角と

法がないわけ。

下手七三銀と上るのは、直ちに七五歩と攻めても、上手同歩、下手同飛の時、上手方に七六歩と打たれては、なんにもならないので、攻撃の應援に出かけたためであつて、當然の進出。

上手方七八金と上るのは、豫定の防衛であつて、風雲早くも急を告げて来た局面である。

下手方六四銀と進出したのは、次に七五歩と攻める準備であつて、さしもの上手桂跳ねの奇手も、かくの如く順序正しく應ぜられるに及んでは、全く手も足も出ないのであつて、今更となつてはその尙早を悔ひざる外はないのである。

前號には下手方が、八筋の歩を突いて、七二銀以下、七四銀と上つて、八筋から攻撃するものを述べたのであるがそれよりは、本號の此の下手六四銀の手段の方が、一般の方々には指し易からうと思ふ。

然し諸君はそのいづれなりとも、自分の指しよと思ふ引いて、更に四六角と進出し、下手方の飛車の働きをそれによつて牽制せんとする含みである。

その時下手方四二金と上つたのは、安全第一の手段にいたつたのであつて、此のところ急いで七五歩と突いては、紛れを生じ易く下手の力としては勢ひ危険が伴ふのである。

即ち下手方四二金と上らずに、七五歩と突けば、上手同歩と取るは當然である。その時下手同銀と進む、そこで上手方は六五桂と跳躍して、局面の展開をはかり来るであらう。

その時下手方敵の五三桂ナリを凌ぐべく、五二金右と上れば、上手方に二二角ナルと交換をされ、下手同銀の時、上手五五角の手段がある。

故に一旦下手自分の方から八八角ナルと交換をして置いても、矢張り上手方には、五五角打ちの手段が残つてゐて兎に角いろ／＼と策を施こされるであらう。

であるから上手の六五桂跳ねに對し、下手方一旦八八角ナル、上手同金の時、下手六四銀と引いて、此の際の棋勢



に備へる外はないのであるから、上手方はその時七三歩と打ち来るであらう。即ち下手同桂、上手同桂ナル、下手同飛の時、上手七六桂の順序となり、上手方は歩切れであるから、優勢といふ局面では、絶対にないのである。

然しその次に上手方としては、八二角打ちの手段があるから、下手方は一旦それに備へておかなければならないのであるし、其の間上手方のため、何等か手段を施こされ易い。兎も角一枚半の實力相違あること故、なるべく混戦を避けて、安全の手段があれば、それに従ふのが、下手方の方法としては、穩當であるわけ。

これ即ち下手方一旦四二金と自重した所以である。第四十七圖面以下の指手。

▲六六歩 ▲同 ▲角 ▲六六七金 ▲二二角

【講義】 上手方六六歩と一旦突き捨てるのは、以下指手の如く、先手に六七金と上つて、七筋を防御せんための手段であつて、已むを得ない犠牲である。然し此の場合、飽くまで五六歩と突いた意味を敷衍して

上手六四角、下手七七角ナル、上手同金、下手同飛ナルにて、大いに優勢の局面である。

尙又後者即ち上手六五桂と跳ねれば、下手方上手の註文通り六五同歩と取るわけはなく、矢張り穩かに七六歩と打ち置き、次に七七歩ナルの含みに指せば充分の棋勢である。

右のやうな次第であるから、上手方六六歩と突き捨てず單に七九角と引いてゐる手段はないのである。下手方六六同角と進出するのは當然である。

次に上手六七金と出たのは、七筋の防御を意味してゐる事勿論であるが、此のところ周章ても敵角を撃退せず、單に上手四八銀と出てゐたら、どういふ結果となるのか。

下の變化圖は、上手方が六七金と進出せずに、單に四八銀と上つたところである。

變化圖面以下の指手。

▲七五歩 ▲六六七金 ▲二二角 ▲五七銀 ▲七六歩 ▲同 ▲銀 ▲七五歩 ▲八七銀

飛香落定跡解説 (飯塚勲一郎)

上手七九角と引いたらどうなるか。

▲七九角 ▲七五歩 ▲同 ▲歩 ▲同 ▲銀 ▲四六角 ▲六四歩

(面局の迄金二四は圖七十四第)

Shogi board diagram showing pieces like King, Knight, Bishop, Rook, Silver, Gold, Pawn, and Horse on a 9x9 grid.

シナ 駒持手下

右の手順となり次に下手方には七六歩と打つ好手があるため、上手方はそれに備へるべく、自ら七六歩と打つか、乃至は六五桂と跳ね出す外はないのである。前者即ち上手七六歩なら下手同銀、上手同銀、下手同飛、

▲六五銀

(面局の迄銀八四は圖化變)

Shogi board diagram showing pieces like King, Knight, Bishop, Rook, Silver, Gold, Pawn, and Horse on a 9x9 grid.

歩 駒持手下

【變化解説】 下手方矢張り、豫定の通り七五歩と突くのである。そこで上手方即ち傳家の寶刀とも言ふべき六七金の手段を用ひれば、下手方は穩かに二二角と退却しておき次に上手方が五七銀と上つた時、下手方透かさず七六歩と取り込むのである。

右の手順の中上手五七銀と上らず、七五同歩と取れば、



下手同銀、上手七六歩、下手六六銀と交換を迫るのである。故に上手方一旦五七銀と上るのであつて、此の所痛し痒しとは蓋し上手の意中か――

下手方七六歩と取り込めば、上手同銀と上る一手である。此のところ同金と應じては、下手方に七五歩と打たれ、上手六六金と避けた時、下手に同角と切られ、上手同銀の時下手七六歩突にて、大いに優勢である。

故に下手方の七六歩に對し、上手方は同金の手段はない。そこで下手方兎も角七五歩と一旦おさへて置いて、上手が餘儀なく八七銀と引いた時、六五銀と強く上つて大いに優勢なのである。即ち次に下手方は七六歩と突いて行く好手があるが、上手としてはそれを凌ぐ手段がないのである。と言つて六五同桂と取る手はなし(註、下手方に八八角ナルの手段があるから)。

そこで下手方の六五銀の好手に對し、上手方一旦七三歩と打ち、下手方に同桂と應じさせ(同飛と上れば上手方に六五桂と跳ねられる)兎も角敵の飛車道を留めて、上手五

右の局面までに及んでは、上手方漸次悲境に傾く外はないのであつて、下手方必勝の局面である。

であるから下手方が六六同角と進出した時、上手方即座に六七金と上つて、七筋の防禦をはかつたのであつて、そこへ含みを残して、四八銀と上つてゐたのでは間に合はないのである。

上手方の六七金上りに對し、下手方は兎も角一旦もとの古巢へ二二角と引き戻して、次の第四十八局面となる。

第四十八局面以下の指手。

四五八金 七五歩 同歩 同銀

七六歩 六六銀 六八金 七五歩

【講義】上手方五八金と上るのは、六七兩筋の危険に備へる應援軍の出動である。

そこで下手方七五歩と突くのは豫定の攻撃であつて、此の邊一手でも忽にしてゐては、上手方の陣の整備が一手だけ片付くからいけないのである。

上手方七五同歩と取るのは、局面上至當の應手であつ

八金と極力防戦につとめれば、下手方七六歩と突き上手同銀、下手同銀、上手同金の時、下手方六五桂跳ねの好手によつて、是亦上手方全滅である。

(局面の迄銀五六は圖二第化變)

Shogi board diagram showing a variation of the game. Pieces are arranged on a grid with columns labeled 一 through 八 and rows labeled 一 through 八. Pieces include King (王), Silver (銀), Gold (金), Horse (馬), Knight (香), and Pawn (歩).

て、下手方から七六歩と取り込ませれば、結局變化に説いたやうな手順となるのである。

下手七五同銀と進出したのも豫定の行動である。

(局面の迄角二二は圖八十四第)

Shogi board diagram showing a variation of the game. Pieces are arranged on a grid with columns labeled 一 through 八 and rows labeled 一 through 八. Pieces include King (王), Silver (銀), Gold (金), Horse (馬), Knight (香), and Pawn (歩).

次に上手七六歩と打つのは、この所へ敵から打たれては潰滅に陥るので、是亦當然。

その時下手六六銀と交換を挑むのは、強くて非常に



上手六八金を引く外はない。此のところ六六同金と下手の交換に應じれば、下手同角、上手五七銀と打つて凌ぐ時下手方に同角ナルと切られ、上手同金の時、下手方に八九金と打たれて、駒損であるから、勝敗の数は自ら明かな所。是れ上手方が六八金引と凹んだ理由であつて、又餘儀ない手段と謂ふ可きであらう。

次に下手方、七五歩と更に打ち合せるのは、唯一の好手段であつて、此のやうな場合の手筋といふべきもの——  
第四十九圖面以下の指手。

- ☉七五歩 ☉同 銀 ☉七八金 ☉七六歩
- ☉六七金 ☉七七歩 ☉同 角 ☉同 角
- ☉同 金 ☉七六歩 ☉七八金 ☉六五桂
- ☉五五角 ☉七七歩

【講義】 上手七五歩と取るのは已むを得ない防手である。下手方同銀と引き戻して、次に七六歩打ちを狙ふ。

そこで上手七八金と寄るのは、極力その筋の防戦策であつて、局面上餘儀ない手段であるが、此の場合、強く

手方は全滅となる。

次に下手七七歩ナルと指して、かねての目的を遂げ、敵桂を一枚捕獲する。

上手方七七同角と上つて交換を挑めば、下手方それはもとよりこちらの望むところ、何條否むべきやと、七七同角ナルとそれに應ずる。

そこで上手方七七同金と上れば、下手方は即座に七六歩と打つて、敵からそこへ打つ邊を與へないのである。

上手方七八金と引く外はない。

その時下手六五桂と打つのは、實にきびしい攻撃手筋であつて、駒徳の威力を如實に示すもの——

實力の上に飛香落ぐらゐの相違があると、實戦に際して此のやうな簡単な好手を、屢々見逃してゐるものであつて他に何かよい手はないものかと、駒の目應の目探してゐるものである。よく「強い人と指すと見えなくなる」とか「面喰つて了つてさつぱり判らなくなる」とか言ふことを聞くものであるが、いづぞや私が言つた通り、いくら強い人と

七六歩と打つても、下手方に同銀と取られ、上手同銀、下手同飛の順序となり、以下上手方は歩切れであるから、矢張り苦戦は免れず、敗局となるのである。

(面局の迄歩五七は圖九十四第)

下手持駒 王 飛 香

九	香	桂	飛	玉	金	歩	歩	歩	王	香	八
八	香	桂	飛	玉	金	歩	歩	歩	王	香	七
七	香	桂	飛	玉	金	歩	歩	歩	王	香	六
六	香	桂	飛	玉	金	歩	歩	歩	王	香	五
五	香	桂	飛	玉	金	歩	歩	歩	王	香	四
四	香	桂	飛	玉	金	歩	歩	歩	王	香	三
三	香	桂	飛	玉	金	歩	歩	歩	王	香	二
二	香	桂	飛	玉	金	歩	歩	歩	王	香	一
一	香	桂	飛	玉	金	歩	歩	歩	王	香	一

下手持駒 歩

下手方七六歩と打つのは、當然の攻め手である。

その時、上手六七金右と上るのは、豫定の七筋防禦手段であつて、桂を惜んで上手六五桂と逃げては、下手方に八角ナルと指され、上手同金の時、下手六六角打ちにて上

指してゐても、駒を落して貰へば、同格の人と平手で指すのと同じこと、少しも驚くには至らないのであつて、平然と對局してゐるべきであると言ふまでもない。それを可笑しな心理作用を起して、當然その位の手は發見なし得べき實力をもつてゐながら、尙それを指し得ないやうな方もあるのである。

特にかうした事も考慮の中に入れて、そんな事のないやう對局せられたい——一寸此の機會に進言した次第である。

下手方の六五桂打ちに對し、上手方は桂の持駒がないのであつて、敵當な防手がないから、五五角と兩侵入を狙つて打つのは、局面上至當の着手である。

下手方七七歩ナルと指して目的を遂行する。  
第五十圖面以下の指手。

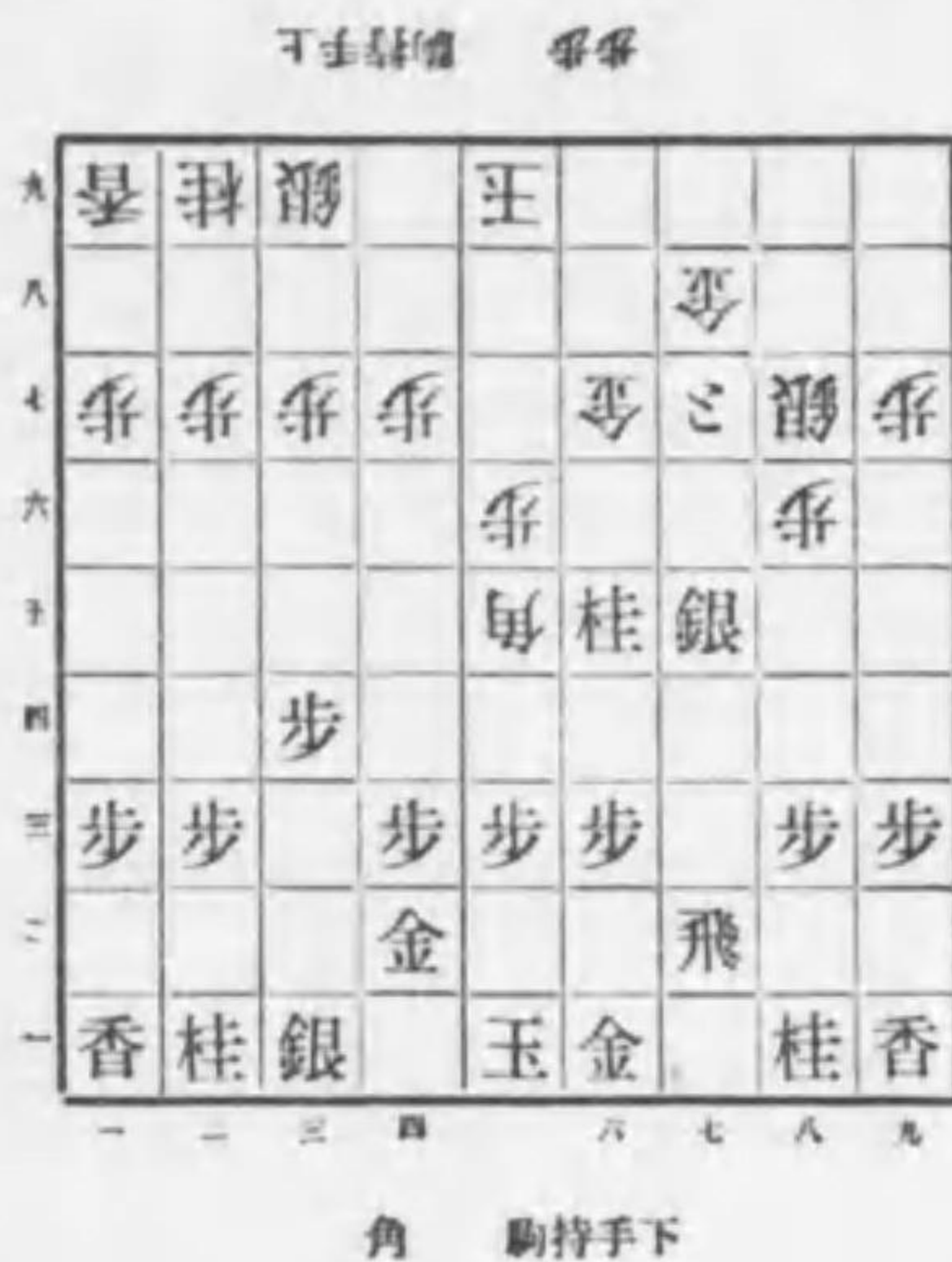
- ☉七七金 ☉同 桂 ☉同 角 ☉六六角

【講義】 上手七七同金ヨルと指すところ、強く一一角ナルと侵入すれば、下手六七とと指し、上手が同金と取つた



時、下方五七金と合はせれば必勝である。  
尙右の手順中、下方六七と寄るところで、七八と指しては、勝敗は兎も角手筋でなくて面白くないのである。一寸念のため附け加へて置く次第である。

(面局の迄ルナ歩七七は圖十五第)



下方七七同桂ナルの時、上手同角と引かずに、同金と應ずれば、下方三三角と合はせて大いに指し易い。  
そしてその時、上方が七三歩と打つて来れば、下方強

るので一層不利なのである。  
下方七七角ナルと指したのは、敵の金を釣り上げて置いて、後の手段を施こさんがためである。

(面局の迄角六六は圖一十五第)



上方七七同金は當然。

その時下方六六銀と出るのは、味ふべき手筋であつて局面はもう充分優勢なのであるから、他の手を指してゐても「勝ち」であらうが、戦争に油断は禁物である。

く同飛と上つて差支へはない。  
故に上方七七同金と指さずに、七七同角と引いたのであつて、その結果遂に、上方は金一枚の損失を來した事となつたのである。

然したとへ駒損をしても、敵の陣が大いに亂れたとかいふ局面であらば兎も角、その反對に自分の陣を亂されつゝ敵に駒徳をはかられたのであつては、誰が見ても直ちに局面の不利を認めざるわけにはいかなからう。  
下方六六角と合はせるのは、幸便に七五の銀を活躍しつゝ自己の飛將の路を開けんとする深算である。

第五十一圖面以下の指手。

四四八銀 七七七角 同 金 六六六銀

同 金 七九飛

【講義】 上方四八銀と上るのは、幸便に一手だけ自陣の整備をはかつたのであつて、此のやうな場合の應手としては、けだし至當であらう。

此のところ六六同角と取つては、下方に同銀と進まれ

一たとへ如何なる場合にでも、最も早く勝てる路を撰ぶのが至當であつて、又さうした氣持でなくては、折角の好局を臺なしにしてしまふことも出来るものである。

故に此の六六銀と出る手筋などは、此の將棋以外にも、直ちに應用なし得るものであつて、又實戰中によく現はれる形のものである。

上方六六同金と取る外はない——七八金と引いても俗に下方七七銀ナルにて、上方見込みはない。

そこで下方七七九飛ナルと侵入した第五十二圖迄となつては、全く上方絶望である。

第五十二圖面の場合、上方六九歩と合ひ駒をして、下方七七角打にて大いに指し易く必勝である。

又七七角と打たず、下方六八金と打ち、上方四九玉の時、下方六九龍、上方三八玉、下方五八金と寄つて行つても矢張り必勝である。

故に第五十二圖面の場合、上方合ひ駒を打たずに、單に五八玉と上つても、その時下方七七角と、必死をか



けられれば、矢張り上手方見込がない。その時六七金と引いても、下手方に六八金と打たれるし四六歩と玉の退路を作つても、下手方におとなしく六六角ナルと指されてゐて、之亦絶望である。

(面局の迄ルナ飛九七は圖二十五第)

九	星	羽		王	龍			
八				駒				
七	香	香	香	香		駒	香	
六				香	香			
五								
四			歩					
三	歩	歩		歩	歩	歩	歩	歩
二				金				
一	香	桂	銀		玉	金	桂	香
	一	二	三	四	五	六	七	八

金角 駒持手下

之を要するに、下手方の玉が安全であるから、此の局面までとなつては、もうそんなに下手方はいゝ手を指さなくても、そんなに早い手を指さなくても、自分の方が敗けに

### 上手方七七桂留め 下手方七二飛廻り

本號にも前號と同じく、上手方七七桂留めに就いて、今一回説述の筆を運ぶことにする。

たゞ本號と前號との異なるところは、前號の分は上手方八七銀と上つたため、容易に下手方のため、七筋から撃破されたのであるが、本號の分は上手方がその銀のところを、威力ある金を上つて、極力防禦の策に出づるものである。果して上手方の八七金上りが、どれ程の効果をもたらすものであるか、それに對して下手方としては適當な撃破策がないものであるか、以下検討の筆をすゝめて行くことにするから、例によつて御愛讀を賜はらんことを、偏に冀ふ次第である。

第五十三圖面に至る迄の指手。

- 圖七六歩 圖三四歩 圖七七桂 圖六一銀
- 圖八六歩 圖七四歩 圖七八金 圖七二飛

なるおそれがないのであるから、上手方としては全然見込みがないといふわけであつて、寄せの妙味も互ひに、一々々々争ふ棋勢でなくては、一向に價値のないものなのである。故に勝敗の数は歴然たるものであるが、諸君が實戰に際しては、一手でも正しく寄せる、即ち一手でも早く寄せる工夫をとらなくてはいけないのであつて、さうした氣持が棋道の上達上、大層益するものであることは、私が今更贅言を費すまでもない。

此の將棋は、上手方が初めに七七桂と跳ねた手段が、時機尚早のため、下手方のために、殆んど中押的に、何らの危険なく壓倒されたのである。

これによつて見ても、一手の可否が實に大切な事はお判りになるであらうが、どんな將棋であつても、敵に疵を生じた場合は、それを徐ろにとがめておれば、自然と便利な局面が展開せられて来るものであつて、あまり一氣にそれに向つて猛進すると、窮鼠かへつて猫を喰むの譬へもあるから危険である。

### 圖八七金 圖七二銀 圖七八銀 圖六四銀

【講義】 下手方の七四歩迄は前號のものと同じである。

次に上手七八金と上るところで、前號解説のものは、七八銀と上つたのであつて、つまり金と銀とが結局入れ換つたわけである。

それではなぜ今回は上手方がさう上つたのかと言へば、上手八七銀ではその進退が如何にも自由であるかほりに、七七へは利いてゐないのである。そこで此の上手八七金と上つたものは、角及び金銀のいづれもが、桂馬の保護をしてゐる計算であつて、前號のものとはその點に於いて味ひが異つてゐるわけである。此の上手方の金と銀の上り方が相違してゐる外は、第五十三圖面に至るまでの手順は、前號の解説によつて諸君が既に充分お諒承の筈である。

尙此の將棋は前號にも、度々述べたとほり、上手方いきなり桂を跳ねるのは、一種の奇計奇謀であるから、下手方は此の上手方の桂を更にほんと六五へ跳ねさせる機会を與へないやう注意をすればよいのであつて、言ひ換えれば、



下手方チリ〜と指し進んで行くのがよいわけである。

(面局の迄銀四六は圖三十五第)

手番 持手 下

八	香	桂	飛	銀	歩	歩	王	香	香
七	香	桂	飛	銀	歩	歩	王	香	香
六	香	桂	飛	銀	歩	歩	王	香	香
五	香	桂	飛	銀	歩	歩	王	香	香
四	香	桂	飛	銀	歩	歩	王	香	香
三	香	桂	飛	銀	歩	歩	王	香	香
二	香	桂	飛	銀	歩	歩	王	香	香
一	香	桂	飛	銀	歩	歩	王	香	香

シナ 駒持手下

第五十三圖面以下の指手。

- ▲五六歩 ▲五四歩 ▲四八玉 ▲四二玉
- ▲三八玉 ▲三二玉 ▲四八銀 ▲四二銀

【講義】 上手方五六歩と突くのは、敵の模様によつては以下七九角と引いて、四六角と覗き、下手方の飛車を牽制せんとする心算である。

故に上手方の七三歩を打つを、下手同桂と取るのが至當である。即ち上手同桂ナル、下手同銀の時、上手方に六五角と打たれて、以下大いに指しにくいのである。尙又右の下手七三同銀のところ、同飛ならば上手方に八二角打ちの手段がある。

尙此の外にも下手方としても、いろ〜と對策がないわけではないが、下手方の技倆としては、相當に紛れがあつて面白くないのである。

故に本文の如く、上手方の五六歩突きに對し、下手方も安全なる手段として、五四歩と受けたのであつて、さう指してゐても、決して手遅れとなるやうな事はない。

次に上手方四八玉と上つたのは、居玉のまゝでは危険が多いので、早く安全な場所へ圍ふ手段である。

下手方の四二玉と上つたのも、是亦安全策であつて、敵玉との釣合ひ上至當の手段である。

上手方三八玉と圍へば、下手方角三二玉と寄つて自玉の安泰をはかつて置く。

下手方五四歩と突くのは穩健なる手段であつて、此のところ直ちに七五歩と仕掛けては、下手方の力としては、危険が伴ふのである。左に一寸その理由を述べて置かう。

——下手方五四歩の所七五歩突なら——

- ▲同 歩 ▲同 銀 ▲六五桂 ▲八八角
- ▲同 金 ▲六四銀 ▲七三歩 ▲同 桂
- ▲同 桂 ▲同 銀 ▲六五角

上手七五同歩、下手同銀と進む時、上手方六五桂と跳ねて来る。その時下手方五二金と上つて、敵桂の侵入に備へれば、角を交換されて後、上手方に五五角打ちの手段がある。故に一旦下手八八角ナルと自分から交換して敵の姿を幾分でも亂して、六四銀と引いて、敵桂の侵入に備へる外はない。その時上手方直ちに七三歩と打つてくるから、是も下手方同桂と應じる一手である。若し飛車を逃げれば、上手方に七七銀と上られても、或ひは一且六六歩と受けられても、以下飛車の活用が速いから、下手としては指しにくいのである。

次に上手方四八銀と上るのは、漸次五筋へ進んで、敵角の道を阻止せんがための手段である。

下手方四二銀と上るのは、益自玉を強固にする手段であつて、斯くの如く指して置けば、五筋の守りを兼ねて、玉頭が大いに堅いのである。

(面局の迄銀二四は圖四十五第)

手番 持手 下

八	香	桂	飛	銀	歩	歩	王	香	香
七	香	桂	飛	銀	歩	歩	王	香	香
六	香	桂	飛	銀	歩	歩	王	香	香
五	香	桂	飛	銀	歩	歩	王	香	香
四	香	桂	飛	銀	歩	歩	王	香	香
三	香	桂	飛	銀	歩	歩	王	香	香
二	香	桂	飛	銀	歩	歩	王	香	香
一	香	桂	飛	銀	歩	歩	王	香	香

シナ 持駒手下

- ▲六六歩 ▲同 角 ▲六七銀 ▲三二角



第五五七銀 第七五歩

【講義】 上手方六六歩と突き捨てたのは、實に惜しいのであるが、下手方の陣營は整つたから、今度は七五歩と攻撃して来るであらうから、さう指されては、上手方六五桂跳ね出しの味が消滅した今日(下手方に四二銀と上られてしまつたから)とても忍び難いところであるため、已むを得ない犠牲である。

下手方六六同角と進出するのは當然であつて、躊躇してゐて、上手方に六七銀と上られては、以下攻撃上非常に支障を來すのである。

そこで上手方六七銀と上つて、先手を取りつゝ七筋の防禦策をはかる。

下手方三三角は當然の避けではあるが、此のところでは活澄に四八角ナルと切り、上手方同金の時、下手九八銀と打つても充分のやうであるが、その時上手方が七八銀と引いて凌げば、下手八七銀ナル、上手同銀、下手八九金打ちにて、成程充分であらう、然し右の手順中、下手九八銀に對してゐて、上手方に六六銀と上られてからでは指しにくい。

第五十五圖面以下の指手

- 第五五同歩 第七六歩 第五同金 第七五銀
- 第七二歩 第七同飛 第六五桂 第八八角

【講義】 上手七五同歩と應じたのは當然であつて、下手方から七六歩と取り込まれては、その筋の位を損じるのであつて、面白くないのである。

そこで下手方七六歩と打つたのは、強く決戦的攻撃の手段であつて、單に七五同銀と進出したのでは、上手方に七六歩と擊退されて面白くない。

上手七六同金と上るのは、此の場合としては至當の應手であつて、全部の駒を捌く意味である。

即ち此のところを上手七六同銀と應すれば、以下譜のごとく、下手方に七五銀と上られた時、八七の金が遊び駒になるおそれがある。

し、上手方は下手の読み筋通り、七八銀とは引かず、八五桂と軽く捌いてくるのは必條であるから、下手方大いに苦戦の局面となる。之れ下手方が、殊更その冒險に出でず、三三角と尋常に避けた所以——そこで上手方五七銀と上る

(面局の迄歩五七は圖五十五第)

九	星	桂		香															
八			王						馬										
七	香	香	香	香	香	香	香	香	香	香	香	香	香	香	香	香	香	香	香
六									歩										
五										銀									
四											歩								
三											角								
二											玉								
一	香	桂		金		金		桂	香										

のは豫定の防戦であつて、極力六筋にて敵角の道を阻止せんとはかつてゐるのである。下手方七五歩と突くのは、當然の攻めではあるが、遠巡

上手方が同金と應ずれば、下手方同飛、上手七六歩の時、一旦穩かに七二飛と退却して置いて、持駒を利用して次に敵角を窮命せんとする含みである。

故に上手方としては、單に七五同金と應じては、下手方の注文に悉く陥る次第であつて、その以下の棋勢非常に振はないの言ふまでもないところ。

是れ上手方の殊更變化をえらんで、七三歩と打ち來つた所以であつて、此のやうな局面としては、唯一の手段である。換言すれば、下手方の應手を試みたのであつて、實戦に際しては、下手方が一寸間違ひさうなところである。下手七三同飛と上つたのは當然。あつて、此の邊は飽くまでも強く闘ふ意思でなければ、到底好局面を持続するに難いのである。

その時上手方が六五桂と跳ねたのは、すべての駒の伸展をはかつたのであつて、當然の強行手段である。前にも述べたごとく、實戦に際しては、下手方一寸面喰ひさうな處であるが、冷靜に構へて熟慮すれば、利害の點



も自らハツキリとすることであらうと思ふ。  
下手方敵の六五桂跳ねの強手に對して、七一飛と引けば  
上手方三三角ナル、下手同桂にても或ひは同銀にても、上  
手方に八二角と打たれて大いに混載状態となる。  
故に本譜のごとく、下手八八角ナルと指すのは、局面上  
至當であつて、此のやうな局面に際しては、飛車を渡して  
もさう恐ろしい事はない。

(面局の迄ルナ角八八は圖六十五第)



るから、損失なしに全部の駒が捌ければ、必ず其の將棋は  
優勢であるわけである。  
上手方の七六同銀の時、下手方一旦七三桂と上つて、駒  
根を絶つて置く。  
此の結果、彼我の持駒によつて調べて見れば、お判りに  
なる處であるが、飛角換り、金銀換り、下手桂徳といふ計  
算である。

(面局の迄桂三七は圖七十五第)



第五十六圖面以下の指手。

第七三桂、第七六銀、同銀、七三桂

【講義】上手七三桂ナラズと敵飛車を取るのには、當然の  
手段である。此の一手だけは、誰が指しても是より他に手  
段のない處である。

閉話休題——そのとき下手方が七六銀と敵の金を取るの  
は、如才のない指し方であつて、單に七三同桂と指したの  
では、上手方に七五金と取られて、なか／＼指しにくくな  
るのである。

上手方更に六一桂ナルと指したいのは、山々であるが、  
次に下手方に六七銀ナルと指されては、大いに不利であつ  
て、全く見込のない局面となるので、兎も角、七六同銀と  
應じたのである。

下手方としては、此の邊の懸け引きさへ、誤らなければ  
必ず大駒落の影響があるものであつて、自然と指し易い局  
面となるのである。  
つまり大體に於いて、上手方よりは駒の數が多いのであ

第五十七圖面以下の指手。

八一飛、五一金、九一飛、七七馬  
七五銀、六五桂、六六銀、五七桂

【講義】上手方八一飛と打つたのは、兎も角それを活用  
する手段であつて、他に適當な打ち場所はない。  
下手五一金右と寄るのは堅い應手である。

上手方九一飛ナルは、駒徳をはかつたのであつて、自陣  
の破綻に備へる場合でもないのである。

向上手方としては香車を手に入れて置けば、防禦にも相  
當使用出来るし、模様によつては、二六香と放つて、下手  
方の玉の小鬘を攻める手段もある。

下手方七七馬と引くのは、敵の銀を追ひつゝ、徐々に攻  
撃の策を施すのであつて、絶好の攻め手筋である。

上手方七五銀は當然の避けであつて、無條件で敵手に銀  
を委ねる理由はない。  
そこで下手六五桂と跳ねるのは、いふ所の廢物利用の策  
であつて、申し分のない活用である。



上手方六六銀と先手に引いて、五七の銀との連絡をはかれば、下手方は強く、五七桂ナラズと跳ぶ。

(面局の迄ズラナ桂七五は圖八十五第)



第五十八圖面以下の指手。

五五七銀 二八銀 七七一龍 二六桂  
 同歩 二九銀 四八玉 六七馬

【講義】 上手方五七同銀と引かず、七七銀と馬の方を取れば、下手方に四九桂ナルと指されて、以下下手方の手中

龍の時、下手三九金、上手三七玉、下手五九角と打つ次の参考圖面までにて必勝である。

(面局の迄角九五は圖考參)



右の參考圖までとなつては、上手方多分の持駒を有するとは言へ、折角の龍王を抜かれるので、以下絶対に防戦の術ないのであつて、それに七七角ナルと引く下手方の龍馬が好位置に据はるのであつて、攻撃のしやうもない。故に本文下手方の二九銀ナラズに對し、上手方四八玉と

飛香落定跡解説 (飯塚勘一郎)

に持駒が豊富であるから、見込みはないのである。

その時下手方二八銀と打つたのは、よい攻撃手筋であつて、實戦中は此のやうに、全體に目を通してゐなければいけない。即ち上手方が二八同玉と取れば、下手方六四角又は七三角と打つて、次に三六桂打ちを覗ふのである。故に上手方折角の龍王を敵手に渡したのでは、將來絶對に見込みのない局面となるから、七一龍と寄つて先手にその難を避ける。

そこで下手方三六桂と打つたのは、敵若し七七龍と引けば、「詰めてしまふ」の手段である。

故に上手方何事おいても同歩と取りのぞく。その時下手方二九銀ナラズと指したのは、箇くまで鋭く寄せんとする含みであつて、當然の手段である。

上手方四八玉と避けるのは残念であるが、若し二九同玉と引けばどうなるのであらうか。

即ち上手二九同玉ならば、下手方直ちに三七桂と打ち、上手方が三八玉と上つた時、下手四九桂ナル、上手七七

避けたのであつて、又已むを得ざる次第である。そこで下手方六七馬と寄つて敵玉に近づく。

(面局の迄馬七六は圖九十五第)



第五十九圖面以下の指手。

五五八銀 二八金 同金 同銀  
 同玉 五八馬 四八金 三七銀  
 同玉 四五桂 三八玉 五七馬  
 四六銀 二九銀



【講義】 上手方五八銀と打つて自玉を守る時、下手方三八金と打つて、所謂敵玉を送つて行くのはよい手段である。上手三八同金、下手同銀ナル、上手同玉の時、下手五八馬と鋭く肉薄する。

そこで上手方四八金と打つたのは、局面上當然の防手であつて、他に方法のないところ。

その時下手方三七銀と打ち込んだのは、激しい寄せ手順であつて、諸君はよくよく前後の關係について、充分なる御研究あられたい。

上手三七同玉のところ、同金と上つたのでは、下手方に四九角と打たれ、二八玉と避けた時、下手方に五七馬と指されてみて、絶對に見込みはないのである。

下手方四五桂と打つて、きびしく追る時、上手方四六玉と上れば、下手方に五七馬と切られ、上手同金の時、下手三七角までにて詰まされるのである。

故に譜の如く三八玉と落ちる一手である。そこで下手方五七馬と切つて、必死をかければ、上手方

下手九三桂跳びの指し方

是れまで説き來つたものは、上手方が七七桂留、奇謀策を採つたものであつたため、下手方に端の缺陷を働かれる迄もなく、上手方漸次悲境に傾いたのであるが、本局のものは上手方が普通飛香落の定跡どほり、六六歩と角道を留めて、堂々對戦の陣を張つたのであれば、下手方は必ず敵の左翼の香車のぬい缺陷を咎がめなくてはならないのである。

これ即ち飛車落と飛香落との、大いに相違せる點であつて、飛香落に對しても尙飛車落と同じ戦法をもつて、上手方を攻撃したのでは、下手方つまらないわけである。例により、基本圖面に至る迄の双方指手順を左に記して置くことにする。

- 飛七六歩 飛二四歩 飛六六歩 飛九四歩
- 飛七八銀 飛九五歩 飛六七銀 飛九二飛

— 右の手順、解説は省略する —

同金の手段はないから、四六銀と打つて凌ぐのである。その時下手方二九銀と打つて、王手をかけた次の第六十圖面までとなつては、上手方絶望である。

(面局の迄銀九二は圖十六第)

九	皇	銀							
八			王	香					
七	香	香		香	馬				香
六			香	香	香	桂			香
五						步			
四				步					
三	步	步		步	步	步	步	步	步
二		角							
一	香	桂	銀	金	玉	金	銀	桂	香
	一	二	三	四	五	六	七	八	九

歩歩金角 駒持手下

第六十圖面以下、上手方二九同玉と取る一手であるから(上手四九玉と落ちれば、下手方直ちに三八金と打つて寄りである)その時、下手方四八馬とはいつてゐて、次に上手方の手中には金の持駒がないから、凌ぎ切れないのであつて、下手方必勝の將棋である。

(面局の迄飛二九は圖一十六第)

九	皇	香	香	香	王	香	香	香	
八									
七	香	香	香	香	香	香			
六					香	香			
五								步	
四				步					
三	步	步		步	步	步	步	步	
二		角							
一	香	桂	銀	金	玉	金	銀	桂	香
	一	二	三	四	五	六	七	八	九

シナ 駒持手下

第六十一圖面以下の指し方。

- 飛七八金 飛九六歩 飛同歩 飛同飛
- 飛九七歩 飛九二飛 飛五六歩 飛七二銀

【講義】 上手方七八金と上るのは、當然の備へであるが、此のところ早く四八玉と圍ふ場合もある。下手方九六歩と突くのは、一先づその筋の歩兵を交換して置く策であつて、飛香落の場合には、面倒のやうに思はれ



ても、必ず此の手順を経て置かなくてはならない。

上手九六同歩は至當の應手。

下手方同飛と進出するの亦當然である。

(面局の迄銀二七は圖二十六第)

手番 持手

星	將	將	王			將	
						將	飛
香	香	香	香		將	香	香
		歩					
歩	歩		歩	歩	歩	歩	
	角					銀	飛
香	桂	銀	金	玉	金		桂
一	二	三	四	五	六	七	八

歩 駒持手下

上手方九七歩と打つのは已むを得ない。次に下手方九二飛と引くのは、穩健なる手段であつて、此のところ九四飛と引いても、指せないことはないが、紛れを生じ易くて面白くない。

は危険なのである。故に譜のごとく下手方一旦四二金と上つて、自重して置くのは穩當な手段である。

上手方三八玉と寄つたのは、愈々安全第一なところへ圍つたのである。

下手八四歩と突くのは、次に九三桂と跳ね、八五桂と更に跳躍する準備であつて、模様によつては、八三銀と強く繰り出す意味も含まれてゐる。

その時上手方四八銀と上るのは、漸次中央席捲の方針であるが、此のところ八六歩と突いて、左翼の急に備へればどうなるのであるか――

左に一寸その變化について述べて置くことにする。即ち上手方本文四八銀と上るところで八六歩と突けば、

- 九六歩 八七金 九七歩 同 金
- 八二飛 九六歩 八三銀 八七金
- 九四銀 七七桂 九五歩 同 歩
- 同 銀 九七歩 九二飛 四八銀
- 九八歩 七九角 九九歩 四六角

次に上手五六歩と突くのは、唯一の着点であつて、後徐ろに、三九の銀を繰上げて、五筋即ち中央方面の勢力を争はんとする準備である。

その時、下手方七二銀と上るのは、普通の如く、六二飛廻りの戦法であれば、こゝで六二銀と上り、後徐々に六筋の歩を突いて、五四銀と繰り上げるのであるが、本譜は下手九三桂と跳ねる、急激なる攻撃法を採る目的であるから斯くのごとく七二銀の姿勢に構へたのであつて、六、七、八筋の備へであることは言ふまでもない。

第六十二圖面以下の指手。

- 四八玉 四二金 三八玉 八四歩
- 四八銀 四一玉 五八金 九三桂
- 七五歩 八五桂

【講義】上手方四八玉と上るのは、安全地へ移さんとする手段である。次に下手方四二金と上るのは、一旦自陣の整備についたのであつて、上手方が玉を圍ふに對し、自分の方は居玉のまゝで、攻撃手段をとつては、下手方として

七二金 ― 是にて左の變化第一圖面となる――

(圖一第化變)

手番 持手

星	將	將	王					王
			王	將				將
香	香	香	香	香	香	香	香	銀
			歩					歩
歩	歩		歩	歩	歩	歩	歩	飛
	角		金					香
香	桂	銀	玉				桂	
一	二	三	四	五	六	七	八	九

シナ 駒持手下

【變化解説】右の手順中下手方九八歩と打つたのは、次に九九歩ナルと指し、上手方が同角と引けば、八六銀と上つて飛車の侵入をはかる手段である。

故に上手方七九角引き以下、四六角と進出して、その方面に活用する策をえらんだのであつて、その時一旦下手方が七二金と自重するに及んでは、上手方全く以下の指手に







(面局の迄歩六八圖三第化變)

九	皇	將						將	馬	
八			王	將	馬					
七	香	香	香	香		將		香	香	
六					香	香	香	步		
五										馬
四			步							桂
三	步	步		步	步	步	步	步	銀	飛
二		角		金						
一	香	桂	銀	玉	金					香
	一	二	三	四	五	六	七	八	九	

シナ 駒持手下

歩と應じて見やう。

その時は下手方強く、八五同桂と跳ね出すのであつて、判り易いやう左にその場合の圖を掲げて置かう。

下の變化第四圖面の場合、上手方八六歩と打てば、下手方に九七桂ナルと指され、上手同角の時、下手方に九八歩と打たれて、大いに上手方苦戦である。故に右の圖面の場合、上手方八七金と上つて極力九筋の防衛につとめる外

車道を開けられて、全滅である)

そこで下手方九七桂ナルと呉れて、上手方を歩切れに導くのであつて、上手方は桂馬を買つても、歩切れであつてはかへつて迷惑千萬なのである。

(面局の迄歩四八は圖五第化變)

九	皇	將								將
八			王	將	馬					
七	香	香	香	香		將		香	香	
六					香	香	香	步		
五										馬
四			步							桂
三	步	步		步	步	步	步	步	銀	飛
二		角		金						
一	香	桂	銀	玉	金					香
	一	二	三	四	五	六	七	八	九	

歩歩 駒持手下

上手方九七同桂の時、下手方一旦八四歩と打つて置くのは、憎くらしいやうな手であつて、上手方は歩切れであるから、それに對して如何とも方法がないのである。

飛香一定跡解説 (飯塚勲一郎)

はないから、下手方は次のやうに攻撃すればよいのである。

●八二飛 ●八六歩 ●九七桂 ●同桂 ●八四歩

上手方が八七金と上つた時、下手方八二飛と振るのは、大いに味ふべき手筋であつて、その時上手方は八六歩と打つ一手である。(捨て、置けば、下手方に九七桂ナルと、飛

(面局の迄桂同五八は圖四第化變)

九	皇	將						將	馬	
八			王	將	馬					
七	香	香	香	香		將		香	香	
六					香	香	香			
五								桂		
四			步							飛
三	步	步		步	步	步	步	銀		香
二		角		金						
一	香	桂	銀	玉	金					香
	一	二	三	四	五	六	七	八	九	

歩歩 駒持手下

此の下手方八四歩と打つておくところで、直ちに九六歩と打てば、上手方に八五桂と跳ねられ、下手方九七歩ナル、上手同金、下手同香ナル、上手同角の順序となり、矢張り下手方駒徳であり、優勢ではあるが、次に上手方から九三桂ナルと指される手が残つてゐるから、總分指しにくい點があると思ふ。故に一旦下手方八四歩と打つて、次に九六歩と打つ手を狙へば充分間に合ふのであるから、穩健である。

右の變化第五圖面迄となつて、上手方桂徳ではあるが、歩切れのため、如何とも防手がないのであつて、假りに九六桂と打つて渡いでも、下手方に九五歩と打たれ、上手八四桂の時、下手方一旦同飛と取り、上手八五桂と跳ね出す時、下手穩かに八一飛と引いて、次に八四歩と打つて、敵桂捕獲の策を講ずれば、下手方駒徳の局面となり、大いに優勢である。

此の變化解説によつて、此の一角の利害得失は、充分御諒解なし得たことと思ふ。



たゞ淺才禿筆であるがため、或ひは諸君に意の通じない節があるかも知れないから、それは御熟讀の上御判じ下さらば幸甚此の上もない次第である。

(面局の進桂五八は圖三十六第)

九	桂	馬	香	王	香	馬	桂	香
八	香	香	香	香	香	香	香	香
七	香	香	香	香	香	香	香	香
六	香	香	香	香	香	香	香	香
五	香	香	香	香	香	香	香	香
四	香	香	香	香	香	香	香	香
三	香	香	香	香	香	香	香	香
二	香	香	香	香	香	香	香	香
一	香	香	香	香	香	香	香	香

大分筆が横道に外れて来たため、本文の方を取り忘れてしまった。どれ／＼又もとへ引き返して——上手方八六歩と突かず七五歩と突く、そこで下手八五桂と跳ねる。第六十三圖面以下の指手。

- ⑧八六歩 ⑨九七桂 ⑩同 桂 ⑪九六歩
- ⑫八九桂 ⑬九七歩 ⑭同 桂 ⑮九六歩
- ⑯九八歩 ⑰八二飛

【講義】上手八六歩と突くのは、金の働きを求めつゝ、敵に解決を迫つたのである。下手方九七桂ナルと指したは豫定の犠牲である。

上手方九七同桂と取る一手である。そこで下手方九六歩と打つのは、敵の歩切れを替める手段であつて、きびしい攻撃である。

上手方八九桂と打つて凌ぐのは、實に辛いのであるが、已むを得ないのである。

此のところ上手方八七金と出て、強く防戦につとめても下手方九七歩ナル、上手同金、下手同飛ナル、上手同角、下手同香ナルと、駒徳を喜んで指しては来ずその時軽く八二飛と寄つて、香車の見通しをつけられると、大いに苦戦なのである。故に上手八九桂と打つて凌いだわけ。

そこで下手方一旦九七歩ナルと桂馬の損失を補へば、上

第六十四圖面以下の指手。

- ⑱八七金 ⑲九七歩 ⑳同 歩 ㉑八五歩
- ㉒同 歩 ㉓同 飛 ㉔七六銀 ㉕八一飛
- ㉖八六歩 ㉗六四桂

【講義】上手方八七金と上つたのは、極力八九兩筋の守備をはかるのであつて、駒損の局面であるから、位の低い防禦は絶対に下利益である。

下手方一旦九七歩ナルと桂を捕獲する。

上手同歩と應じるのは當然。

そこで下手方一旦八五歩と突いて、その筋の歩の交換をはかるのは、言ふまでもなく、漸次飛車の活躍をはかるのであつて、至當の着手である。

上手八五同歩ととるのは已むを得ない。

下手八五飛と進出した時、上手七六銀と上るのは、至當の對策であつて、此のところ八六歩と凌げは、下手方に七五飛と横歩を拂はれ、益々位を低くさせられる。すべて棋戦は、駒損となつたやうな場合には、少しでも

(面局の進飛二八は圖四十六第)

九	桂	馬	香	王	香	馬	桂	香
八	香	香	香	香	香	香	香	香
七	香	香	香	香	香	香	香	香
六	香	香	香	香	香	香	香	香
五	香	香	香	香	香	香	香	香
四	香	香	香	香	香	香	香	香
三	香	香	香	香	香	香	香	香
二	香	香	香	香	香	香	香	香
一	香	香	香	香	香	香	香	香

手方同桂と跳ねる一手。そして下手方又々九六歩と打つて、今度は桂の利益をばかれば、上手方已むなく、九八歩と打つてそれに備へる。そこで下手方の八二飛と振つたのには、少くとも何等か

深い意味がなくてはならないやうなところ。

しかしそれは以下譜の進行につれて判然とするところ！



位を高く張る工夫に出なければ、到底尋常のたいかひは出  
来ないものである。

下手方八一飛と引いたのは當然の避けである。  
そこで上手方八六歩と打つたのは、是亦至當の防手であ  
つて、捨て、置けば、下手方に九五桂と放たれ、忽ち自陣  
の潰滅を招くのである。

尙此のところ、上手方八五歩と打つて、目的通り飽くま  
で位を高く構へてはいけないのであるか。  
實際は上手方さう指したいところなのであるが、それで  
は次に下手方に六四桂と打たれた時、銀を逃げる事が出  
来ないのであつて(註)上手八五歩と打てば、七六の銀を  
動いたとき、下手方に又々八五飛と進出される)勢ひ胸損  
に甘んじなければならぬ結果となる。

是れ即ち、上手方が特に八六歩打ちの手段を、撰んだ理  
由なのである。

次に下手方六四桂と打つのは、上手方の陣は相當好、勢  
であるから、此の敵の七六銀を攻めつゝ、徐ろに姿を亂さ

そこで下手方八三桂と打つのは、好手筋であつて、大い  
に味つて戴きたい手段である。

かうした手段は實戰中には一寸見付からないものであつ  
て、つまり「敵の缺陷をとがめる」といふ意味なのである  
が、此のやうな手筋を必ず見逃してはならない。

上手方敵に七五桂と跳ねられて、兩取りとなつてはたま  
らないから、七五金と寄つて、未然にそれを凌いだのであ  
る。下手方それでも豫定通り、七五桂と跳躍する。

これによつて上手方の陣營漸く亂れ初まつた局面であり  
戦は、酣に入らんとする。  
上手方銀を渡しては、益々悲境に傾くので、兎も角七八  
銀と引いて、極力敵の鋭鋒を避ける。

そこで下手方八七歩と打つのは、敵の應手を試みつゝ、  
將來此の歩に物を言はせやうの深算である。  
上手方七九角と避けるのは、當然の手段であつて、九九  
角と引いたのでは、下手方に直ちに九七香ナルと指される  
から。

せんためである。

(面局の迄桂四六は圖五十六第)



第六十五圖面以下の指手。

【講義】上手方六七銀と退却するのは、當然の避けであ  
つて、捨て置いて七六桂と取らせては、大いに自陣を亂さ  
れる順序となるのである。

- ⑥六七銀 ⑥八三桂 ⑥七七金 ⑥七五桂
- ⑥七八銀 ⑥八七歩 ⑥七九角 ⑥九七香

(面局の迄ルナ香七九は圖六十六第)



その時下手方九七香ナルと指したのは、強い攻め手であ  
つて、此のところ、九八歩と打つて徐ろに攻勢を探るやう  
な策は緩いのである。上手方には七六歩と打つ好手がある  
から、下手方としては、激しく攻めなければ、自然混戦と  
なり、危険に陥るわけである。  
第六十六圖面以下の指手。

- ⑥九七角 ⑥九一飛 ⑥九八歩 ⑥八八歩



兎同 角 九八飛

【講義】 上手方九七同角と取るのは當然である。ここで下手方九一飛と振るのは、かゝる場合の好手筋であつて、上手方としてはその應手に窮するのである。そして單に角を逃げてゐては、下手方の飛車に侵入されて、大いに不利であるから、兎も角上手方九八歩と受ける。然し此のところ上手九香と打つて凌いだらどうか、その時は下手方一旦九八歩と打つて、上手方の香車を釣りに上げて置き、八八歩ナルと指すのである。として見ると、上手方としては、香車を使用しても、何等格別の効果はないのであるから譜のごとく九八歩と打つて凌ぐのが當然である。そこで下手方八八歩ナルと指すのである。前に八七歩と打つた時「將來物を言はせる歩」と述べて置いたのは、此處のことであつて、立派な役目を果たしたわけ。上手方としては、此の下手方のと金に、活動されてはたまらないから、兎も角同角と斬つてのける。次に下手方が九八飛ナルと侵入し、次の局面となつては

上手大いに苦戦であつて、敗局は免れない

(面局の迄ルナ飛八九は圖七十六第)

九	星	將							
八			王	將	馬		將	馬	龍
七	香	香	香	香		香	香	香	
六							桂		
五			步			桂			
四						步	步		
三	步	步		步	金			銀	
二		角							
一	香	桂	銀	玉	金				
	一	二	三	四	五	六	七	八	九

下金銀馬 皇香  
歩歩歩 駒持下

右の局面、場合、上手方七九角と引けば、下手方八七歩に打つて、次に化り込んで行く含みに指せば優勢である。又上手方八九香と打つて凌げば、下手方張り八七歩と打ち上手が七九角と引いた時、九六歩と打つて、徐々にと金を作る工夫をとつて充分間に合ひ、必勝の將棋である。又下手八七歩の時上手九九歩なら、一旦九六龍と引いて置いてよい。

上手八七金受けに對する

下手八九兩筋の破壊法

前號には上手方の左翼の缺陷を、下手方が三桂跳ね以下更に八五桂と跳ね出して、破壊する手段について述べたのであるが、本號には上手方が早くも、左翼の缺陷に備へるべく八六歩突き以下、八七金と進出して来る場合における、下手方攻撃法を説く。いふまでもなく、上手方八六歩と早く突く意味は、下手方に九二飛と廻られる手を、末然に牽制するのであつて、下手方はそのため、策戦變更の餘儀なきに至るのである。がために此の上手方の防禦手段に對して、下手方 充分研究がなければ、即ち上手方の策略効を奏した理由であり、下手方指しにくい結果となるのである。本號の基本圖面たる第六十八圖面に至るまでの双方の指手順は次のごとくである。

- 兎七六歩 兎二四歩 兎六六歩 兎九四歩

兎七八金 兎九五歩 兎八六歩 兎八四歩

右の手順中、上手八六歩と突かずに、六八銀と上れば、下手九二飛、上手六七銀、下手九六歩、上手同歩、下手同飛、上手九七歩、下手九二飛の順となり、飛香落戦における、常態であるが、その九筋の歩兵交換を避けるべく、上手八六歩と突いたのである。それにも構はず、下手九二飛と廻れば、上手方に幸便に八七金と上られ、結局一手の損失を來すので、直ちに下手方八四歩と突き出したのである。第六十八圖面以下の指手順。

兎八七金 兎七二銀 兎七八銀 兎八三銀

【講義】 上手方八七金と上るのは、八九兩筋の防禦手段である。次に下手方七二銀のところ、一旦八五歩と突いても、上手同歩、下手同飛の時、上手方に八六歩と打たれ、徒らに一手の後手を引くのみであるから、漸次戦線に繰り出して、一気に敵陣を攻撃せんとする準備のため、斯く譜のかく七二銀と上つたのである。次に上手方七八銀と上るのは、極力防禦につとめんと



するのであつて、至當の運びである。  
下手方八三銀は豫定の進出である。  
次にこゝで上手方の指す手段として左の二つがある。  
即ち上手方六七銀と上るもの。

(面局の迄歩四八は圖八十六第)

丁手銀備 子金

九	香	桂	飛	歩	歩	歩	歩	歩	歩	王	馬	香	香
八	香	桂	飛	歩	歩	歩	歩	歩	歩	王	馬	香	香
七	香	桂	飛	歩	歩	歩	歩	歩	歩	王	馬	香	香
六	香	桂	飛	歩	歩	歩	歩	歩	歩	王	馬	香	香
五	香	桂	飛	歩	歩	歩	歩	歩	歩	王	馬	香	香
四	香	桂	飛	歩	歩	歩	歩	歩	歩	王	馬	香	香
三	香	桂	飛	歩	歩	歩	歩	歩	歩	王	馬	香	香
二	香	桂	飛	歩	歩	歩	歩	歩	歩	王	馬	香	香
一	香	桂	飛	歩	歩	歩	歩	歩	歩	王	馬	香	香

シナ 駒持手下

即ち上手方七七銀と上るもの。  
であるから次にその兩者について、いづれを本文ともせず  
いづれを變化ともせず、順次述べて行くことにするから、

⑥六七銀 ⑦七四銀 ⑧七七桂 ⑨九二桂  
⑩五六歩 ⑪八五歩 ⑫同桂 ⑬同桂

【講義】 上手六七銀と上るのは六七兩筋に備へたのである。そこで下手七四銀と上るのは、次に八五歩と突き出して、攻撃に着手せんとする、豫定の策略である。

上手七七桂と跳ねるところで、七七角と上つて防衛につとめる手段もあるが、それは次のやうな變化となる。

⑭七七角 ⑮八五歩 ⑯同歩 ⑰九六歩  
⑱同歩 ⑲八五銀 ⑳八六歩 ㉑九六銀  
㉒同金 ㉓同香 ㉔八七銀 ㉕九七金  
㉖七八銀 ㉗八八歩 ㉘九七桂 ㉙同香  
㉚九八歩 ㉛八七銀 ㉜同銀 ㉝八九歩

即ち上手方七七角と上れば、下手方直ちに八五歩と突き出して、上手方同歩の時、更に下手九六歩と突いて、上手方に同歩と取らせ、幸便に銀の進路を作つて置くのは好手筋である。そして次に上手方が八六歩と打つた時、下手九六銀と交換を挑み、上手同金の時、同香とはしる。

そのお心算で御熱讀を賜りたい。

右の第六十九圖面は、下手方が順次戦線に立つ意味で、八三銀と上つたところである。

(面局の迄銀三八は圖九十六第)

丁手銀備 子金

九	香	桂	飛	歩	歩	歩	歩	歩	歩	王	馬	香	香
八	香	桂	飛	歩	歩	歩	歩	歩	歩	王	馬	香	香
七	香	桂	飛	歩	歩	歩	歩	歩	歩	王	馬	香	香
六	香	桂	飛	歩	歩	歩	歩	歩	歩	王	馬	香	香
五	香	桂	飛	歩	歩	歩	歩	歩	歩	王	馬	香	香
四	香	桂	飛	歩	歩	歩	歩	歩	歩	王	馬	香	香
三	香	桂	飛	歩	歩	歩	歩	歩	歩	王	馬	香	香
二	香	桂	飛	歩	歩	歩	歩	歩	歩	王	馬	香	香
一	香	桂	飛	歩	歩	歩	歩	歩	歩	王	馬	香	香

シナ 駒持手下

通りあるといふわけである。  
先づ上手方が右圖面の場合、六七銀と上るものに就いてから述べて行かう。

上手方次に下手方の此の香車に活動せられては大いに不利の局面となるので、譜の如く八七銀と打つたのは、所謂攻防兼備の好手である。

下手方その時九七金と打ち込んだは、此の局面上唯一の強い手段であつて、斯かる場合、躊躇してゐることは絶対に不利を來すものである。

上手方單に九七同桂と應じては下手方に同香ナルと指され、絶対に左翼の勢力を制服され、次に九二飛と廻られてその侵入をはかられ大いに指しにくいのである。

故に上手方七八銀右と引いて、極力自己の防衛につとめたのである。そこで下手方八八歩と打つのは、飽くまで上手に九七桂と取れよと請求するのであつて、此のところ簡單に八七金と取つてしまつては、以下の手掛りを失ふのである。

上手方餘儀なく九七桂と取るのであつて、下手方は同香ナルと捌き得た結果となる。  
そこで上手方は、敵の成香を此のまゝ放任して置いては



次に九五桂と打たれて全滅に陥るので、九八歩と打つてその解決を迫つたのは蓋し當然。  
そこで下手八七成香と取り、上手同銀の時、下手八九歩ナルと指した左の變化第一圖までとなつては、大いに指し

(面局の迄ルナ歩九八は圖一第化變)

九	皇	將	將	王			こ	
八						馬	將	
七	香	香	香	香		香	香	
六								
五			步					
四				步	步	步		
三	步	步					飛	
二		角						
一	香	桂	銀	金	玉	金	桂	
	一	二	三	四	五	六	七	八

下持手駒 駒持手下

易いのである。即ち彼我の持駒の關係は桂香交換であつて、下手方はと金を作つただけ利益といふわけであるから以下餘々にそれを活動する工夫を講ずればよいといふわけ

のであつて、若しこゝで八五同歩と應じれば、下手方に同桂と跳ねられ、上手八六歩の時(上手方八五同桂と應じれば下手方に同銀と進まれ、以下の應手に困しむ)下手方九七桂ナル、上手同金にても亦同角にても、下手九六歩の突き出し手段がある。

是れ殊更上手方八五同桂の手段を撰んだ所以であつて、又局面上當然といふべきであらう。  
下手方八五同桂と跳ねて次圖となる。  
第七十圖面以下の指手。

七九角 九七桂 四六角 七二金

【講義】 上手方七九角と引いたのは、下手方の攻撃を軽く避けたのであつて、此のところ八五同歩と應じる手はないのである。即ち上手方八五同歩なら、下手方に穩かに同銀と進まれてゐて、以下上手方としてはその應手に苦しむのであつて、全滅の姿勢である。

これ上手方が七九角と引いて、局面の展開を他に求めたる所以である。

である。  
右の變化第一圖面は、下手方の七四銀に對して、上手方七七桂と受けず、七七角と上つて凌いだ場合の結果である。故に上手方七七角と上つて凌ぐのは、大いに不利といふわけであるから、七七桂と跳ねてそれに備へたのである。  
その時下手九三桂と跳ねたのは、敵の七七桂に對抗して一意八筋から強襲せんとする含みである。  
その時上手方五六歩と突くのは、模様によつては七九角と引いて、四六へ進出の含みであつて、且つ自營の整備の上から見ても、缺くべからざる要點である。  
次に下手方八五歩と仕掛けるのは當然の攻撃であつて、此の場合、一旦自玉の安全をはかつて四二金と上つて置くのも、是亦穩當なところである。  
然し上手方も居玉であるから、苟も攻撃の手順があれば、それに着手して一向差支へはないのであつて、餘りに弱いお持は對局上却つて損の場合が多い。  
その時上手方八五同桂と應じたのは、軽く凌がんとする

そこで下手方九七桂ナルと指したのは、適切なる攻撃着手であつて、かうなつて見ると、上手方の端に香車のぬない缺陷が今更大なることを思ふべしであらう。

(面局の迄桂同五八は圖十七第)

九	皇	將	將	王				
八						馬	香	
七	香	香	香	香	將	香	香	
六					香	香	桂	步
五			步			銀		
四				步	步	步		
三	步	步					飛	
二		角						
一	香	桂	銀	金	玉	金		香
	一	二	三	四	五	六	七	八

下持手駒 駒持手下

そこで上手方九七同角にても、或ひは又同金にても、即座に下手方から九六歩と突き出されて、大いに時代に遅れる順序となるから、その方面の折衝に手を抜いて、鋭意四六角と飛び出したのであつて、是亦局面上已むを得ない



仲展策と謂ふ可きであらう。

そこで下手方八七成桂と敵の金を取つてゐたのでは、上手方に七三角ナルと指され、形勢頗に急忙を告げ来るから一旦七二金と上つてそれに備へて置く。

(面局の迄金二七は圖一十七第)



第七十一圖面以下の指手。

- 皇九七金 皇九六歩 皇八七金 皇九七歩
- 皇七七金 皇六五桂 皇七八金 皇八六飛

にその七五歩突きの手段を狙ふであらう。

何はともあれ、上手方に策をめぐらす餘地を興へず、攻め立てることが、中盤以後の要訣であつて、譜のごとく、下手方直ちに六五桂打ちの妥當である所以。

上手方七八金と引くのは餘儀ない避けである。その時下手方八六飛と進出した、次の第七十二圖迄となつては、下手方は飛車の侵入確實であり、優勢も亦疑ひの

(面局の迄飛六八は圖二十七第)



【講義】 上手方九七金と取るのは至當の指手である。

こゝで七七金と避けても、下手方に六五桂と打たれて、次に飛車の活動を講じられるので上手大いに悪い。

そこで下手方九六歩と突くのは豫定の攻めである。

上手八七金と避ける外はない。

下手方九七歩ナル、上手七七金はともに、當然の應酬といふべきである。

次いで下手方が六五桂と打つたのは、敵が同歩なら七七角ナルの手段がある。故に此の場合最も早い攻め方であつて、單に九六と引いてゐても、大勢は有利なのであるがつまり私がいつも強述することく、きびしい手といふわけにはいかないであつて、一寸緩い手段なのである。で假りに下手方が六五桂と打たずに九六と引いたらどうなるか——上手方は七五歩と突いて、敵が同銀なら七四歩と打つて攻めて来るであらう。然し右の手順の中、下手七五同銀と取らず直ちに八六と迫ればよいのであるから、上手方は七五歩と突かず、一旦九八桂と捨て桂を打つて、次

ないところであらう。

右の圖面以下上手方としては、下手方の飛車の侵入を防衛する策はないのであつて、下手方としては、飛將の侵入の後、と金を活躍する工夫をとれば必勝である。

尙初めより右に至るまで、解説が非常に複雑を極めてゐるから、何卒御判讀のほどを願ふ次第である。

それに元來私は筆の生活者でないため、自分の思つた通り、充分書き現はす文才はなく、出来得る限り懇切を旨として説述した心算であつても或ひはそれがため、却つて煩はしいといふやうな珍現象を來してゐるのかも知れない諸君は此の點について、何卒それを諒恕せられ、よろしく御注告御鞭撻の勞をとられれば幸甚である。

次に述べるものは、第六十九圖面の場合、上手方が六七銀と上らず、七七銀と上つて、極力その方面の防禦にとめる手段に對する下手方、擊破法である。

つまり換言すれば、上手方が六七銀と上る所の變化解説であつて、基本圖面たる第六十九圖面を便宜上左に再び掲



けて置く。  
 今までのものと對照して、是亦御熟讀下さらんことを切に希望する次第である。

(掲再の面圖九十六第)



右圖面以下の指手。

【講義】 上手方七七銀と上るのは、八筋の防衛手段とし

- 七七銀 ●七四銀 ●五八金 ●六四步
- 六七金 ●八五步

(面局の迄歩五八は圖三十七第)



下の局面としては絶好の着手なのであつて、是を他に手段を求めては、益々上手方のため、その陣容を整へられて、以下の攻撃上面白くないのである。それとも如何なる理由に基くのであるか。

- 五五六步 ●六五步 ●四八銀 ●六六步
- 同金 ●同角

飛香落定跡解説 (飯塚勘一郎)

て、最も強い方法であつて、下手から一氣に破せられないう心である。次に下手方七四銀と上るのは、豫定の進出である。その時上手方五八金と上るのは、六七兩筋の應援を兼ねて、中央の勢力を維持せんがためである。

その時下手方六四步と突出すのは、此の筋と相協力して、八筋即ち自己の飛車先から攻撃策を施さんとするのであつて、斯くの如く上手方が多くの駒を集注して極力防戦につとめる場合、單に一方からのみの攻撃は成功覚束ないものである。

つまり上手方が一方の防衛につとめてゐる際に他の一方をつく、一方の防禦に全力を傾注した虚をついて他の一方を脅かす、といふ策戰なのである。

次に上手方六七金と上つたのは、豫定方針に基く駒組であつて、六、七、八、の方面はこれによつて全く手堅く備へられたるやの感を抱かしむるもの。

そこで下手方八五步と突き出したのは、此の上手方の堅疊に對して、そも如何なる成算あつての手段か——是れ目

【講義】 上手方五六步と突いてゐるのは「是又意外」と密かある方もある事と思ふがゆゑに、何故八五同歩と應じないのであるか、といふことから述べ行くことにしやう。

即ち上手方が八五同歩なら、下手九六步と突き、上手が是亦同歩と應じた時、下手八五銀と進む。そして上手方が已むなく八六步と打つ時、下手方は九六銀と強く交換を迫り、上手同金の時、下手方同香と捌く順序となるのである。

(面局の迄香同六九は面圖化雙)





右の變化圖は、上手方が譜の如く、五六歩と突くところ  
で、八五同歩と取つた手段における結果圖である。

圖の場 上手方九七歩と打つて、敵香の侵入に備へれば  
下手方七八金と打つて、充分である。

即ちそこで上手九六歩なら、下手八八金、上手同銀、下  
手七八角の順序となる故に圖の場合、上手方八七銀と打つ  
て凌ぐ外はないのであるから、その時は下手方は九八香ナ  
ルと指すのが絶好の手段である。そして上手方が同銀と引  
いた時、下手方七八金と敵角を攻めれば大いに優勢なので  
ある。此のやうな局面の場合、上手方の陣は亂れてゐるの  
であるから、下手方の掌中に角がはいれば、勢ひ打ち込み  
の隙多く、上手方苦戦は免れない道理。

此の故に上手方八五同歩と應じないのであつて、避つ  
て考へれば、私が下手方八五歩の挑戦を、最も機宜に適し  
た手段と稱したのも、立派にその根據を有するものと、首  
肯が出来やうといふもの。

上手方五六歩と突いて、下手方の仕掛けを待つた時、下

手方直ちに八六歩と取り込まないで、一旦六五歩と突いた  
のは、是亦相當意義の存するところ。

前に私が述べたごとく、六筋八筋相協力して、敵陣擊破  
の途を講ずるといつたのは、實に茲のところの事であつて  
單に下手方八六歩と取り込んで、上手方に同銀と上られ  
て、八五歩と打てば更に七七銀と引かれるし、尙又八五歩  
と打たず、その時六五歩と突けば、結局同じことになるわ  
けであるから、此の八六歩取り込みを後にして、六五歩突  
きを先にしたのであつて、其の方が含蓄深いと言ふべきも  
の。

上手方四八銀と上るのは、急いで六筋の救援に繰り出す  
のであつて、自然自玉の守りにもなる局面唯一の着手であ  
る。但し此のところ六五歩と取る手段は、下手方に八六  
歩と取り込まれて、一遍に全滅となるからいけないわけである  
その時下手方は、上手の四八銀の五七へ上らぬうちにと  
六六歩と取り込んで敵陣擾亂の策に出たのは至當である。  
上手方は六六同金と取る一手である。

即ち六六同銀と應ずれば、下手方に八六歩と突つ込まれて  
見込はない。そこで下手方六六同角と切るのは、きびしい  
攻撃の手筋であつて、實戦の場合にも、必ず躊躇せず決行  
していただきたい強策である。

(面局の迄角同六六は圖四十七第)



第七十四圖面以下の指手。

●六六銀 ●八六歩 ●五七銀 ●八七歩

【講義】 上手方六六銀と取る一手である。そこで下手方

飛香落定跡解説 (飯塚勘一郎)

八六歩と突き出すのは、豫定の攻撃である。

上手方此の場合、金を逃げて、八七歩ナルと攻められ  
るし、又八六同金と取つても、下手方に同飛と進まれて、  
所謂「お手傳ひ」であるから、五七銀ヒキと指して、角の  
利用をはかつたのは、蓋し賢明の策といひ得やう。下手方  
としては、此の場合自陣の防備に一手を費してゐるところ  
ではないから、八七歩ナルと指すのであつて、當然の手段  
である。上手の角に侵入されるのを恐ろしいと思つて、折  
角の好手をゆるめるやうなことではいけないのである。尤  
もそれとても時と場合によることは論を俟たないのだが。  
第七十五圖面以下の指手。

●一一角 ●六七金 ●四九玉 ●七七と

【講義】 上手方一一角ナルと侵入をするのは、當然であ  
る。その時下手方一旦六七金と打つて一先づ必死をかけ、  
上手方が四九玉と逃げる時、七七と寄せて、次に飛車の  
侵入をすれば必勝疑ひのない棋勢である。

此の下手方の寄せ手順にしても、單に七七と寄せても



充分な棋勢であるが、斯く一旦六七金と打つてから、次に譜のごとく七七と運ぶ方が重厚であつて、言はずと轉んでも間違ひのない指し方といふわけである。なるべく寄せ手順は、手堅くきびしく指す習慣をつけるべきであつて、ど

(面局の迄ルナ歩七八は圖五十七第)

▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲
八			王				我	
七			駒				馬	
六			駒				こ	歩
五			駒					
四								
三			歩				銀	
二			歩				歩	
一			歩					飛
	香	桂	銀	金	玉	金	桂	香
	一	二	三	四	五	六	七	八

歩歩金金 駒持手下

ろ指しても勝てる將棋となれば差支へはないのであるが、双方一手々々のけはしい棋勢である場合などは、一手の順逆によつて、勝敗の位置を轉倒する例も亦、決して少いこ

### 上手金開き(俗におみきといふ)に對する下手方の攻防方法

飛香落定跡も、今まで諸君がよく辛抱をして、御愛顧下さつた賜により、大體私も説述し盡し、大いに意をやさうしてゐるものである。

たゞ初號以來一度も説述の筆を採らなかつた、上手方金開き(俗におみきと稱するもの)の手段に對する、下手方の應酬を本號は述べることにする。

此の上手方のおみきの手段は、多くの場合、下手方が飛香落の定跡に精通してゐて、尋常の手段が對戦してゐたのでは、上手方が受け切れないと觀破した時にのみ用ひるのであつて、是亦上手方一種の奇謀である。

故に下手方としては、角の交換を了してゐる關係上、敵陣にはその打ち込みの缺陷が多いのであると言へ、上手の陣は即ち金開きの配置によつて、なか／＼下手方の思ふやうに、うまいところへは角を打たせないやうになつて

とでない。次の第七十六圖面までとなつては、上手方如何に防戦につとめても、最早回復の途は見出せない。

(面局の迄と七七は圖六十七第)

▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲
八			王				我	
七			駒				馬	
六			駒				こ	歩
五			駒					
四								
三			歩				銀	
二			歩				歩	
一			歩					飛
	香	桂	銀	金	玉	金	桂	香
	一	二	三	四	五	六	七	八

歩歩金金 駒持手下

即ち右の圖面の場合、上手方七七同桂と指しても、下手方八八飛にて一手透きであるから、順次寄せて行けば勝てるわけである。尙又上手方三八玉と早逃げをしても、下手方に八九飛ナルと侵入されてゐて、次に五八金とはいられない手段があるから到底上手方凌ぎ切れないわけである。いづれにても是迄となれば下手方勝を逸する懸念は更がない

居り、逐次銀を戦線に繰り上つて、下手方の陣營を亂し、そして自分の持駒を利用して、奇勝を博さうといふ策戰なのである。であるから、下手方としては、その上手方の註第七十七圖迄の指手。

### 第七十六歩 三四歩 二二角 同銀

(面局の迄銀二二は圖七十七第)

▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲
八			王				我	
七			駒				馬	
六			駒				こ	歩
五			駒					
四								
三			歩				銀	
二			歩				歩	
一			歩					飛
	香	桂	銀	金	玉	金	桂	香
	一	二	三	四	五	六	七	八

角 駒持手下

文に陥らざる様、胸組その他の點に注意を怠らなかつたなら、上手折角の奇謀も何等奏効に至らず、手も足も出せない



い状態に陥るのである。  
右の手順の中、上手方二三角ナルと交換をするのが、即ち金開きの意向であつて、普通は此の場合、上手方六六歩と角道をとめるのであること、諸君の既に御承知の處である。

第七十七局面以下の指手。

- 七七八金 ●三三三銀 ●三三八金 ●六二二銀
- 五五八玉 ●八四歩 ●六八銀 ●八五歩

【講義】上手方が七八金と上るのは、その方面に備へる手段である。  
下手方三三銀と上るのは、堅實第一の防備策であつて、二二銀の姿勢のまゝでは、何となく不安である。  
次に上手方三八金と上るのは、是亦その方面の備へであつて、之にて目的のとほり金開き「即ちおみき」の姿となつたのである——こゝで一歩話が横道へそれて眞に恐縮の至りであるが、何故此の形を「おみき」と言ふのであるか、といふ事に就いて一寸述べて見やう。

その時下手方八四歩と突き出すのは、徐ろに攻撃の緒につくのである。

上手方六八銀と上つたのは、その下手方の八筋攻撃に備へるべき手段である。  
下手方八五歩と突くは豫定の行動。

(局面の進歩五八は圖八十七第)

	香	桂	飛	歩	歩	銀	歩	歩	玉	金	桂	香
八												
七												
六												
五												
四												
三												
二												
一	香	桂										香

第七十八局面以下の指手。

- 七七銀 ●五二金 ●四八銀 ●九四歩

實はお恥かしい次第であるが、不肖私も確實なところのいはれを知らない一人であつて、或る人の説によれば、兩方に金を構へるから、神様に供へるおみき徳利の形であるから起つた名稱であるといつてゐる。

それでも「なるほどそれではさうか」と思つてゐる次第であつて、何となく物足りないまゝである。

幸にも讀者諸君の中で、その謂はれ因縁について、一切の事を知る人があれば、是非御教へに與りたいとお願ひいたす次第である。

それはさて置き、本文に取りかゝらう。

上手方の三八金と出て「おみき」の姿勢を取り来るや、下手方六二銀と上つて、着々自陣の整備につとめる。

そこで上手方五八玉と所謂「中住ひ」の姿に構へるのは、此の金開きにおける、唯一の手段であつて、上手方としては左右いづれとも定めず、かくの如く構へて置き、將來下手方が右から攻めて来れば左へ避け、下手方が左よりすれば、右へ逃げるといふ深算のもとに、技に置くのである。

- 三六歩 ●九五歩 ●三七銀 ●三二金
- 四六銀 ●四一玉

【講義】上手七七銀と上つたのは至當の防手であつて、如何なる場合でも、敵の飛車先の歩を簡單に換えさせる理由は無いのである。況して斯くの如き「おみき」のやうな場合は特にさうなのである。

下手五二金右と上るのは、急に攻める手段もないから、一先づ自營の整備をはかつたのである。

上手方四八銀と上つたのは漸次戦線へ輸送の目的。  
下手九四歩と突くのは、敵の端の缺陷を替めるべき仕度である。

上手方三六歩と突いたのは、銀を繰り出さんための手段であつて、下手方の模様によつては、桂の活用も意味されて居るわけである。

下手九五歩と突いて、兎も角にも何時でも、攻撃の出来るやうにして置く、申すまでもなく、どここの歩でも半ばでは役をしないのであつて、前に一手費した主意から見ても、



必十次の一手をも指し進めて置くべきである。そこで上手三七銀と上つたのは、豫定の方針であつて、漸次敵陣を攻撃の意味である。次いで下手方三二金と上つたのは、益々自陣を安全堅固

(面局の迄玉一四は圖九十七第)



にする手段である。上手方四六銀と上つて、いよいよ、三筋から戦端の開始準備が出来たわけ。

下手方四一玉と寄るのは、位を低く構へるのであつて、敵にも角の持駒があるから、その方が安全な策である。第七十九圖面以下の指手。

圖一六歩 圖一四歩 圖三五歩 圖同歩

【講義】 上手方一六歩と突くのは、模様によつて後に桂を利用して、その筋から攻撃をなさん目的であり、又一つには自陣の懐ろをひろくした手段である事勿論。次に下手方一四歩と受けたのは、その筋の位負けは、將來影響するところ、相當大きいから至當の應手である。次に上手方三五歩と仕掛けるのは、相當自分にも危険が伴ふのであるが、局面の展開上已むを得ないのである。然し危険を冒してまで、さう譜のごとく着手しないでも、他に何等か方法はないのであるか——と言へば、先づ此の場合、上手方三五歩と突く手を見合はせて、七五歩と懸か

——即ち此の上手方三五歩と突く所穩かに七五歩なら  
圖四四歩 圖二五歩 圖同歩 圖同銀  
圖三四歩 圖二六銀 圖二四銀 圖三七桂  
圖四三金 圖六六歩 圖五四歩

【講義】 下手方四四歩と突き上げるのは、次に金を四三へ上つて自陣の整備をはかるためである。

(所の歩四五は圖化變)



そこで上手方格別手もないので、三五歩と突いて先づ交



法さへとらず、穩かに對戦してゐれば、自然に指しやすい局面となり來るのである。

此の故に上手方本文に置いて、七五歩と突かず、直ちに三五歩と突いて、敵の應手を窺ひつゝ、局面の展開策を講じたのである。下手方兎も角三五同歩と應じる。

(面局の迄歩同五三は圖十八第)

星	將						將	
		馬		王		馬		
		歩		歩		歩		
			歩				歩	
香	桂		玉				飛	桂

歩角 駒持手下

第八十圖面以下の指手。

▲三五銀 ▲八六歩 ▲同歩 ▲八五歩

▲九九角 ▲七七桂 ▲八八歩

【解説】 下手方五五角と打つて兩侵入を窺ふ。

そこで上手方一旦三四歩と打つたのは、その時下手方若し一九角ナルと侵入して來れば、上手三三歩ナルと決戦に出でんとしたのである。下手二二銀と避けたのは、折角有利の棋勢であるから、敵の決戦策を嫌つたのである。

次に上手方四六銀と引く時、下手方九九角ナルと目的通り敵陣に侵入する。

上手方七七桂と避けるのは至當である。

そこで下手方八八歩と打つたのは、次に八九歩と化つて、後餘ろにそれを活躍せんとする心算であつて、下手方目下の局面は歩切れではあるが、そのと金の力が威大であるから、大いに優勢なのである。

即ち上手方としては、緩い手を指してゐて、下手方に八九歩ナル以下、八八とと活躍されては、絶対に見込みのない局面となるから、左の變化圖の場合、上手方六六角と打つ。そして下手方八九歩ナルの次ぎ、上手七五歩と突く。

【講義】 上手方三五銀と取るのは豫定の手段。

そこで下手方八六歩と突くのは、所謂「手筋」といふべきものであつて、唯一の攻撃着點である。

此のところ周章で、下手方三四歩と打つて、敵銀の退却を迫れば、それこそ上手方は幸便に、喜んで銀を逃げるであらう。上手方としては、無事に一步の交換を了せれば、既に目的に達したわけであつて、後にその歩を利用して何か策を劃し來るであらう。

故に下手方としては漫然と三四歩と打たず(此の所は上手方から三四歩と打たれても、下手二二銀と引いてゐて、王の位置が低い局面であるから、大した影響はないのである)八六歩と着手するのが至當のわけであつて、上手方は八六同歩と兎も角もとる。

但し此のところ、上手方八六同銀と取ればどうなるであらうか、又々一寸變化の道草を喰はせて貰ふ事にする。

——上手方八六同歩のところ同銀と取れば——

▲五五角 ▲二四歩 ▲二二銀 ▲四六銀

その時下手一旦九八馬と引いて後に八八とと活躍する手と、九六歩と突く手段とを見合にすれば大いに優勢なのである。たゞ右の手順中、上手七五歩の時、單に下手方八八とと引くと、上手方に六五桂又は八五桂と跳ね出されて、折角の八八のと金を没收される懸念がある。

(面局の迄歩八八は圖化變)

星	將						馬	
		馬		王		馬	歩	
		歩		歩		歩	歩	
			歩					
香	桂		玉				飛	桂

シナ 駒持手下

右變化解説の通りであるから、下手方の八六歩突きを、上手方同銀と應じるのは、大いに不利なのであつて、是れ



即ち、八六同歩と應じた所以である。その時下手方八五歩と打つのは、響き歩と稱する手段であつて、味ふべき手筋であらう。此の一步によつて、全く八筋の位を占めやうとするのであつて、上手方は三五に自分の銀がゐるために、八五同歩と取れないのである。

(面局の迄歩五八は圖一十八第)

九	香	桂	玉	銀	金	飛	香	角
八				歩	歩	歩	歩	
七				銀	金	歩	歩	
六								
五								
四								
三								
二								
一	香	桂	玉	銀	金	飛	香	角

第八十一圖面以下の指手。

そこで下手方八六歩と取り込んだのは、豫定の位取りであつて、是によつて全くその筋を征服したのである。次いで上手方八八歩と受けるのは餘儀ない防手である。

(面局の寄角八九は圖二十八第)

九	香	桂	玉	銀	金	飛	香	角
八				歩	歩	歩	歩	
七				銀	金	歩	歩	
六								
五								
四								
三								
二								
一	香	桂	玉	銀	金	飛	香	角

下手九六歩と突くのは、次にその筋から角を利用して撃つる豫備行動である。上手同歩と取る一手である。そこで下手方九八角と打つたのは、當然の攻撃法ではあ

- 三三四歩 ○二二銀 ○四六銀 ○八六歩
- 八八歩 ○九六歩 ○同歩 ○九八角

【講義】 上手方三四歩と打つたのは、四六銀と退却する前に一先づそれを利用して置く手段である。

下手方二二銀と退くのは至當の應手である。次に上手方四六銀と引くのは、下手方の八五歩を同歩と取る手段がないから、その解決を促したのであつて、又一つにはいつまで三五に置いて、格別効果ないからである。

これによつて見るに、上手方の三五歩と突いて、更に同銀と進出するのは、危険が伴ふと前に私が述べた理由がよくお判りになることと思ふ。

然しながら上手方としては、いつまでも此の三五歩を突かずにはゐては、變化にも説いた如く、漸次下手方にその陣容を整へられて、益々手詰り模様となるのである。

之を要するに上手方の陣型の不備といはんよりは、下手方がその対策よろしいといふ結果に外ならない。

るが、此のやうなところで九八歩と打つのは、緩手であると言はれやう。然し乍ら下手方九八歩と打つても、充分間に合ふのであるが、それよりも角打の方がきびしいといふ意味である。

第八十二圖面以下の指手。

- 七九金 ○八七歩 ○同歩 ○同角
- 八八歩 ○九六馬

【講義】 上手方七九金と引くのは、當然の防手であつて、下手方に八九角ナルと指されては、絶対に見込みがない。次に下手方八七歩ナルと指したのは、九八の角を運用する手段である。

上手方八七同歩と應じる一手である。その時下手方八七同角ナルと指すのは當然ではあるが、此のところ下手同飛ナルと指しては、下手方に八八金と上られ、紛れ多い局面となる。

上手八八歩と打つたのは、餘儀ない應手であつて、此のところへ下手方から歩を打たれては、大いに悪いのである。



即ち下手方に八八歩と打たせては、捨て、置けば次に下手に八九歩ナルと指されて駒損となるから、強く上手八八同金又は同銀にても、その時下手方に八八同馬と切られて、二枚換となる順であるから、上手方全滅状態に陥る。

(面局の迄馬六九は圖三十八第)

王 金 銀 馬

九	香	桂					香	桂	馬
八									
七									
六									
五									
四									
三									
二									
一	香	桂	玉	金	銀	金	銀	飛	桂
	一	二	三	四	五	六	七	八	九

歩歩歩 駒持手下

故に上手方八八歩と打つ外はないのであつて、下手方が九六馬と引いた次の第八十三圖面までとなつては、大いに優勢であつて、必勝の局面である。

右の圖面の場合、上手方としては、格別敵を攻撃するよい手段がないから、兎も角三七桂と跳ねて置くくらゐのものであらう。

その時下手方としては、今度こそ九八歩と打つて、着々攻撃の方針を探らば有利の局面であること一目瞭然。

尙又下手方一旦八七歩と打ち、上手方同歩の時、下手同飛ナルと穩かに指して置いても、飛角二枚とも化つた局面であるから大いに優勢なのである。

但し右の手順中、下手方八七歩の時、上手同歩と取らず手を抜けば、下手八八歩ナル、上手同金にても又は同銀にても今度は一問下から、下手八六歩と打ち置かば、大いに優勢の棋勢である。

### 飛落及飛香落戰の研究

昭和十年七月二十五日印刷  
昭和十年八月一日發行

定價 五十錢

編輯者 福岡益雄

東京市神田區神保町三ノ二二

印刷者 土屋弘

東京市小石川區戸町九四

印刷所 中央印刷株式會社

東京市小石川區戸町九四

東京市神田區神保町三ノ二二

發行所 金星堂

電話 九段四〇六八番  
番 東京三三二八番

1927.7.27



302  
128



302  
128



終